

博士論文

日本の「あし文化」に関する多角的研究

平成 27 年 9 月

広島大学大学院 総合科学研究科

総合科学専攻

栗山 緑

# 目次

目次 .....	1
序章 .....	6
第一節 文化的表象としての「からだ」 .....	6
第二節 「あし」の特異性 .....	9
第三節 「あし」と健康 .....	11
第四節 研究の目的と意義 .....	14
第五節 論文構成 .....	16
第一章 日本人の「あし」の特徴 .....	21
第一節 胴長短脚 .....	21
第二節 幅広の足 .....	22
第三節 小趾の単純化 .....	23
第四節 足の器用さ .....	25
第五節 考察 .....	29
第二章 歩容における「あし」 .....	31
第一節 引き摺り足 .....	32
第二節 内股歩行 .....	34
第三節 小股歩行 .....	39
第四節 つま先歩行 .....	45
第五節 急か急か歩容 .....	48

第六節 考察 .....	50
第三章 「坐」 .....	54
第一節 「坐」の意味 .....	55
第二節 日本人の「坐」 .....	57
第三節 日本人の膝 .....	61
第四節 考察 .....	66
第四章 言語的視座からの「あし」 .....	68
第一節 日本人の身体認識と「ことば」 .....	68
1. 日本人の「大まか」な身体認識 .....	69
2. 日本人の独特な身体認識 .....	71
(1) パンの耳 .....	72
(2) うどんの腰 .....	75
3. まとめ .....	77
第二節 身体語彙としての「からだことば」 .....	79
1. 「からだことば」のなかの「あし」 .....	79
2. 「からだことば」考 .....	82
3. まとめ .....	84
第三節 ことわざと慣用句のなかの「あし」 .....	86
1. 「動植物ことば」と「動植物ことわざ」のなかの「あし」 .....	87
2. 動植物語彙と「あし」 .....	90

3. まとめ .....	92
第四節 「俗語」のなかの「あし」 .....	93
1. 「若者ことば」・「新語」・「流行語」のなかの「あし」 .....	94
2. 「新からだことば」考 .....	97
3. まとめ .....	100
第五節 「歩容」語彙 .....	104
1. 「歩き」と「走り」の語彙 .....	104
2. まとめ .....	107
第六節 考察 .....	109
第五章 日本人と「あし」 .....	116
第一節 「あし」と日本人の衛生観 .....	116
第二節 「踏む」という行為 .....	123
第三節 汚い「あし」と食べ物 .....	126
(1) 餅踏み .....	126
(2) 「足踏み」(製法) .....	127
(3) 米踏み .....	128
(4) その他 Shoe Kitchen (靴修理店) .....	129
(5) まとめ .....	130
第四節 幽霊の「あし」 .....	133
(1) 幽霊の「あし」の消失に関する諸説 .....	133

(2)	幽霊の「あし」についての本研究からの一考察.....	135
第五節	他文化圏の「あし」の概念 .....	137
第六節	考察 .....	142
第六章	日本人と「はきもの」の着脱 .....	145
第一節	「はきもの」の着脱の慣習 .....	145
(1)	脱がれた「はきもの」の絵.....	146
(2)	禅語と「はきもの」 .....	149
(3)	「はきもの」の着脱の作法.....	151
(4)	他文化圏での「はきもの」の着脱.....	153
(5)	まとめ.....	155
第二節	「はきもの」の着脱の文化 .....	157
(1)	「はきもの」のための役職.....	157
(2)	「はきもの」の着脱に関する慣用句 .....	158
(3)	昔話のなかの「はきもの」の着脱.....	160
(4)	まとめ.....	161
第三節	考察 .....	163
終章	日本人と「あし文化」 .....	166
(1)	現代日本人の「あし」 .....	168
(2)	日本人と「歩容」 .....	170
(3)	坐の行方 .....	174

(4) 結語.....	176
注.....	183
参考文献.....	204
図表一覧.....	213

## 序章

### 第一節 文化的表象としての「からだ」

人間の身体は機能的に見るかぎり、いかなる人種や民族といえども、みな一様であるが、「からだ」をその文化の表象体（イメージ）という視点で見ると、多様な姿が見えてくる。些細な手ぶりや素振りを始め、それぞれの文化圏に特有な身体的動作が観察される。同じ日本人であっても、日本で生まれ育った日本人と、異文化圏で長く暮した日本人を比較すると、まさに同じような身体的特徴をもった人間でありながら、手ぶり身振りや歩き方などの動作のみならず、その身体から漂う雰囲気まで異なるのは、生活環境や文化的背景が「からだ」に直接的な影響を与えているからである。

西洋史学者である樺山紘一<sup>1</sup>も、「‘からだ’は人体としてならば、たいそう貧弱な骨組みのごときもの。しかし、骨組みに歴史・文化という肉付きがほどこされる時、ほんとうのからだになる」と述べている。さらに「古来の漢字では、からだは‘體’とかかれるが、俗説によれば、骨に歴史・文化の厚みをまとわせて、豊かになったものが、‘からだ’だ。人体の歴史的・文化的外化が、‘からだ’であるといってよい」と指摘し、漢字の成り立ちを論拠にして、「からだ」がもつ豊かな文化性を説いている<sup>2</sup>。

樺山の見解に沿うならば、当然のことながら、ヒトの「からだ」は、「文化」という生活環境と「歴史」という時間の経過とともに変遷し、また進化するものと考えてよい。

この観点に着目し、日本人の「からだ」の文化性に目を向けるとすれば、どのようなことが想起されるだろうか。日本人の慣習の代表格でもある「お辞儀」の動作、あるいは現代社会では次第に過去のものとなりつつある「正坐」であろうか。たしかに外国映画の中でも、日本人の典型的振る舞いとして、まずこの二つの「からだ」の動きが演出されることが多い。

さらに深く追究していけば、飛脚の走り方ともいわれた「ナンバ」、すなわち今日、私たちが行っている足の運び方とは異なり、同じ側の手足が同時に前に出る歩み方や、日本人女性に特有といわれた内股歩き、あるいは伝統芸能の一つである能楽における「すり足」などが思いだされる。そしてその多くの事象が、まさに「あし」に関係したものである。

そこでおのずと明らかになってくるのは、日本人の「からだ」に表出された文化性というものの多くが、じつは「あし」が重要な基盤のひとつになって繰りひろげられているという事実である。

では、現代の日本人の「あし」に関する事象には、どのようなものがあるのだろうか。健康づくりのためのウォーキング<sup>3</sup>の大流行、近年の「癒しブーム」のなかでの足つぼマッサージの人気、健康グッズとしての五本指靴下の普及、五本指シューズという異色な製品の登場、さらには女性の間では「ペディキュア (pedicure)」とよばれる足の爪の手入れや装飾がお洒落の常識となりつつあることなど、日本人の「あし」には、従来には存在しなかった新たな文化性が付与されつつあるとあってよい。

そしてスポーツ界では、「ナンバ」を一技法として練習に取り入れたことにより、陸上界や高校男子バスケットボール界でも好成績の要因となったことが報道され<sup>4</sup>、「ナンバ」に対する認知度が一気にひろまった。

またそれが契機となって、日本古来の技や術に対する関心が高まり、武術研究家の甲野善紀<sup>5</sup>がマスコミ界で人気を博することになり、彼の紹介する伝統的身体作法が現代の介護法などにも応用できることが注目された。

しかし決定的な出来事だったのは、全日本女子チームが2011年の女子ワールドカップで世界の頂点を極めたことである。それは、高等な「あし」の技術が最も必要とされる男性優位のスポーツの代表格であったサッカーで、なでしこチームの大和撫子たちがサッカーシューズを履き、迅速かつ巧妙な足さばきでボールを追い、そして蹴り、敵陣営に猛進することによって得た快挙だった。

伝統的な認識では、大和撫子の「あし」といえば、着物に「あし」全体が深く覆われて、その形は見えず、「はきもの」は草履あるいは下駄、そして歩きぶりは貞淑温良な日本女性の象徴といわれた内股歩きである。その姿は「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」と文学的に表現されたように、お淑やかな「あし」使いが何よりも重要視された。

なでしこチームの快挙は、日本の伝統文化における「あし」の常識からすると、まさに青天の霹靂というほどの驚きを感じさせるものであった。しかし思い起してみると、なでしこチームの快挙以前にも、日本女子選手によるオリンピックのマラソン競技での金メダル獲得や、マラソン世界大会での入賞は、男子よりもはるかに実績があり、フィギュアスケートやクラシックバレエに至っては、日本女子の活躍は世界のトップレベルに位置してきた。

このように、日本文化における女性の「あし」は、かつては淑やかで弱々しいものという印象が優勢だったが、最近のスポーツ界における活躍を見るかぎり、彼女たちの「あし」は諸外国の女性のそれと比しても、雄々しいものがある。

さらには「某さんの方には足を向けて寝られない」や「三尺下がって師の影を踏まず」といった慣用表現、「布団の上を踏んではいけない」や「寝ている人の枕元を歩かない」といった行儀作法が存在することから、日本人の「あし」に対する感覚には、何か特有の意味づけがなされてきたようにも思われる。

このように日本人の「あし」に関する事象や考え方に触れただけでも、日本人の「あし」に対する感覚に多様な文化性を垣間見ることができる。やはり日本人にとっては、「からだ」のなかでも「あし」こそが、樺山（2008）のいう「歴史的かつ文化的外化」がなされている特別な部位と言わざるを得ない。

## 第二節 「あし」の特異性

このように、「からだ」のなかでも「あし」を軸として見えてくる世界は、じつに奥深いものがあるにもかかわらず、この文化的にも歴史的にも多様性に富んだ日本人の「あし」の役割が、決して正当な評価を得ているとは言い難い。それはいったいかなる理由からなのか、詳細な考察が必要となる。

ヒトは、四足の脚を地につけて行動する動物から進化して、後脚の二足だけで全体重の維持および体重移動を行うようになった。すなわち、「直立二足歩行」を獲得したことで、前脚の二足を「手」として利用し、さまざまな道具を作ることが可能になったわけである。

そして、この「手」による機能的な支援がなければ、人類文明の発展はなかったといえるほど、「手」はヒトの考えを逞しく具象化してきた。その多大なる功績のゆえに、「手」は常に注目され、また大いに称賛を浴びてきたのだ。

民芸運動家として活躍した柳宗悦<sup>6</sup>（1985）も、繊細な美を見事に体現している民芸・工芸品の製作における「手」の役割を何よりも重視し、「日本は‘手仕事’に恵まれた国であり、また‘手の国’と呼んでよいくらい国民の手の器用さは誰もが気づくところである」と述べている<sup>7</sup>。

欧米社会における機械化された生産と対比して、日本人の「手仕事」に最も人間的なものを見出そうとしていた柳は、「手」がつねに「心」と繋がっていると考えていた。つまり、「手仕事」は「心」がなし得る仕事であり、その完成品である民芸・工芸品にこそ、「心」が表れていると理解したところに、柳の美学的核心があった。

確かに「手」抜きで完成できる有形物は皆無とっていいだろう。しかし、必ずしも有形とは言えないモノの創造に貢献している「からだ」の、他の部位についてはどのように解釈すればよいのであろうか。

例えば、音楽、伝統行事、風俗慣習、特殊技能といった無形文化財に指定されるような希少価値のある無形物は、いったい「からだ」のどの部分が主軸となって完成されるのであろうか。恐らく一部位のみで完成されるものではなく、複数の部位が補完的に関わり、全身の統合的な動きとなって、一つの美が誕生するのではないだろうか。本研究の言語的視座からの分析においても、「手」のみならず、「からだ」のいずれの部位も「心」と深く繋がっていることを明らかにしていきたい。

運動生理学者である大築立志<sup>8</sup>（1989）は、農耕・定着民族と牧畜・狩猟・採集民族の違いに着目して、移動が主である牧畜・狩猟生活にとっては足が果たす役割が重要であるのに対し、ほとんどが手作業の農耕生活にとっては、手の重要性が格段に高いということから、「足の西欧人」と「手の日本人」と呼んでいる<sup>9</sup>。

大築は、「衣食足りて礼節を知る」というように、文化というものはそもそも食べるものが十分でないところでは発達しないと理解する。そこでヒトが求める食糧が、地上を動き回る「動物」なのか、あるいは動かない「植物」なのかに焦点を合わせて議論を展開している。

すなわち、「動物」という移動する食糧を手に入れるためには、移動手段としての足を重要視せざるを得なかった欧米人に比して、「植物」という移動しないものを食糧にした日本人にとっては、「あし」は農作業で大地に立つための部位に過ぎなかった。それとは対照的に、苗を植えたり鍬や鎌をふるったりする「手仕事」のほうが遥かに重要視されたために、「足の西欧人」と「手の日本人」という区別をしたのである。

しかし、足は単に生産の主役である上半身を支えるものという定義を超えて、有形物創造の主役である器用な手を支えて、その動作をより確実なものとしてきた足の存在に、もっと鋭い視線を向けるべきではないだろうか。

例えば、藁で縄を編むにせよ、「あし」は「手仕事」を支える影武者のように巧みでソツのない働きをする。「あし」が、ただ単に必要な場所に赴いたりする働きだけではなく、小まめな「手仕事」を遂行するために、何ものにも代えがたい重要な使命を果たしている事実を看過するわけにはいかない。

日本人が「あし」という場合、この人体を立たせている二足の「あし」のどの部分を指しているのか曖昧なところがある。人体の「あし」とは、形態学的には胴体部分から分かれて体を支え移動をつかさどる部分をさす。その全体を「肢」、地に着く部分を「足」、その他を「脚」と呼ぶ<sup>10</sup>。

すなわちヒトの「あし」とは、胴体部を支え体の移動をつかさどる部分である「下肢」、足首から足の先端部をさす「足」、そして骨盤に股関節でつながる部分から足首までの部位から成る大腿と下腿を「脚」というふうに、明確な分類なされているのである。しかし一般的な傾向として、ヒトの「あし」には「足」・「脚」の字をあて、ほかの哺乳類の動物には「肢」、節足動物には「脚」の字をあてることが多い<sup>11</sup>。

本論文においては、「あし文化」を多角的にとらえ、足がもつ文化的要素を精査する上で、あえて「あし」とひらがな表記をするが、足の特定部位を意味する必要がある場合には、以上のような形態学的表記を用いることとする。

### 第三節 「あし」と健康

さらに「あし」は「からだ」を移動させたり、「手仕事」を応援したりするだけでなく、人間の健康維持に重要な働きをしている。そのことを確認するために、ここで「あし」の生理学的意義について論じておきたい。

直立二足歩行をすることになった人体は、「あし」を動かすことによって、心身のバランスを保つように進化してきた。この点を証明する機能の一つが「ミルキング・アクション (milking action)」である。

「ミルキング・アクション」とは、末梢心臓（心臓ポンプ）とも呼ばれ、脚の筋肉の収縮と弛緩により血管が圧迫されることによって、末梢の静脈血の還流量が増加する現象のことであり<sup>12</sup>、この機能があるがゆえに「あし」は「第二の心臓」とも呼ばれる。

この機能が阻害されると、「ロングフライト (long flight) 症候群」、いわゆる「エコノミークラス症候群」がおきる。これは長時間、同じ姿勢を続けることによって起きる肺塞栓症のことであり、積極的に動かすべき「あし」を動かさなかったために生じる症状である。震災の被災者も長期間の避難所生活によって、同様な症状に苦しむことになったことは、私たちの記憶に新しい。

震災時の被災者の循環器疾患に関する多くの研究報告をしている、新潟大学医歯学総合病院心臓血管外科の榛沢和彦は、2004年の新潟県中越地震の被災者が車中泊避難時に、肺塞栓症を発症し死亡者が出たことをきっかけに、震災後の静脈血栓塞栓症を明らかにした<sup>13</sup>。

中越地震被災者の深部静脈血栓症(DVT: Deep Vein Thrombosis)検査を継続的に行った結果、車中泊のみならず避難所でもDVT発生の危険性があることが判明し、さらに能登半島地震、新潟県中越沖地震、岩手・宮城内陸地震では避難所でのDVT発生が報告されている。

さらに中越地震被災者では、DVT保有者に震災後の脳梗塞発症が有意に多いことが判明し、震災後のDVT予防は肺塞栓症による突然死予防だけでなく、慢性期の脳梗塞発症予防に重要であることが判明した。

また岩手・宮城内陸地震では、避難所環境によりDVT頻度が異なることや、たとえ仮設住宅に入居してもコミュニティーの構築やもとの生活に近づけるなどの社会支援を行わなければ不活発となり、DVTが発生することが明らかに

なった。東日本大震災でも激甚被災地や厳しい環境の避難所で DVT が多く見つかっている。

これらの症状は、いわゆる「生活不活発病」とも呼ばれるものだが、いずれも「あし」の機能と深く関わっていることが明らかな例である。これまでの震災の経験を活かして今後の対応を図っていくべきであり、特に避難所などでは、被災者に「あし」を使った運動促進などの対策が重要となる。

平時においても、国民の約 3 分の 2 の人の死亡原因となっている癌や心臓病や脳卒中といった生活習慣病<sup>14</sup> もまた、「あし」を動かさないことで起こる弊害のわかりやすい例である<sup>15</sup>。

高血圧・糖尿病・動脈硬化・肥満・循環器(心臓リハビリテーション)などの各学会が定めている治療ガイドラインのすべてにおいて、生活習慣病の改善や予防には中強度の有酸素運動が効果的であるという記述がある。

具体的には手軽なウォーキングが強く推奨されているわけだが、現在の日本人の平均歩数を見てみると、男性は 7,000 歩弱あまり、女性は 6,200 歩余りで(平成 25 年国民健康・栄養調査結果)<sup>16</sup>、厚生労働省が目標としている歩数に男女とも 2,000 歩余り足りていない<sup>17</sup>。

平均身長から計算した歩幅から換算すると、一日 6、7 km を歩くことが目標とされているのであるが、健康状態を維持し、さらにその増進を期待するためには、男女とも一日 1.5 km ほど歩く距離が足りていないということになる。

江戸時代には、庶民が旅に出ると平均約 40 km を踏破していたとされ<sup>18</sup>、彼らの「あし」はじつに強靱であった。交通網が充実している現代社会では歩かなくてもよい生活環境になったこともあるが、今日の日本人は「あし」運動において、いよいよ怠惰となりつつある。

さらに「あし」を動かすことには、身体的のみならず精神的にも効果があることが判明している。とくに持久運動としてのウォーキングは、たとえ短期間であっても、うつ病改善に貢献するとされている。

その一例として、2006年と2007年に行われた身体活動とうつ病との関係を分析した研究論文を検証してみると、5つのすべての観察研究と、7つのうち5つの介入研究で、身体活動の実施期間の長短にかかわらず、うつ状態傾向の軽減との相関関係が認められている<sup>19</sup>。

そして、運動強度とうつ状態傾向との関係を調べた研究では、6つのうち4つの観察研究で、より活発な身体活動が低強度の身体活動よりも、うつ状態傾向軽減に強い相関関係を認めているが、大半の介入研究では、身体活動がその強度にかかわらず、うつ状態軽減に効果ありとされている。

また余暇時間の意識的的身体活動が、日常生活上の活動よりも、うつ病改善に有効とされている。確かにウォーキングやジョギングをすると、気分がすっきりすることは誰しも体験的に知っていることである。

「あし」を積極的に動かすことは、血圧の安定、血糖値の正常、精神的恒常性のみならず、老化防止、認知機能の低下予防など、「からだ」の万能薬ともいえるほどの大きな効果があることを、多くの生理学的研究が証明している<sup>20</sup>。

私たちは、改めて「あし」が「からだ」のあらゆる機能維持のための縁の下の力持ち的存在であり、健康の基盤になっていることを真摯に受け止めなくてはならない。

#### 第四節 研究の目的と意義

直立歩行を「からだ」の基本姿勢として以来、ヒトにとって「あし」は「手」の活躍を支える二次的存在であったというべきかもしれない。だからこそ本研

究においては、「あし」が生理学的にも重要な役割を果たしているだけでなく、多様な文化的要素を内包していることを再評価しようとするものである。

「手」のように見事な芸術作品を直接的に創り出すことはできないにしても、その存在価値はあまりにも大きい。とくに日本文化においては、冒頭でのべたように生活様式や伝統芸能の中で「あし」の果たしている役割は大きく、それぞれの事象について多くの卓越した先行研究がなされている。

しかし、なぜかそれらを一つの「あし文化」として、包括的な把握が試みられたことは未だかつてない。文化とは「人間の生活様式の全体を意味し、また人類がみずからの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体」という定義もあるが<sup>21</sup>、他ならぬ「あし」を駆使して無形の文化を築き上げてきたところに、日本人の「あし」の独自性が存在する。そしてその文化性は多種多様であり、「あし文化」と名付けるに値するものである。ここで、私たちが日本における「あし文化」を発掘し、その意義や継承について認識を新たにすることを提唱したい。

日本人は、二足の前脚だった「手」を巧みに動かし、世界に誇る工芸品や民芸品を作り出して来ただけでなく、二足の後脚の「あし」もまた活発に動かして、身・心・文化の育成を成し得てきた。日本人の貴重な「あし文化」を過去のものとしたり、また忘れ去ったりすることなく、この天与の「あし」をもっと積極的に使い、新たな文化の創成に挑戦していかなくてはならない。

本論文は、ヒトの「からだ」を文化的表象体とする観点から、日本人の「からだ」のなかでも、独自性の高い「あし」を対象として、長い歴史に培われた「あし文化」を多角的に論考することを主眼目とする。

この分野ではパイオニアともいえる本研究が、日本人にとっての「あし文化」の意義やその重要性を提起し、その継承と発展に貢献することができるのなら、研究者として大いに喜びとするところである。

## 第五節 論文構成

本論文の構成としては、日本人の「あし」の特徴についての考察を皮切りに、「あし」の基本的な機能である「歩容」と「坐」について論考を推進する。そして次に、「あし」に関係した「ことば」から行う言語的考察を展開し、日本人の「あし」に関する概念、および履物の着脱に関する分析をする。具体的には、本論文はこの序章を含めて、全八章によって構成されるが、その概要をここで説明しておく。

第一章では、日本人の「あし」の形態的特徴について論じる。科学的に証明された日本人の「あし」の特徴は、①胴長短脚、②足の幅広、③小趾の単純化の三つがある。

そして、「器用さ」ということも日本人の「あし」の特徴の一つであるが、その論拠が科学的に分析されたものではない。しかし、この「器用さ」に関連した文化的事象として、「足芸」をとりあげて考察する。そしてさらに「足相撲」についても、足の「器用さ」に関連した事象として論じる。

第二章では、一般的日本人の「あし」が展開する「歩容」について考察する。ヒトの歩行は、生理学的には「自然歩行」と「特殊歩行」に大別されている<sup>22</sup>。意識しないで自然に歩いている状態としての「自然歩行」の中の、特異な歩行形態である「癖歩行」を検討対象とする。

日本人の「自然歩行」の特徴については、江戸時代の庶民の歩容に精髓した谷釜尋徳<sup>23</sup>の研究を参考資料とする。谷釜（2008）は、「歩容」という生活にきわめて密着した運動にも各々の時代・地域・民族・文化などの影響によってその違いが生じるが、ある人種に特有の歩容は、同国人による判断よりも異文化の民なる外国人の目を通すことで明確になるという観点から、幕末から明治初期に来日した147の外国人見聞録を分析している<sup>24</sup>。

そしてその分析結果から導き出された幕末から明治初期の日本人の主な歩行形態は、足を引き摺って歩く（引き摺り足）、「内股歩行」、「小股歩行」、「つま先歩行」であった。

そこでこれら四つの歩行形態と、現代日本人（20世紀）の歩行形態として、生理学的<sup>25</sup> および社会学的<sup>26</sup> な分析に基づいた研究結果から名付けられた「急か急か歩行」（足早歩行）について検討を加える。

第三章では、日本人の「坐」について論じる。その際、(1)日本人にとって「坐」とは何かを、(2)「坐」の多様な形態、(3)「坐」に深く関わる「膝」の役割の三点に着目して、「坐」を考える。

(3)は、「膝」から「坐」を考察する方法で、「膝」という言葉を使った比喩表現の分析、「膝」の方言の語彙数と「あし」の他の部位の方言数の比較、『吉備大臣入唐絵』（12世紀）などの図像の中における「坐」の姿勢を例に、日本文化に「膝」が占めている位置について論じる。

以上、三章において、日本人の「あし」の形態的及び機能的な論考を総括していく。

第四章では、「あし」の言語的分析を行う。その第一として、「ことば」からみる日本人の身体認識について分析する。「ことば」からみる日本人の身体認識は、大まかであると指摘されることが多いが、その要因に関する先行研究を参照する。

さらに、「パンの耳」や「うどんの腰」に代表される独特な身体認識についても検討を加える。『日本国語大辞典』<sup>27</sup> を主たる参考文献として、体の部位名称のもつ複合的な意味と、それらが初出する文献の時期を探り、該当する語彙の歴史的変遷を考究する。

そして次に、「腹がたつ」、「肩身がせまい」など「からだ」の部位名称を使った比喩表現である身体語彙（「からだことば」）をとりあげ、言語学的分

析を加える。日本語の「からだことば」は、「からだ」のすべての部位（名称）に存在するうえ、その数は他に類をみないほど豊富にあると言われている<sup>28</sup>。

この豊富に存在する「からだことば」を考察材料とすることで、「ことば」に反映された日本人の「からだ」に対する考えを見据えることができ、これは「からだ」を文化の表象体とする本研究の視座に沿った有効な研究方法である。

研究資料としては、「からだことば」を初めて編集収録した『からだことば辞典』（東郷吉男編、2003）<sup>29</sup>を採用する。それは、「たとえことば」の用法を重点的にとりあげられたもので、その収録語彙数が約 6,000 語に及んでいる。また、ことわざと慣用句のなかに「あし」という語が使われている語彙を**渉猟**し、先人の知恵や教訓、諷刺のなかの「あし」の文化性を**追究**したい。

また、『動植物ことば辞典』（東郷吉男・上野信太郎著、2006）<sup>30</sup>と『動植物ことわざ辞典』（高橋秀治著、1997）<sup>31</sup>も参考資料とする。『動植物ことば辞典』には、犬・猫・馬や桜・松・竹など身のまわりの動物と植物からつくられた多彩な語彙 2,830 語が収録されており、日本人が身近な動植物をどのようにとらえてきたか、その言語生活の一端がわかる貴重な文献である。

一方、『動植物ことわざ辞典』には、動物 174 種、2,050 項目、植物 130 種、850 項目、類句を合わせて 3,200 項目のことわざが収録されており、本論文の研究手法にとっても有効な文献である。

そして、現代日本人の感覚が反映された「ことば」として「俗語」のなかの「あし」の分析を行う。俗語研究の第一人者である米川明彦<sup>32</sup>の『若者ことば辞典』<sup>33</sup>、『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』<sup>34</sup>、『現代若者ことば考』<sup>35</sup>、『日本俗語大辞典』<sup>36</sup>と昭和後期から平成初期の『現代用語の基礎知識』<sup>37</sup>を**参照**する。

また、日本人の歩き方・走り方の表現としての「歩容名称」の考察も加え、第二章で展開した歩容に関する議論をさらに深めたい。その蒐集に際しては、

「歩」・「走」・「足」を使った歩容名称を二つの漢和辞典<sup>38</sup>と『広辞苑』<sup>39</sup>を参考文献とする。以上をもって、第四章の言語的視座にからの「あし」の研究とする。

第五章では、日本人が一般的に「あし」を汚きものとみなす感覚を、日本人の衛生観との関連の中で分析する。文化人類学者の大貫恵美子<sup>40</sup>の『日本人の病気観 - 象徴人類学的考察 -』（1985）<sup>41</sup>に述べられている日本人の衛生感覚を参照しながら、議論を深める。

そして、日本人のもつ「汚いあし」といった否定的な概念のなかで、「踏む」ということの本義について漢和辞典<sup>42</sup>を参照する。それとは対照的に、日本人の一般認識としての「汚いあし」という概念とは相容れない事象が幾多も存在することについても論じたい。

それは、「汚いあし」と最も清潔であるべき「食べ物」とを同等に扱う「餅踏み」儀式（幼児が餅を踏んで一歳の誕生日を祝う）や「足踏み」製法（饅頭や素麺などのコシを出すために生地を足で踏んで行う）などの事象である。

さらに、日本人の「あし」の概念のなかで最も独自性の強い「あしのない幽霊」についても考察を試みる。日本の幽霊には「あし」がないことについての諸説を概観し、日本人の衛生観と照らし合わせた論考を進める。

そして、他文化圏での「あし」の概念の一例として、近年出版されたキャロル・リンツラー（Rinzler, Ann Carol）による『LEONARDO'S FOOT : How 10 toes, 52 bones, and 66 muscles SHAPED THE HUMAN WORLD』（2013）を概観する。本著には、欧米社会における「あし」の概念について詳細な議論がなされており、本研究の重要課題である比較研究資料として貴重な参考文献となる。

第六章においては、日本人の「あし」と履物の関係について論考する。「あし」には必需品である履物だが、日本には独自の履物着脱の慣習があり、それは日本人の衛生観と密接に関係したものである。

この履物の着脱には、それを専門とする役職やその作法、さらには着脱に関する慣用句・ことわざ・昔話が存在するように、日本には履物着脱に関する独自の文化が存在している。それぞれを分析することによって、履物に投影された日本の「あし文化」の多様性を探ることができる。

最終章においては、日本の「あし文化」について包括的議論を展開する。ヒトの「からだ」を文化的表象体という視座でみる日本人の「からだ」には、「あし」が多様な文化形成の立役者として働いている。しかし、今日に至るまでその功績に十分な光があてられることはなかった。その証拠に、「手の日本人」や「手の国」と、四足の脚のうち前方に位置していた前脚であった「手」の役割だけが大きく評価されている。

日本人の「あし」に対する消極的評価には根が深いものがあるにしても、全く「あし」の功績が認められてこなかったわけではない。実際に、日本人の「あし」のもつ個々の文化性についての卓越した先行研究はあまた存在する。

ただ問題は、それらを「あし文化」としてとらえる視座が欠落していたことである。終章では本研究の総括と自己評価を論述し、日本の「あし文化」再構築に向けた積極的提言をもって全体を括る。

論文の最後には、注と参考文献を添える。以上が、本論文の構成である。

## 第一章 日本人の「あし」の特徴

### 第一節 胴長短脚

まず、日本人の「あし」には、どのような特徴があるのだろうか。最初に思い当たるものとしては、「短いあし」という表現である。それは、往々にして国民的な劣等感として取り上げられることが多いのも、事実である。

多くの日本人が共有するこの「短いあし」という特徴は、学術的には「胴長短脚」と呼ばれ、モンゴロイド (Mongoloid) に多い体型といわれている<sup>43</sup>。この体型は、寒冷地帯において四肢が短いと、寒気に晒される体表面積が小さくなり、生き残るために有利な形質とされた身体的適応の結果である<sup>44</sup>。

「原モンゴロイド」は、中国から北東アジアにまで広がっていたが、最後の氷河期になって、幾つもの小集団に分かれていった。そのうち、南北アメリカ大陸に分散した人々が、アメリカ大陸の先住民である「アメリカ・インディアン」になったと考えられている<sup>45</sup>。

一方、北東シベリアに残った人々は、その南方に連なる山脈にできた氷河によって退路を断たれ、極度の寒気に直面した際に、寒地に適した文化的適応とともに、この身体的適応をも遂げたのである。

「原モンゴロイド」の彼らも、氷河期が終焉とともに南下し、東アジア全地域に分散し、「新モンゴロイド」と変容していった。その後も、胴長短脚だけでなく、平面的で幅広い顔、はれぼったい細い目、顔毛が少ないといった身体的な特徴が、寒冷地適応の名残として継承された。

しかしこの遺伝的な体型も、長い歴史を経て、栄養状態や生活環境の影響で大きく変化することになった。特に第二次世界大戦を機に、日本人の体格は格段に良くなり、総体的に「脚長」で座高の低い体型になりつつある<sup>46</sup>。

文部省（現文部科学省）が実施している学校保健統計調査の結果によれば、1955年から1999年までの35年間に、男女とも身長にしめる下肢長の割合（下肢長/身長比）の全国平均が、徐々に伸びていた。

また、男子学生（21～25歳）を対象とした過去25年間の比較調査（1988）では、身長にしめる四肢長の割合（四肢長/身長比）が高い数値となったという報告<sup>47</sup>がなされている。

以前と比べて、日本人の「短いあし」が話題となることが減少したことも、以上のような調査報告の結果に裏付けされるものと言えよう。この傾向がさらに続くと、日本人の「あし」は短いという表現すらも消えていく可能性があるのかもしれない。

## 第二節 幅広の足

次にあげる日本人の「あし」の特徴は、足の幅広である。それは、日本人の足を白人のそれと比べた際に、よく指摘される特徴の一つでもある。足の幅広というのは、足の周囲径（親指と小指のつけねにある骨の最も側方にでているところを通るようにして測った）である足囲が大きいことを意味する。

1990年以降に計測された日本人、アジア系、アフリカ系、ヨーロッパ系集団の足囲の平均値を比べた研究結果によると<sup>48</sup>、日本人の青年（19～29歳）女性の足囲は、ヨーロッパ系集団に比べて約0.5～1cmほど大きく、男性の場合はヨーロッパ系集団との差は小さい。

また日本人の足囲は、欧州人種に比べて男女ともに幅広であるが、その差は女性の方が大きく、男性は欧州人種との大きな差はない。男性は、足長（踵の最後端から最も長い足ゆびまでの足の長軸への投影長）が25.5 cm以下では、

欧州人種とほとんど変わりがないのである。そして、アフリカ系、アジア系集団との比較では、同程度かやや小さいとされている。

ヒトの足は、足長が大きいほど相対的に幅が狭くなるという「アロメトリー（allometry 相対成長：ものの大きさと共に比率が変わること）」という現象があるので、足長が大きいと相対的に足囲が狭くなるわけだ。

すなわち、身長が相対的に大きいヨーロッパ系集団と、身長が低い日本人を比べると足囲の違いが顕著になる。アフリカ系集団の詳細が明らかでないが、体格が同じくらいのアジア系集団との比較では、同程度の足囲となるのであろう。日本人青年と高齢者（60歳以上）との比較では、足長が同じだと高齢者の足囲が1cmほど大きく、ヨーロッパ系集団との差よりも大きい。

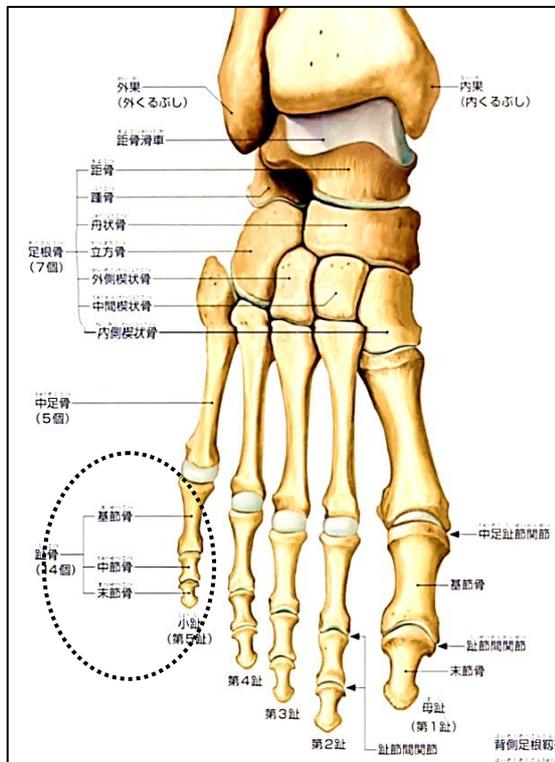
足長の大きさは、身長の伸びと比例している。それは、身長の伸びが主として下肢の伸びであり、下肢の伸びは大腿や下腿の骨が伸びたということの意味する。足長を決めるのが主として足の骨の長さに相関することから、身長の伸びにより足長が大きくなり、その結果、足囲が小さくなるという関係にある。

足長が同じ高齢者の足囲が、青年の足囲より大きいということは、高齢者（旧世代）が青年（新世代）より短脚ということを示している。近年の日本人は身長が伸び、「脚長」体型傾向に移りつつあることから、この足の幅広という特徴もいずれ過去のものとなっていくのだろう。

### 第三節 小趾の単純化

さらに、もう一つの日本人の「あし」の形態的特徴として指摘されていることは、足の小指すなわち、小趾の骨の構造的単純化である。小趾の骨の構造は、普通は手と同じように基節骨、中節骨、末節骨の三個の骨で構成されているが（図1-1：点線丸で囲んだ部分の骨）<sup>49</sup>、それが二個の骨で構成されている人

の割合が、日本人には4分の3以上の人に存在しており、欧米人が半数以下であるのに比べると、かなり多い割合である<sup>50</sup>。



(図 1-1 : 右足の骨と関節の図)

この特徴について、人類学者の近藤四郎<sup>51</sup> (1981) は以下のように解釈している。

握むという指の本来の機能からいえば、手の指と同様に親指以外の指は、三個の骨でできている方が適しているに違いなく、三本の骨が二本になるということは単純化であり、一種の退化と考えやすい。しかし、これは洞窟に長く生息するようになった動物の視力はおとろえていくが、聴覚が発達することと同様の変化で、足の小指の骨の構成の単純化も、より良い方向へ価値があるものの方へいくという意味での‘進化’の一現象である。

(『足のはたらきと子どもの成長』) <sup>52</sup>

近藤が、日本人の多くに観察される小趾の構造的単純化を「進化」と結論づけているのは興味深いですが、そのことについては、より慎重な研究が必要と思われる。

この「掴む」という機能に関連して、「比較認知科学」という新しい研究分野を開いた松沢哲朗<sup>53</sup>（2011）は、人間（ホモ属）に最も近く同じヒト科であるチンパンジー（パン属）<sup>54</sup>を例に、チンパンジーの足を見てわかるように、霊長類は四足動物ではない。手ばかり四本あるのだ。霊長類の昔の呼び名は四手類といった。なぜなら哺乳類のなかで、手が四つあるのはサルの仲間だけだからだ」と述べている<sup>55</sup>。すなわちヒトの「あし」は、もともと「掴む」という機能に長けていたのである（写真 1-1）<sup>56</sup>。



（写真 1-1: チンパンジーの足）

小趾の骨の構造の単純化も、「掴む」という機能に優れていたヒトの「あし」の一つの証拠と考えてよいだろう。単純化の痕跡は、いずれの人種にも存在するのだが、4分の3以上もの日本人の「あし」にみられるというのは、特筆に値する。ただ、その遺伝学的な根拠が、いまだ示されていないのも事実である。

#### 第四節 足の器用さ

日本人の足ゆびは、一般に白人に比べて器用といわれている<sup>57</sup>。そのような主張には科学的根拠がないにしても、足ゆびで鉛筆などを挟み、字や絵をかいたりできる日本人は少なからずいるのは事実である。

この日本人の足ゆびの器用さを象徴する事象に、江戸期に人気を博した「足芸」がある。「足芸」とは仰向けに寝て足を上げ、足で樽など大きなものを回したり、あるいは足のゆびを使って、射弓・切抜き細工・楽器演奏などをしたりする見世物興行で、「曲持ち」とも称されていた<sup>58</sup>。

当初の「足芸」を披露する曲持ちは、生まれながらにして手が不自由であり、その制約のある生活の中で身につけた足の器用さを一つの芸として披露していた。しかしその後は、身体的障害がない健常者が練習を重ねて身につけた「あし」の特異な技を披露する場合が大半となり、人気を評すると、海外でその芸を披露する曲持ち芸人が何人もあらわれた<sup>59</sup>。

『江戸東京職業図典』に、男女の曲持ち芸人の図とその詳細が記されている(図 1-2、1-3)<sup>60</sup>。「早咲小梅」という名前の曲持ちは、難波から来た小娘のように化粧をした 30 歳くらいの女性だった。手を袖の中におさめて、足で琴三味線を弾き、編み物を編み、華を生け、紙を折って色々な型の紋に切り、揚弓<sup>61</sup>、投扇興<sup>62</sup>などの芸も披露したと書かれている。

「岩本梅吉」という名の、生まれは広島、身の長僅に一尺八寸(約 60cm)ほどの 31 歳の男性は、当世一番といわれ海外遠征を果たした有名な曲持ちだった。三番叟の舞い<sup>63</sup>や、三味線弾き、髪結いや按摩の真似、折物細工など



(図 1-2 : 女性曲持ちの図)



(図 1-3 : 男性曲持ちの図)

の「足芸」を披露したと伝えられている。

「足芸」は、日本だけのものではなく上海雑技団のように、他国のサーカスでも行われているが、その芸は仰向けの状態で「あし」で物を持ち上げたり、回したり、ひいてはその上にもう一人か二人が乗ったりして、大きくて重い物を操るところに特徴がある。

「足芸」では、仰向けになることによって「あし」の位置を上部に移動させ、それをあたかも「手」のように操りながら、技を披露するところに醍醐味があった。とくに日本人の曲持ちは、字を書いたり、切り細工・折り細工などをしたりして、足ゆびを手の指のように駆使しながら細かい動きの技を演じるのを得意とした。

早咲小梅や岩本梅吉がみせた「生け花」、「楊弓」、「投扇」などはもちろん日本文化の芸であるが、こういった細やかな仕草の技ができる外国の曲持ち芸人には希少だったのかもしれない。だからこそ日本の足芸人が、わざわざアメリカやヨーロッパに渡り、その芸が大人気を博することができたのである。

日本人の足ゆびの器用さについて、柳田國男は「とにかくにわずか一筋の鼻緒をもって、これを御して行くのは練習を要することで、足の指の技能にかけては、独歩の誉れは日本人に属している」と賛辞を記している<sup>64</sup>。

戦後しばらくまで、日本人は常時、指の力を必要とする下駄や草履などを着用していたことを鑑みると、日本人の足ゆびはそういった生活習慣を通じて、器用さを獲得していったのかもしれない。

そして足ゆびの器用さが、日本人が伝統的な「はきもの」を着用しなくなった現代においても継承されているのではないかと思われる現象の一つとして、近年の「五本指靴下」の人気がある。

五本の足のゆびを手袋をはめるかのように一本づつ入れて履く五本指靴下は、鼻緒のある「はきもの」を履いている時には常に機能していた足ゆびの感覚を

想起させる。日本人は元来、履物の影響もあって、足のゆびに高い意識があるらしく、それがやがて五本指靴下の流行に繋がったと思われる。

もちろんそのこと以外に、五本指靴下の人気は、水虫や外反母趾対策、ひいては「からだ」のゆがみ矯正に効果があるなど種々の医学的効能が宣伝されていることにも関係しているのであろう。

じつは五本指靴下は日本だけのものではなく、1970年代にアメリカにおいても、「トゥ・ソックス (Toe Socks)」として女性中心に流行したことがある。色彩豊かなトゥ・ソックスは、膝下までの長さがあり、通常の靴下と比べてその斬新性ゆえに人気を得、サンダルやスリッパと合わせて履くのがお洒落とされた。

一時期には下火となったものの、トゥ・ソックスは1990年代になって再び流行し、アメリカの若い女性たちは健康法とは無関係に、ファッションとして好んだのである。このように、五本指靴下は日本だけのものではないが、履かれる文化圏によって、それに期待するものが違うところが興味深い。

最後に、足ゆびの器用さに関連する他の事象である「足相撲」にも触れておきたい。(図1-4)<sup>65</sup>。「足相撲」とは、二人が向かい合って腰をおろし、立て膝にした一方の足を、互いに絡めて相手を転がす遊びであり、「足こかし」とも呼ばれる<sup>66</sup>。図1-4のように、片足を絡めるやり方や、脛を内側に押しあったり、また足裏を合わせて押しあったりと、さまざまなやり方がある。



(図1-4: 「足すもふ」の図)

腕相撲の「あし」版とでもいえる「足相撲」の意図は、「あし」で戦うことの難しさや、その姿の滑稽さに興を感じたことにあるが、「足相撲」の奇妙さは日本以外の国でも注目されていた。

それは、イギリスでも近年はじまった「トウ・レスリング (Toe Wrestling)」のことである。イギリスにおける「足相撲」は 1970 年代に始まり、イギリス発祥の世界大会を開催するために新しいスポーツ (New Sports) として発案されたのである。

トウ・レスリングの試合方法は、裸足で両者が片脚の裏を合わせ、踵を地につけたまま、足ゆびを絡ませて相手の足を 3 秒間押さえつけた方が勝ちとなる。左右それぞれの足で行い、先に 2 勝した方が勝者となる<sup>67</sup>。

本来なら手で行うことを足で行うという「足相撲」の奇妙さへの関心は、日本でもイギリスでも共有されていたわけだが、日本の場合、江戸時代に始まる民衆への「相撲」の広がりとともに、「足相撲」も発展していった。

「足相撲」は、「明治以後も子供の遊戯として継承されており、「座り相撲」、「脛相撲」、「膝ばさみ」など、日本各地でそれぞれ異なった呼称や方法があるにしても、「あし」を使っての対一で行う「力くらべ」であることは共通している<sup>68</sup>。

## 第五節 考察

日本人の「あし」の諸相を考察した結果、形態的な特徴としては、①胴長短脚、②足の幅広、③小趾の単純化の三つがあり、機能的な特徴としては④器用さがあることが判明した。

①胴長短脚は、モンゴロイド人種がもつ体型的特徴であり、それは極寒期の環境的影響によって形成された身体的適応でもあった。しかし、近年の日本人

の体型が欧米化するとともに、この特徴は将来的には消滅していく可能性があることを指摘した。

②幅広の足は、伝統的な日本人の体型が小柄であることに由来していたもので、①と同じように過去のものとなりつつある特徴であった。

③小趾の単純化が、日本人には特に多くの割合で発生している所以については、未だ説明されていない点である。しかし、小趾の単純化が「掴む」という意味での退化ではなく進化としてとらえる近藤四郎（1981）の説とは全く異である、人体が進化の過程で脚ととらえている部分は霊長類としての「手」であったという松沢（2011）の論を示すことで、小趾の単純化が欧米人種にも少なくとも3割は存在していることの解釈を促した。

④器用さについては、「足芸」と「足相撲」を具体例として取り上げた。どちらも日本だけにみられるものではないにしても、「足芸」については、日本の曲持ちの特徴は足指の器用さを売物とするのに対し、他国の「足芸」はダイナミックで派手な技を売り物にしている点を指摘した。日本人の「あし」の器用さの要因として、日本的履物の着用が関係していることにも言及した。

以上のように第一章においては、日本の「あし文化」に貢献してきた「あし」に、いくつもの特異な特徴が存在することが明らかになった。

## 第二章 歩容における「あし」

本章においては、「あし」の最も基本的な機能である「歩く」や「走る」である「歩容」を考察する。

ヒトの歩行分類は「自然歩行」と「特殊歩行」に大別されるが、意識せずに自然に歩いている歩行としての「自然歩行」には、年齢やその人の体型などが影響するいわゆる「癖歩行」が含まれる。そこで、一般的日本人の「癖歩行」ともいうべき、日本人特有の歩容形態について考察してみたい。

歩行形態について、フランスの文豪バルザック（Balzac, Honoré de : 1799-1850）は、「人間にあってはすべてが同質であるから、歩き方も顔の表情と同じくらいには雄弁であるに違いない、すなわち、歩き方は身体の表情である」と、観相学の創始者であるラヴァター（Lavater, Kasper : 1741-1801）の考え方を紹介しながら、ヒトの様々な歩行形態について論じている<sup>69</sup>。

バルザックでなくとも、日本人特有の歩容を具に観察すれば、そこから多くの「からだ」の表情が読み取れるに違いない。

またイギリスの動物学者のデズモンド・モリス<sup>70</sup>（Morris, Desmond : 1928-）は、「歩容」とは「気分と外観に適した移動スタイル」と表現している。そして、その主要なものとして36種の歩容を提示し、この多様な歩容の違いというものは個人的及び文化的によるものであると解説しているのである<sup>71</sup>。

江戸期における庶民の歩行形態研究を専門とする東洋大学の谷釜尋徳<sup>72</sup>（2006）は、「歩容」という生活にきわめて密着した運動も、異文化から来た外国人の目を通すことでその独自性が明確になると考え、幕末から明治初期に来日した西欧諸国の外国人の見聞録から、日本人の「歩行」に関する記述を蒐集し、当時の日本人の歩容形態の特徴を明らかにしている<sup>73</sup>。

そこで彼は、147の外国人見聞録のなかから、32の見聞録に日本人の歩行に関する記述を確認し、分析した<sup>74</sup>。その結果、日本人特有の「歩容」とみなされる歩容形態には、足をひきずること（引き摺り足）<sup>75</sup>、歩行の際に音が生じること、爪先歩行、前傾姿勢、小股・内股歩行などがあると結論づけている<sup>76</sup>。

そこで本章においては、谷釜の専門的研究を参照しながら、日本人特有の歩行形態の①引き摺り足、②爪先歩行、③小股歩行、④内股歩行について考察することにする。

### 第一節 引き摺り足

日本人の歩き方は「足を引きずっている（引き摺り足）」ようであると見聞録に記されているが、その観察対象者の大半が女性である。そして、その要因は下駄の着用にあると判断しているものもある<sup>77</sup>。

洋装で靴を着用するのと、和装で日本的履物を着用するのとでは、歩く際の運動規制の度合いがかなり異なる。そのために、靴着用文化圏から来た見聞録の筆者の欧米人から見ると<sup>78</sup>、当時の日本人の歩容形態は、記録にとどめておくに値する特異な歩容形態だったに違いない。特に「引き摺り足」は、欧米人の目には相当奇妙に映ったと思われる。

「引き摺り足」歩容の要因は、確かに下駄や草履の着用によるものであるが、それは鼻緒を足ゆびで掴むことだけで履物との一体化がなされる構造になっているからである。すなわち、履物に後掛けがないために、歩む度に踵から履物の踵部分が離れ、履物の底が地面を摺り、自然に「引き摺り足」になるのである。

日本身体文化研究所の矢田部英正<sup>79</sup>（2007）も、「日本の履物（草鞋、草履、足半、雪駄、高下駄等）は道具の素材や形が導く歩き方へと身体が自然と導かれていく」と指摘している<sup>80</sup>。

このように「引き摺り足」は、日本的履物の着用起因する歩行形態であるにしても、西洋的靴文化の中で生まれ育った現代日本人にも同様な歩容がみられるのは、なぜだろうか。

文化人類学者の野村雅一<sup>81</sup>（1996）は、イタリアのボローニャ市で「ゾロゾロ」という足をひきずる音をたてて歩いているグループが日本人の旅行者だったことや<sup>82</sup>、正月時に帰省した際、道行く人が洋服と靴の着用なら「ゾロゾロ」と、振り袖に草履なら「パタパタ」とひきずって歩く姿をみて、「こういう点は感心するほどかわらないのだ」と述べている<sup>83</sup>。

「洋服」を着て「靴」を履いているに違いない日本人旅行客の足音が、「ゾロゾロ」ということは、後掛けのある靴の着用でありながらも足を引きずって歩いていることの証しであり、野村が故郷でみた洋装の道行く人の歩く姿が「ゾロゾロ」であることも、まさに人々が日常的に足を引きずっていることを示している。

しかし、同じ「ゾロ」という音が長音の「ゾロー」と単音の「ゾロ」の違いは、外国ではゆっくり歩き、国内ではせかせかと足早に歩んでいたことを意味するのか分からないが、どちらも足を引きずっているという点では変わらない。

また和装では「パタパタ」という音となるのは、恐らく草履履きのせいだろう。つまり、日本人の「引き摺り足」は着装の和洋の違いに影響されないほど、国民的に定着した習慣と言えるのかもしれない。

生理学的には、歩行形態の違いは、人種的な体型の違い、あるいは日常生活における歩行態度が関係するという<sup>84</sup>。とすると、日本人の「引き摺り足」の要因は、（1）日本人種の体型的特徴が導く歩容形態、あるいは（2）日本の履物に由来した歩容形態の日常化、という二点が考えられる。

(1) に関しては、「短脚」と他のモンゴロイド人種である中国人やマレーシア人、あるいはアメリカインディアンなどに「引き摺り足」がみられるといった資料や指摘がみあたらないことから、モンゴロイド人種に特有の歩容形態とは考え難く、(2) のある種の歩容形態の日常化による可能性が高いことになる。

一般庶民への下駄などの履物の広がり江戸期頃から始まった事実から推測すると、外国人見聞録が記された19世紀後半までに、約100～200年くらいの「引き摺り足」歩容形態の経験年数となる。この歩容形態がひとつの国民性として定着するには、十分な期間である。

この日本的履物の着用歴は、第二次大戦後まもなくまで続くので、総経験年数が400年くらいとなり、現代日本人の靴着用歴がいまだ50年余りに比べると、「引き摺り足」が洋装の現代日本人にもみられるのは当然と言える。

## 第二節 内股歩行

日本人特有の歩容形態の代表格としてあげられるのが「内股歩行」である。「内股歩行」は、貞淑温良な日本人女性の象徴とされた時代があったほど、それは倫理的模範ともいふべき歩容形態であった。そして、この歩容形態の要因が、着物着用であることは、実際に着物を着用すればすぐに理解できる歩容形態でもある。

人類学者で初代京都大学霊長類研究所所長であった近藤四郎<sup>85</sup> (1979) は、この内股歩行に関して、「いろいろな絵巻物をしらべてみたが、昔の人はみな、足をまっすぐにして歩いているように見られる」と指摘した上で、「内股」歩容の要因を、江戸期になって着物の素材が在来のさらりとした麻から、木綿や絹に代わったことに由来するに違いないと続けている<sup>86</sup>。

それは、木綿や絹の着物は着物の裾が足にまわりつくからだが、当時の歌舞伎の女形が、女らしさを誇張するために「内股歩き」をしていたことが内股歩行を定番とする決定的要因に違いないとしている。

着物の生地起因する歩行形態であるのなら、着物の形状や着装方法の違いによっても歩容形態が変わると推測される。前述の矢田部英正も、日本人の「坐り方」が服飾様式の変化と密接に結びついていることを指摘するなかで、着物の丈や身幅の変化が女性の所作に大きく影響したと述べている<sup>87</sup>。

特に室町時代の「小袖」は、丈が短く身幅が広い着物なのでゆったり胡坐をかいたりできるほど身幅が広がった（図 2-1）<sup>88</sup>。それが、江戸寛永年間（1624-1644）に幕府が反物の寸法を改定する禁令を出したことで、裁断の仕方も変化して着物の身幅が狭くなり、大股で歩いたり足を横に広げたりできなくなった。



（図 2-1：『花下遊楽図屏風』東京国立博物館所蔵）

矢田部は、幕府が反物の寸法に規制をかけたのは、特に女性が慎ましく膝を閉じて生活するように仕向けた意図があるのではないかと指摘する。さらに、女性が膝を開いて坐ることを「はしたない」と感じてしまう心理も、この禁令によって政治的につくられたものではないかと考察している。

私たちが今日「着物は窮屈だ」と一般認識していることの要因は、江戸期に始まった着物の形状の変化によって導かれた着装方法によるものであることが再認識させられた。着物はその種類によってその着装方法が異なるのであった。

しかし、女性に限定されたと一般認識されている内股歩行は、日本人男性にも受け入れられていたことは、意外と周知されていない。

明治期に来日し、薩摩の島津家の五人の子息たち<sup>89</sup>の家庭教師を7年間勤めたイギリス人女性のエセル・ハワード (Howard, Ethel : 1865-1931)は、以下のように「内股歩行」について記している<sup>90</sup>。

私は最初、子供たちがひどく内股に歩くのが不可解だった。その時は知らなかったのだが、日本の貴族社会での古くさい行儀作法では、内股のほうが行儀よいとされていたのである。最初のうちは、子供たちにこの癖をやめさせようとする努力で、他の仕事よりも何にも増して疲れ果ててしまった。

(『明治日本見聞録:英国家庭教師婦人の回想』島津久大訳)<sup>91</sup>

At first it was a mystery to me why the children had such terribly turned-in feet. I did not know at the time that it was an old fashioned necessity of the polite world for the feet of a Japanese nobleman to take this position. It tired me more than any other work at the beginning to break the boys of this habit.

(“Japanese Memories.”)<sup>92</sup>

ハワード女史は、子息たちの内股歩行の矯正に過大の努力を費やしていた。ある時、訪問者のドイツ人伯爵が、彼らが内股に腰かけていたのをみてつい「足をもっと開いて (turn your feet out)」とわざわざ注意したらしい。そのおかげで、島津家の子息たちの内股歩行も、早々に矯正されたと述べているが、恐らく島津家の子息たちにとっても、内股は窮屈に感じる躰だったに違いない。

男性の「内股」については、幕末の一年間フランス艦隊の一士官として横浜に滞在したデンマーク人青年スエンソン (Suenson, Edouard : 1842-1921) も以下のように記している<sup>93</sup>。

ところでこの靴（草履）は、軽くて快適なのは確かだが、その形は非実用的で、日本人が股を広げてよたよた歩くのはそのためである。この独特の歩き方はまた、足先を内へ向かわす。

（『江戸幕末滞在記』長島要一訳）<sup>94</sup>

この引用は、スエンソンが日本人の身なりの髪型や履物について記している箇所、草履についての説明の一文である。この後に続く箇所には、長距離歩行が必要な労働者（人夫）や旅人は靴（草鞋）の後部を足に結わえつけ、身体の動きが自由にとれるようにしているという記述があり、長距離の歩行の際には草履が紐をつけた草鞋に変わることを見逃していない。

また、草履の長所は二束三文の安価であるが、すぐにすり減ってしまうほどの耐久性の低く、町の通りに捨ててあるのを拾う者もないほどであると解説している。そして、日本人が「よたよた歩く」のは、草履の耐久性の低さや身体の動きを制限する履物であるからと分析している。

本題の内股歩行に戻ると、幕末頃までは日本人女性だけにみられるのではなく、男性にも受け入れられた歩行形態であったことが明らかになった。

しかし、この日本人嗜好の内股歩行は過去のものでなく、現代社会のなかでも受け入れられていることを証明する研究がある。

ある女子大学の学生の歩行を映像で分析したところ、7割以上の学生に内股歩行が認められている<sup>95</sup>。その内股歩行が意識的に行われたものであるかの調査は行われていないが、要因としては日本の着物などの身体文化やテレビや雑誌等の大衆メディアにみられるモデルが内股気味の立ち姿（写真 2-1）<sup>96</sup>で映っていることであると考察している。

確かに、現代のアニメや漫画に登場する「かわいい」女の子たちも「内股」の構えで描かれていることから（図 2-2）<sup>97</sup>、現代の若年女性層には内股嗜好が存在していることが窺える。



（写真 2-1 : 女性服飾雑誌の中のモデルの立ち姿）



（図 2-2 : 4 コマ漫画『けいおん！』（K-ON!）  
女子学生の立ち姿）

内股歩行は、医学的には「うちわ歩行」（写真 2-2）<sup>98</sup>、あるいは「内旋歩行（toe in gait）」と呼ばれ先天性の変形とされている<sup>99</sup>。大腿骨のねじれの角度である前捻角が大きい小学生に多く、成長につれて徐々に改善するとされている。

それゆえに成人に「うちわ歩行」が少ないのか、成人の内股歩行に関する研究はほとんどない。その上、健常成人における内股歩行に関する統計資料も見

当たらない。さらに、意図的につま先を内側に向ける内股歩行についての研究も皆無とっていいほどである<sup>100</sup>。



(写真 2-2 : 「うちわ歩行」の一例)

以上のことから、日本文化における内股歩行は女性らしさの象徴であり、また高貴な階級層においては男性にも受け入れられていた。さらに、現代社会では若年女性層では「かわいい」や「好感がもてる」という風潮があることから、「内股歩行」は日本社会のなかでは常に肯定的に受け入れられているといえる。

西欧諸国では内股歩行は男性同性愛者のように疑われる感覚とは全く異にしており、そこにも日本の「あし文化」の特異性が伺える。

### 第三節 小股歩行

小股歩行、すなわち、歩幅の狭い歩行形態は、外国人見聞録にはそのほとんどが女性に特有の歩容形態として観察されており、またすべての記録にその要因は着物あるいは下駄着用であると分析されている。一見してその要因を容易に推し量ることのできる歩容形態である。

着物を着装したことのあるものなら歩行にかなりの規制がかかることがわかるのだが、和装時に関する研究に詳しい元大妻女子大学教授笹本信子は、着物に日本の履物という和の装いが歩容に与える影響を詳細に分析している<sup>101</sup>。

その検討方法は、着物の素材・着方及び履物の違いによる歩容の変化を検証したもので、生地の違いにはウール（毛）地と縮緬（絹）地の二種類で行い、着装方法の違いには、裾先を水平にした着方と裾先の高さを7cm上げた着方（裾先上がり）の二通りである。

そして、それぞれの着装方法で、裸足および草履、下駄（駒下駄、のめり下駄、ポックリ）の4種類の履物を着用し、1歩行周期（踵着地から同足の次の踵着地までの時間：秒）、1歩周期（踵着地から反対足の踵着地までの時間：秒）、着地期（踵着地から爪先の離地までの時間）、二重支持期（左右の足の着地期が重複する時間：秒）と1歩行距離（1歩行周期の距離）、1歩距離（1歩周期の距離＝歩幅）の6項目を測定した。そして、全条件での全項目から求めた平均値と比べて分析している。

その結果、ウール地では裾線を水平にした着装では歩容に変容は少ないが、裾先上がりでは狭い歩幅で歩数がやや増えていた。

これは、裾先上がりの着装方法は、水平着装方法より身幅を絞った着装になることが影響して狭い歩幅（小股）となり、また総体的な歩行均衡を保つために（歩幅が狭くなったことを補うために）歩数が増えたのである。

絹地では、裾線を水平にした場合は歩幅が大きく歩行周期の減少した、ゆったりとした歩容になっており、裾先上がりでは小股で歩数の多い（速やかな）歩容となっていた。

この結果からは、絹地の方がウール地より足にまとわりつきやすいことを意味し、その状況では一步に要する時間が幾分必要となり、結果的に歩行の速度がゆったりとしたものになったのである。

履物による歩容の変容は、草履の着用時は速度の大きい活発な歩容となり、駒下駄の場合は、草履時に比べて歩幅、歩数ともに減少し、速度もゆっくりで裸足に近い。また、左右差がある歩幅となっていた。

この結果は、草履は素材の柔らかさと軽量さから下駄に比べて制御しやすい履物であり、足裏の保護としての存在感の信頼から、歩行に際して足裏に対する外部からの侵害を気にせずに意のままに歩むことができる状況となるので、速度の大きい歩行となることを示している。

駒下駄はその履物自体の重さや高さが歩む際の障害となって、歩幅・歩数ともに少なくなる結果を招いた。そして、駒下駄の高さと重さにうまく協調して歩むことが速度の低下を招き、ゆっくりとした歩行となった。それは、結果的に何も履物を着用してない、すなわち歩行規制のない裸足の歩行と同じくらいの速度となった。

何も歩行規制がないということは、歩幅が大きくとれるという歩行なので、総体的には速度はゆっくりとなる。また、左右差が生まれる歩幅になったということは、駒下駄は左右均等な歩幅を保てないほどの不安定さを招くために、着用の際に高度な意識が必要な履物であることを示している。

前のめり下駄の着用時は、着地期と二重支持期が裸足の時に類似しているが、歩幅と歩数は大きい値となっていた。この結果は、歩行のメカニズムが、中足趾節関節を屈曲させるということが、台材が木材である下駄であっても前のめり部が下駄の欠点を補って裸足に近い状態になることがわかった。ポックリも前のめり下駄と同じようにぬめり部が補おうとしているが、台面が床面より高くまたポックリ自体が重いために、その補足機能が生かされてなかった。

以上の結果から、着物の素材・着かた及び履物のそれぞれが歩容に及ぼす影響の程度（寄与率）を計算したところ、着物の素材は1歩行距離および1歩距離（歩幅）に若干みられ、着装方法は1歩行距離および1歩距離に高く見られた。次に歩数（ひいては速度）に影響を及ぼしてくることから、着物の着方が歩幅と歩数に高い影響があることを示唆しており、着装方法が歩容に与える影響の高さを意味している。この結果は、前節の矢田部（2011）の「着物の丈

や身幅の変化が女性の所作に大きく関係している」という言及を科学的に証明しているといえる。

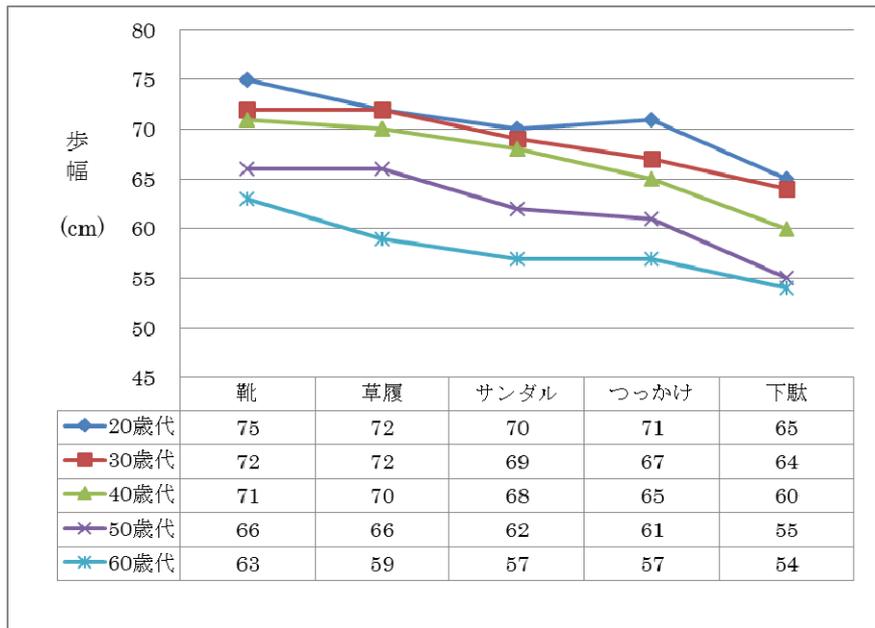
履物による寄与率は、二重支持期に最も変容を与えていることから、履物の素材である藁もしくは板がどれくらい裸足時のように中足趾節関節を屈曲させて足ゆび<sup>102</sup>の蹴りだしができるか、その高さや重さの違いによって足ゆびの第一、第二趾で鼻緒を強く挟み持ち上げて早く安定しようと離地するために両足が同時に着地する時間に影響していた。

このように、和装が歩容に与える影響は詳細かつ多岐にわたっていることが明らかになった。そして本節の主題である「小股」は、着物の着装方法と履物の種類の双方からの影響をうけた歩行形態であるといえる。

次に、履物の種類の違いによる歩幅の変容を検証した研究も参照しておきたい。

20 歳代から 60 歳代の男女を対象に、男性の場合は、靴、草履、サンダル、つっかけ、下駄それぞれの着用時、女性の場合は、3 cm 以下のローヒール靴、3 cm のハイヒール靴、5 cm のハイヒール靴、草履、サンダル、つっかけ、下駄それぞれの着用時の歩幅を測定した<sup>103</sup>。

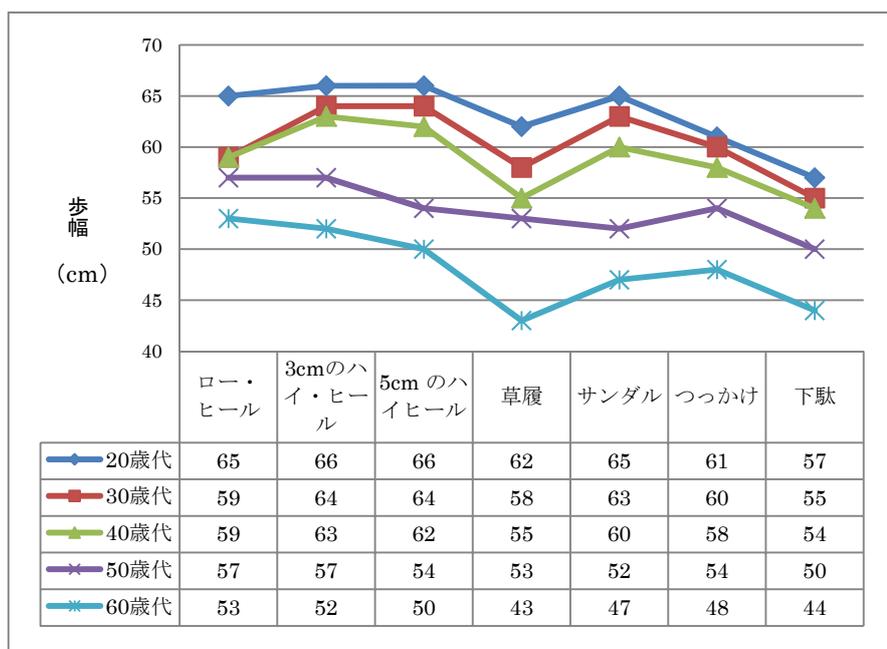
その結果、男性はどの年代も靴着用時の歩幅が最も大きく、次に草履、サンダル、つっかけ、下駄の順で、最長の靴の歩幅と最短の下駄の歩幅は、どの年代も約 10 cm の差があった（図 2-3）<sup>104</sup>。



(図 2-3 : 履物の違いによる男子の歩幅 作成 : 栗山緑)

女性の場合は、どの年代も男性と同様に靴着用時が最も大きい歩幅となるが、年代によって最も大きい歩幅となるヒールの高さの違いがある<sup>105</sup>。また、最も短い歩幅となる履物が60歳代以外の年代は男性と同様に下駄であった

(図 2-4)<sup>106</sup>。



(図 2-4 : 履物の違いによる女子の歩幅 作成 : 栗山緑)

履物の種類によってこのように歩幅に違いが生じ、男女ともに靴着用が最も大きい歩幅で、下駄もしくは草履といった日本の履物の着用が最も小さい歩幅（小股）になることが明らかになった。

以上のようにみてきた、着用品や着装方法に影響された結果である小股歩行は、引き摺り足や内股歩行と同じように、現代日本人にもみられる歩容形態なのである。そして、それは生理学的研究<sup>107</sup>によって明らかにされている<sup>108</sup>。

現代日本人の歩幅の平均は、男子では15～19歳時が最大の $75.22 \pm 7.47$  cmで、その後10歳毎に2 cmほど短くなり、70歳で60 cmを割るようになる。その後も、加齢とともに歩幅は著しく短縮する。女子の場合も、15～19歳時が最大（ $66.08 \pm 7.0$  cm）で、その後加齢とともに短くなり、70歳で50 cmを割る。そして、日本在住の欧米人と比較したところ、男子は約9～10 cm、女子は約7～8 cm短く、男女ともに欧米人と比して著しく短い<sup>109</sup>。

さらに、同歩行速度における歩幅を白人と比較すると、日本人の歩幅は約5 cm短い。歩幅は身長に左右されるので、総体的に日本人より身長および下肢長の差を規準化しても日本人の歩幅が白人より短いことは変わらない。

また、生理学的には人種の差による歩幅の違いは、①腸骨大腿靭帯もしくは膝骨靭帯の長さ、②身体の柔軟性の欠如、③日常の歩行態度の三つの要因がある<sup>110</sup>。

現段階での①と②に関する資料が見当たらないが、③の日本の着物や履物に起因した小股歩行が日常の歩行態度となって継続されていることが起因しているためであろう。

小股歩行も「引き摺り足」と同様に、現代日本人に継承されていることは、長期間にわたって継承された歩行形態であるので、靴文化のなかで生まれ育った現代日本人にみられても当然であるといえる。

日本人の靴着用歴は、戦後暫くした頃がその始まりであることから、わずか50年あまりである。何百年にわたって継承された歩容形態はすぐには、消滅することはないと考えられる。

#### 第四節 つま先歩行

つま先歩行とは、日本語の表現からするとつま先だっているような印象であるが、つま先部分（前足部）に重心をかけて歩む、あるいは着地して歩む歩行形態を意味する。

前述の内股・小股歩行と同じように、日本の履物の着用に由来する歩行形態である。それは、二本の足ゆびで履物の前方部にある鼻緒部をつかんで前進するので、必然的に体の重心がつま先部で支える体勢となって形成される歩行形態なのである。

外国人見聞録のなかでも、この歩容形態についての記述は少ないが<sup>111</sup>、随筆家ラフカディオ・ハーン（Hearn, Lafcadio、のちの小泉八雲：1850-1904）は、日本人が下駄を履いた時の歩容については巧みな表現で描写している。

人々は皆が爪先で歩いている。（中略）歩くときにはいつもまず第一に足指に重心が乗る。実際下駄を用いる場合にはそれよりほかに方法がない。なぜなら、踵は下駄にも地面にもつかないから、真横から見ると楔型に先細りした下駄に乗って足は前のめりになって前進する。一足の下駄に足をのせてだけでもなれない者にはむつかしい。でも、日本の子供たちは少なくとも3インチ（約7.6 cm）の高さの下駄をはいて、鼻緒を親指と次の指との間にひっかけてただけで全速力で走る。彼等はずまづいてたおれることもなければ、下駄が足から抜け落ちることもない。大人が履くのは木で出来た台に5インチ（約12.7 cm）もの歯をつけた高下駄で、床几の漆塗りの小型模型といった具合だが、それを履いて男たちが歩き回る格好はなお一層奇妙である。彼等は足に何もはいていないかのように大股で思うさまに歩く。

（小泉八雲・平川祐弘編『神々の国の首都』）<sup>112</sup>

The whole population is moving on tiptoe, --- and the step is always taken toes first; indeed, with geta it could be taken no other way, for the heel touches neither the geta nor the ground, and the foot is tilted forward by the wedge-shaped wooden and the foot sole. Merely to stand upon a pair of geta is difficult for one unaccustomed to their use, yet you see Japanese children running at full speed in geta with soles at least the three inches high, held to the foot only by a fore strap fastened between the great toe and the other toes, and they never trip and the geta never falls off. Still more curious is the spectacle of men walking in bokkuri or takageta, a wooden sole with wooden supports at least five inches high fitted underneath it so as to make the sole structure seem the lacquered model of a wooden bench. But the wearers stride as freely as if they had nothing upon their feet.  
(“Glimpses of unfamiliar Japan”) <sup>113</sup>

ハーンが、日本人の下駄を履いての歩容をじつに興味深く観察していたことがわかる。靴文化の西欧人の目には、当時（明治初期）日本人が、とても高度な技術を要する履物を見事に履きならしていると映ったのだろう。

外国人ではなくても、日本古来の履物を着用する機会がほとんどなく靴文化のなかで生まれ育った現代人にとっても、下駄歩行は苦痛が伴う履物という感覚があり、またつま先歩行とは無縁のような認識がある。

この履物に由来すると理解されているつま先歩行であるが、違う要因の可能性も指摘されている。

それは、弥生時代から古墳時代までの日本人の足跡研究からの示唆で、古代の日本人の足の五趾が扇のようにひろがり、踵の部分が小さくとがっていることが判明しているのである<sup>114</sup>。それは、中足指節関節に力をいれて前傾姿勢で立っていたことを示しており、当時の日本人もつま先重心での立ち構えだったことが推定できるのである。

時代を下って平安期以降になると、足ゆびの間が狭まり、踵の部分も丸く大きくなって、現代人と同じような足跡になっている。それは、裸足の生活から履物着用の生活になり、たとえそれが鼻緒を足ゆびだけで掴んで前進するものであっても、裸足で歩行していたころに比べて、それほど足ゆびを広げて地面を掴む必要はなく、また足裏の履物が外部からの障害の保護機能として存在す

るので、体重を踵部分にかける割合が増えても害が少ない。それゆえに踵部分の足跡が丸く大きくなって、過重が増大している姿勢となったのだろう。

しかし、日本人は元来つま先重心の体勢であった上に、日本の履物を着用するになっても、その構造上の特徴から、つま先重心を保持する歩行形態だったのだ。

日本人が踵着地に移行する契機となったのは、明治期からの学校教育での軍隊訓練的な歩行運動のためと思われる<sup>115</sup>。導入当初は、フランス式の軍隊教練に倣って、手は左右交互に振り、膝を曲げずに足を前方に出してつま先から着地する「伸脚行歩」であったが、大正期になってなると、体操と軍事教育目的の教練とを分離して、つま先着地が継承されつつも踵着地の指導書が登場した。そして、昭和期には踵着地で左右反対の手足を出すという西洋式歩行が確立し指導されることになった。

以上のような教育上の変化によって、日本人の踵着地の歩容形態が形成されることになったのだが、日本人の踵着地の歩行形態歴は大正期を起源とすると、100年未満の期間となる。

現代日本人は、「引き摺り足」や「小股歩行」などの日本人特有の歩行形態を継承しながらも、「踵着地」の歩行形態に関しては比較的短期間で身に付けている。それは、1970年代にランニング・シューズの開発によるクッションの利いた厚底の靴が着用されるようになったことが大きく影響している。クッション性のある厚底の靴の形態は、ランニング以外にも腰や膝への衝撃が少ないということで、あらゆる靴に適用されることになったことが、踵着地の歩行形態の定着に大きく影響している。

しかし、この踵着地に移行した結果、ランニング中に膝や腰を痛める者が増えるようになったのは、歩行時と違って走行時には体重の三倍の荷重となるからである。つま先重心で走っているころは、そのような不均等な荷重とならなかったのだ。

このような事実がありながらも、踵着地は「正しい歩き方」ということで、ウォーキング教室などでは指導されているのは、問題である。

さらには、2004年にイギリスの科学雑誌 *Nature* に、古代人の「歩容」に関して画期的研究が発表された<sup>116</sup>。それは、古代人の走法の研究から人間は本来、中足骨部分から着地する走法（fore-foot strike）であったことが証明されたのである。

すなわち、日本人のつま先重心の歩容は、ヒトの本来の歩容形態であり、日本の履物はその自然な歩行形態を保持させることができ、ヒトとしての「からだ」の健全な体勢を維持することのできる履物であった。それは、武術研究家の甲野（2006）が述べているように、動物の多くが骨格的につま先で立っているのは、脚の形態上の理由により踵部分が地面よりかなり上部に位置しているからでもあるが、踵をつけて歩くのは人間だけであり<sup>117</sup>、動物としてはつま先重心歩行が自然であることを示唆している。

## 第五節 急か急か歩容

第四節までで、異文化圏の人間の目を通して明確になった日本人の歩容特性を考察してきた。本節では、現代日本人の歩容形態について科学的に分析されて明らかになった歩行形態について考察する。

第三節において、現代日本人の歩幅の大きさについては生理学的分析によって示されていたように、欧米人と比して男子は約 9～10 cm、女子は約 7～8 cm 短く、男女ともに著しく短い歩幅であった。

さらには、歩行速度と歩数の関係においてみると、同じ速度であれば日本人の歩数が断然多いので、すなわち早足に歩いていることが分かる。社会学的調

査によっても、実際に日本人の歩行速度が他文化圏の人よりどれほど早いかが明らかにされている<sup>118</sup>。

アメリカの心理学雑誌 *Psychology Today* (1985) に、世界 6 カ国 (アメリカ、イギリス、中国、インドネシア、イタリア、日本) の都市で ‘the pace of life’ (生活速度) の比較調査結果が掲載されている。歩行速度に関しては、100 feet (約 30.48m) の距離を歩行者がどれくらいの歩行速度で歩いているかを測定したところ、日本人 (東京と仙台) が 20.7 秒 (88.3m/分) で最も速く、次にイギリス人 21.6 秒 (84.7m/分)、アメリカ人 22.5 秒 (81.3m/分) と続いた。ちなみに、時間の正確度、郵便局で切手を売りさばく速さにおいても日本が一位となっていた。

また、東京と横浜で欧米人と目される外国人と日本人との歩行速度の比較調査を行ったところ、体格の小柄な日本人が外国人と遜色ないスピードで歩いていることが報告されている<sup>119</sup>。

そのほかにも、歩行速度を「社会的速度の指標化」(ある目的を達成するのに必要な時間 ‘Social Speed’) の一つとして、パリ (フランス)、マニラ (フィリピン) を含め、日本の 18 の県庁所在地で測定した。その方法は、10m を歩く時間 (秒) を、あらゆる年齢層が含まれるように男性 (社会活動の最も活発な年代の最も普通の状態とするため) の通行人約 200 人を対象に、人通りが過剰な時間帯を避けた午前 11 時前後と午後 3 時前後に測定されている。

その結果、上位三位は大阪 (100.2 m/分)、東京 (93.6 m/分)、長野 (91.8 m/分) で、パリ (87.6 m/分) は 7 番目、マニラ (74.4 m/分) は、最も遅い福島県桑折町 (69.6 m/分) の次であった。他の日常的行動も日本が一位であった<sup>120</sup>。

以上のように社会学的調査の結果からも、日本人の「早足歩行」が明らかにされている。そして、それは文明化・近代化の重要な指標である「社会的速度」

(Social Speed) からすると、日本人の時間短縮行動傾向の一つであり<sup>121</sup>、文明化及び近代化を象徴しているのである。

生理学的および社会学的分析から、現代日本人の歩容形態が狭い歩幅で歩数の多い早足歩行であることが証明され、双方の分野から「急か急か」歩行と呼ばれるようになった所以である。

この「急か急か」歩行は、日本人の昔の歩容形態である小股歩行から逸脱できず、昔は着物や履物の規制で歩数を増やして目的地達成には「足早」にならざる得なかったのが、現代では高速化の社会の風潮にあわせるために歩数を増やし、「急か急か」と「足早」にならざるを得ない必然的結果と言える。

また、そのことは現代日本人の精神性にも少なからず影響を与えていると思われるが、歩行速度と精神安定度の相関性についての先行研究は、いまのところ見当たらない。

## 第六節 考察

五節までにおいて、日本人特有の5つの癖歩行に関して考察したが、日本人のようにこれほど多様な癖歩行を有している人種は、他にいるのだろうかという疑問が湧いて来る。履物や着物に起因したいくつもの特有な歩容形態をもつ日本人は、その多様な歩容形態のなかに、ひとつの文化を形成していたことも見逃せない。

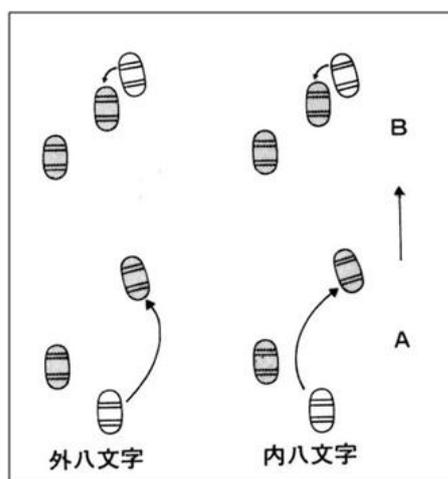
「引き摺り足」歩容は、江戸吉原の高級遊女である「花魁（おいらん）」のなかでの美の歩容として進化した。それは、花魁が揚屋と妓楼とを行き来する行列である「花魁道中」の際に行なう「八文字」という歩容で、この歩き方を「八文字」というのは、着地した時に爪先が内向きで踵が外に開いているため、そのまま両足を揃えたら「八」の字形になるからである。花魁道中では、花魁

たちは片手を若い衆の肩に置き、片手は張肘をして目線を中空にすえて行う「八文字」を踏むのである（写真 2-3）<sup>122</sup>。

「八文字」は、後に二種類に分かれた。「内八文字」と呼ばれる京都島原で好まれた「八文字」では、内股を摺り合せるように踏みだして踵を外へまわし、一端着地した足を半歩引いて正しく正面に向ける（図 2-5）。



（写真 2-3：祭のなかの花魁道中）



（図 2-5：「八文字」歩容の踏み方）

そしてもう一つの「八文字」は、「外八文字」といわれ吉原の太夫丹前勝山<sup>123</sup>が創始したといわれ、踏みだしに腰を落とししかげんに股を割って大きく外へ廻しこみ、その際股の衣服がはだけて白粉をぬった内股が緋縮緬の二布（腰巻）を割って見え、大名行列の槍持に似た足運びで勇壮な男歩みで、吉原遊女の意地と張りを象徴したものであった<sup>124</sup>。

花魁道中には江戸中期以降は塗りの高下駄と決まっており、この演技ともいえる歩容は、三年は稽古しなければさまにならなかったというほどの高い技能を要する歩容であった。

ところで、つま先歩行に関しては、興味深い俗信が伴っている。それは、「お引きずり女は嫁にもらうな」というもので、「つま先重心」歩行が基本の下駄で、後ろの歯ばかり減る履き方をする女性は、重心が後ろにかかり、引きずったような歩容になる。「あし」の前方に体重がかかる体勢が自然であるのに、重心が後ろにかかっているということは、どこか身体が悪いから‘後ろ重心’になっていると解釈し、それは女性にとって丈夫な子供を産めないとされていた<sup>125</sup>。

日本人は健康体というものの姿形から理解していたといえるのであるが、さらに詳細に性格まで投影していたともいえるのが、「下駄の前歯のちびるのはせかせかと気ぜわしく、小心者とかカンシャク持ちで、後歯の組は反対に大人物」と冗談半分に性格判断の材料とされたと書かれているが<sup>126</sup>、行動から性格を見通す観察力も持ち合わせていたといえる。

さらに、外国人見聞録のなかにも言及されていたことだが、日本人は歩行時の「音」ということについても、文化的意味を付与していた。たとえば、雪駄に付けた破損防止のための「尻鉄（しりがね）」という鋏から発する「チャカチャカ」という音や、女性用の高下駄である「ぽっくり」<sup>127</sup>から鳴る「ポックポック」という音に興を感じ、子供用のぽっくりの音には、魔除の願いを込めていたというのは、その子が歩くたびに鳴る「ポック・ポック」という音が、魔物がその子に近づくことを恐れる魔力をもったものと信じていた。

さらには、女性用の「引き摺り下駄」では摺る音を出すことが歩き方の粋とされていたことである<sup>128</sup>。

以上のように、かつて日本人は自らの歩容特性を客観的に認識し、その意味を考え、また興や粋として捉える感性を持ち合わせていた。それはまさに日本

の「あし文化」を形成する重要な要素として、もっと正当な評価を受けるべき価値観でもあった。

しかし、この豊かで貴重な「あし文化」が、過去のものとして忘れ去られていく傾向にある。それは、現代日本人が伝統的な履物を着用する機会が減っているだけでなく、あまりにも乗り物に依存し、自分の足で歩かなくなっていることに原因がある。「あし文化」の衰退に伴って、健康上の問題を引き起こすだけでなく、日本人の繊細な感性が鈍化してしまうことすら危惧される。

### 第三章 「坐」

「あし」の基本的な機能である「歩容」は、「からだ」の移動ということに主眼が置かれている。それとは対照的に、「あし」を折敷いて床に腰をすえる「坐」は一所にとどまることを目的とする姿勢であるが、「あし文化」から見る日本人の「坐」とはいかなるものであろうか。

現代日本人の生活から伝統的な「坐」が消えつつあり、椅子が「坐」の主流となり、床に「すわる」から椅子に「すわる」となっている。当然のことながら、こういった生活形態の変化は、「あし文化」にも大きな影響を与えているはずである。

今日私たちは、「すわる」というときには「座る」という字を用いるが、「座」という字はもともと「すわる場所」という意味で名詞的に用いられる漢字であり、そして、「坐」が「すわる」という動詞的な意味で用いられていた。

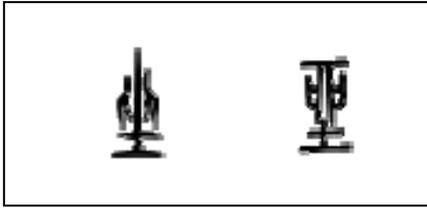
「座」という字は、部首の广（げんぶ）と音符「坐」の会意兼形声文字で、家の中で人のすわる場所のこと、もしくは平生起居するところの臥席（ねござ）を意味した<sup>129</sup>。そして、声符である「坐」は本来神の座を意味し、神を一座二座と数え、星も星座・御座というのは神の住むところとする観念があったからだ<sup>130</sup>。

また、会意文字としての「坐」は、「土」＋「人」＋「人」から成りたつ文字である。それは、神を迎える場所である「土」の上に、左右に人が対坐して訟事を決することを意味しているのである。

「坐」の説文には「人が地上にしりをつけることを示す。当事者として裁判にかかわることを‘坐’、訴訟の関係者を‘座’といい、すわって身丈を短くする意を含む」とあり<sup>131</sup>、「坐」は元来、裁判用語であった。

会意文字からみる「坐」の原型のなかの二人の「人」は、両手・両膝を地について跪いている姿勢である（図 3-1）<sup>132</sup>。地に膝や尻をつけて身を低くす

るという姿勢は、その土地の神に敬意を表していた。このように漢字の成り立ちからみる古代中国における「坐」の意味は、あくまで敬意の表意だった。



( 図 3-1 : 説文解字の「坐」)

本章においては、第一節では日本人のとしての「坐」にどのような意味であったのか、第二節では日本人の「坐」の形にはどのようなものがあるのか、そして第三節では「あし」を折敷いて形作られる「坐」を「膝」から考察する。

### 第一節 「坐」の意味

日本人の「坐」の姿勢が確認できる最古の文献は、『魏志倭人伝』（紀元3世紀）で、身分の低い下戸が身分の高い大人に道で出会った際に道から退いて道端の草むらに入り、言伝を伝えたりお願いしたりする時に行われた姿勢で、蹲ったり跪いたり、地に膝や手をつけて敬意を示した<sup>133</sup>。

『日本書紀』（8世紀）には、跪くことや跪礼、身を伏せる匍匐礼（ぶふくれい）をやめて立礼とする勅令がわざわざ出されていることから、地に跪く姿勢が日本人にとって敬意を表す姿勢であったと理解できる。そして『続日本紀』に再度詔が出されるほど、跪伏の礼が主流であり、敬意を表意する姿勢として跪くことが慣習化されていた<sup>134</sup>。

動物学者のデズモンド・モリス（1969）は「膝を地につける低姿勢は、優位な個体に対して体をより低くすることによって服従を誇示するなだめの信号であり、ひれ伏したり平伏するのは、うづくまる行動を様式化したものである。

その弱い形が跪いたり、腰をまげるお辞儀などにあらわれている」<sup>135</sup>と説明している。

この箇所を引用して、フランス文学者で評論家でもあった多田道太郎<sup>136</sup>（1972）は、地に坐して身を伏せる平伏の姿勢について「人間の最大の弱点である後頭部を曝け出し、顔を伏せて視覚情報を遮断する動作で絶対服従および最高の礼（儀）を意味する動作である」と述べている<sup>137</sup>。

さらに「平伏」姿勢は、「横になる」姿勢である「臥」に比べるとより社会的で、社会という集団組織を組むための姿勢である「立」（姿勢）に比べると社会と生命の根源の間にある待つ姿勢（待機の姿勢）である。それは一国の文化の「態度」がよく表れていると続けている<sup>138</sup>。

「あし」を曲げ、膝をついて形作る「坐」や「平伏」姿勢は、動物として本能的に相手に対して降参や服従の意味を表し、さらには平伏している相手の指示を待ち、いつでもその指示通りに動ける体勢の待機姿勢で、最高の「礼」をつくした姿勢なのである。

以上のように見てくると、日本で「正座」姿勢など「坐」を文化の基盤姿勢としていることは、すなわち「礼」を基盤とした社会であった。

文化人類学者の河野亮仙（1999）は「概していうと、インドから太平洋地域一帯の、日常的に床や地面に直接すわる習慣の社会では、人と人との相互関係が空間的な上下関係に翻訳される作業がひろくみられ、相手に敬意を示すためには四つん這いになったりして身を低くすることになる」と述べ<sup>139</sup>、物理的な上下の位置移動が人間関係に投影されているという。

日本文化の上座や下座などの「上・下」文化を表わす行為は、まさに河野（1999）が指摘する空間的な上下関係に翻訳されている。

では、現代日本人の生活から「坐」が消えつつあるのは、人間関係の翻訳であった「上・下」関係が消えつつあることが投影されているとみると、まさに

「坐」という一つの「からだ」の形が、現代日本の風潮を如実に体現している  
ようで興味深い。

## 第二節 日本人の「坐」

日本人の座り方（「坐」の型）は、胡坐や正座、座禅時の結跏趺坐など幾通りも存在する。この幾多もある「坐」の形を包括的研究として最初に発表したのが医学博士である入澤達吉（1920）であった。

入澤は自分の専門外の研究であることを前置いて、日本人の「坐」をまず大きく三分類し、そして八つの個々の形にあてはめることができたとした。その詳細は以下の通りである<sup>140</sup>。

### <三種の跪坐>

跪の一：頭から膝までを一直線にのぼし、膝を直角に折って坐る。尊敬を表す姿勢

跪の二：日本流の正坐の形で足の指を立てて両踵で尻を支える姿勢

跪の三：しゃがむ、うずくまる姿勢

### <八種の坐法>

①結跏趺坐：坐禅時の座り方で、左右の足の甲（趺）を左右の反対側の腿の上  
にのせて安坐する

②半跏趺坐：坐禅時の座り方であるが、片足だけ腿の上に置いて安坐する

③胡坐：あぐらかき

④箕踞：なげあし（長坐）

⑤立膝：両膝立、片膝立（「歌膝」と称することがある）

⑥楽坐：足の裏を合わせて坐る

⑦割坐：両足部を太ももの外側に出して尻を直接床につけて坐る（亀居）<sup>141</sup>

⑧正坐：真坐（端坐）

この分類を発表した当時（大正9年）は、正座が日本人の日常の基本姿勢でありながら、「日本人が日常家庭で‘正座’をして坐ることは何等不思議なことではないが、外国人にとっては頗る奇異なことで、中国の纏足や、インド・オセアニアの人々が鼻や耳に穴をあけて宝石を飾る風習などと同様に世界

の珍風俗の一つとして数えられるのではないだろうか」と自国の慣習を客観視した<sup>142</sup>。

すなわち、この「正坐」は当然のことながら異文化圏の人にとっては至極異質な姿勢であったに違いないが、幕末期に開港を求めて来航したペリー提督<sup>143</sup>もそのことに関して詳細な記述を残している。

上位の面前で下級の者が踞る姿勢は、日本人にとっては大変容易なやうに見えるが、慣れていない人が、その姿勢をとることは、非常に困難であり且、苦痛であらう。普通に行はれる方法は、跪いて、足を組み、踵を裏返しにして、趾と足の甲と脚の腓をしつかりとくつける方法である。

(『ペルリ提督日本遠征記(三)』)<sup>144</sup>

The crouching position in which an inferior places himself, when in the presence of his superior in rank, seems very easy to a Japanese, but would be very difficult and painful for one to assume who had not been accustomed to it.

The ordinary mode pursued is to drop on the knees, cross the feet, and turn up the heels, with the toes, instep, and calves of the legs brought together into close contact.

(“Narrative of the expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan.”)<sup>145</sup>

ペリー提督が来日した幕末期には、「正坐」が庶民の生活のなかで定着していたことが読み取れるのであるが、では「正座」の起源はいつ頃で、また何故にそのような姿勢をとる必要があったのであろうか。

正座の源流についての先行研究によると<sup>146</sup>、最古の「正坐」が表現された遺物の資料は縄文晩期後半(BC500年頃)の土偶で、祭祀遺構で出土していることから神聖な場にふさわしい坐法だったことを示唆している<sup>147</sup>。

古墳時代には、墳墓のなかの埴輪の一つに正座をした巫女像があり<sup>148</sup>、奈良時代初頭の法隆寺五重塔初層には多数の「正坐」坐法の塑像群がある。そして、『古因果経』(8世紀末～9世紀)のなかにも王の側に侍す臣下の者たちや仏陀に帰依する人々などに「正坐」の坐法がみられるようになる。

平安時代(10世紀半ば)の神社の神像に正坐の形があらわれたのは、敬意を表わされる側も下位の者から敬意を受けるときには「正坐」が当然と考えら

れるようになった考えることができ、『仏涅槃図』（11世紀後半）には、釈迦の入滅を悲しむ弟子たちの中に正座がみられる。

法隆寺聖霊院内の聖徳太子像に近い二体の像も正座形で（12世紀初頭）、『十二因縁絵巻』には王の問いに答える羅刹が正座で描かれている。

以上のように、古代から「正坐」は一貫して敬意の表現として行われていたことが窺えるのである。

そして、庶民の中に「正坐」がみられるのは、『年中行事絵巻』（12世紀半ば）のなかの祭行列を眺めている庶民や、同時期の『鳥獣人物戯画』にも娯楽の場面で見物する人々の中に「正坐」がみられ、一般庶民の日常生活の坐法となっていく原形みることができる。

「正坐」が礼法としての祖型をあらわしたのは、江戸期の元禄・享保からとされているが<sup>149</sup>、それは徳川期の身分関係の強化に従い、礼式が極端に厳しくなったことと、茶の湯や華道、芸道等の発展と普及が影響したといわれている<sup>150</sup>。

しかし矢田部（2011）は、茶の湯において私たちが今日「正座」を正式な姿勢としているが、茶の湯の作法が成立した当初の正式な坐り方は「立て膝」であったと述べている。

室町期ぐらいまでは、着物の形状が今日とは違ってゆったりとしたものであることから、女性は様々な坐り方を自由に行うことが可能であったし、男性も袴のなかで多様な坐り方をしていた。それが、徳川期幕府の厳しい管理体制の中で、忠誠を誓う大名たちにとっては、慎ましく膝を閉じた「端坐」すなわち「正坐」が最適な「坐」となった。そして、「正坐」が正式な作法となる契機が、明治期から始まった礼法教育であった<sup>151</sup>。

「正坐」という名称も、大正期になってから礼法教科書に「正坐」という言葉が使われたことで、その作法とともに定着し今日に至っている。

宗教学者の山折哲雄<sup>152</sup>（1981）は、茶道で礼法性が重視された「正坐」にこそ、日本の「坐」の独自性があるという。なぜなら、「正座」が対坐における開かれたダイアログ（dialogue：対話）の姿勢となり、その真意が「茶室のせまい空間に対坐する主人と客が、脚を折り敷き、脚の形を空無化することによって、はじめて、宇宙の広大な奥深さを感じし共有することが可能になり、脚部を大地そのものに重ねあわせることによって、自然のうちに憩い、抱かれ、しずかに呼吸することを対坐で行うからである」と述べている<sup>153</sup>。

またそれは、坐禅の正式な坐法である「結跏趺坐」（両足を反対側の腿に載せて坐る）が身心の全体が垂直に安定し、上体が宇宙軸と大地の地軸に直接つながっている一方、「正坐」はいつでも上体をおこして水平に移動できる即応性のなかで安定しかつ他者を意識し他者へと向かう姿勢だからである。

先述の多田（1972）の日本人の「坐」が待機の姿勢であるという考え方と一致する見解である。

このように、「坐」は一所にとどまるという姿勢でありながらも、日本人の「坐」には待機の姿勢という要素があるところに独自性が認められるのである。

山折（1981）のいう茶道における待機は、主人あるいは客人のための待機であり、多田（1972）のいう待機は平伏している相手への待機である。

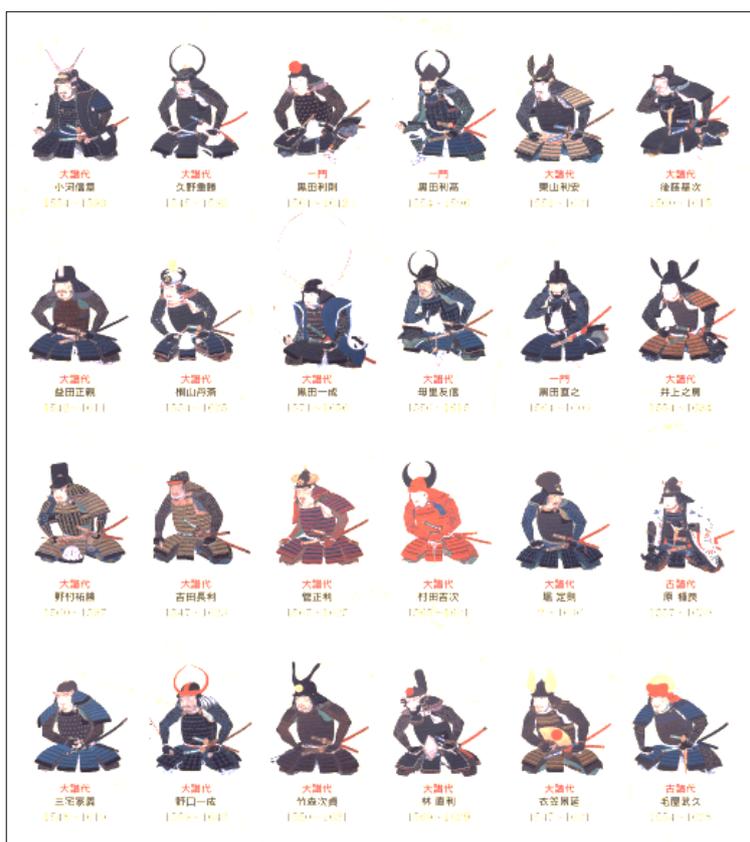
さらに付け加えるとすると、武士の「坐」にも主人への待機の要素がある。その姿顧みることができる一例として、福岡黒田藩の二十四騎の図を挙げよう（図 3-2）<sup>154</sup>。

黒田藩の二十四人の「あし」を折敷いて形づくっている「坐」の姿勢は、それぞれが違う形で、24種類の型ともいえるのだが、どの形も今にも動き出しそうな姿が誰の目にも明らかな「坐」、すなわち待機の姿勢なのである。

絵画から読み取る日本人の待機の「坐」であるが、武士の刀の技の集体系である居合道の「座り技」もまさに、刀を抜く機を窺う待機の「坐」なのである。

現代までに息づく居合道（術）の流派の数は数えきれないほど多いといわれる。

日本人の待機の「坐」の形も多種多様であるといえる。



(図 3-2: 「黒田 24 騎図」)

### 第三節 日本人の膝

「あし」を折敷いて形作る日本人の「坐」の形は幾種もあり、その中でも「端坐」である「正坐」が広く一般化し、また日本の「あし文化」の基盤となった。

明治期の礼法教育の影響で正式な作法となった「正坐」であるが、日本人の生活の基盤姿勢となっていた。その浸透度が如何に高いものであるか語るものがある。それは、「膝を交える」や「膝をくずす」などの「膝」という言葉を使った慣用句である。

これらの慣用句は、「坐」姿勢を前提として比喻表現されたものなので、

「立」姿勢から理解しようとしても全く意味がなさない表現なのである。

そこで、このような「坐」姿勢が基盤となった比喻表現を蒐集したところ、

11 語彙を確認した<sup>155</sup> (表 3-1)。

	語彙	意味
1	膝突き合わす	相手と膝が触れ合うほどの近い距離で話をする。じっくり話し合う
2	膝を寄せる	
3	膝詰め談判	膝と膝とを寄せ合うことから、話し合いなどで相手に強く迫ること
4	膝を進める	座ったままで、前ににじりでる。話題に乗り気になって身を乗り出す
5	膝を乗り出す	
6	膝を促す	
7	一膝乗り出す	あることに乗り気になって、ちょっと身を乗り出す
8	膝を交える	同席し互いに打ち解けて話し合う
9	膝を崩す	正座していた足を崩し楽な姿勢になる
10	膝を揃える	きちんとした姿勢で座る
11	膝を正す	

(表 3-1: 「坐」姿勢が基盤となった語彙 作成: 栗山緑)

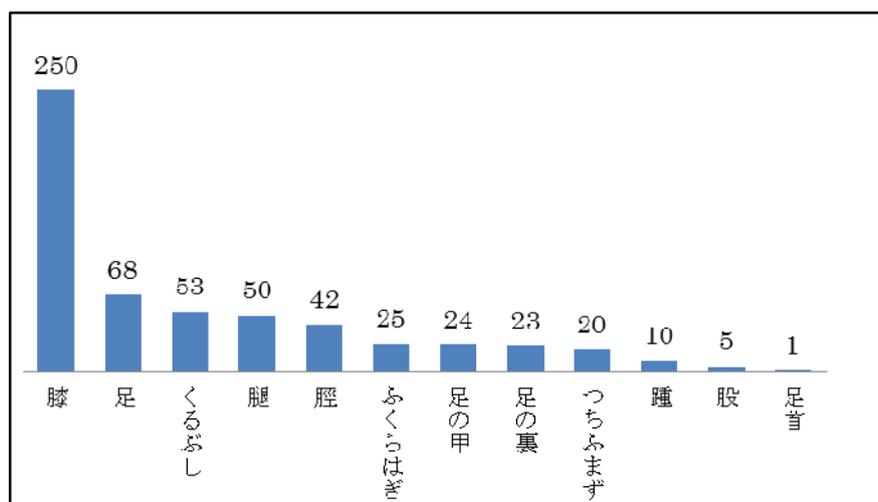
このような比喻表現を、英語と日本語とで検討している 柳瀬、ジュエル (1990) は、「畳の生活を基盤とした伝統のなかで‘膝’が対人的に最も相手に近い身体部位であることから、この部位をもって人間関係を象徴させようとした、日本の畳の文化を反映している」と述べている<sup>156</sup>。

日本の「坐」の文化は、畳の登場によってさらに浸透することになるのだが、今日のように住宅から畳の部屋が消滅していくと、上記のような慣用句の意味することが困難になるのは当然である。しかしここで気づくべき点は、「坐」の生活で「膝」との親密度が薄れていくことである。

「膝」は、「膝小僧」を始めとして、「おぼ一さま」<sup>157</sup>、「ひざぼ一ず」<sup>158</sup>、「すねきつあん」<sup>159</sup> など、愛らしい名前と呼ばれていたことが日本各地に存在する多くの「膝」の方言語彙から、日本人の「坐」の生活のなかで、まるで家族の一員のように扱われていたことがわかる。すなわち、日本人にとって「膝」がいかに日常の生活のなかで大きな位置をしめていたかを窺い知ることができるのである。

そこで、「膝」の方言を『日本方言辞典：標準語引き』（2004）で蒐集したところ、その総数が250で、他の「あし」の各部位名称の方言数と比較すると、群を抜いて多いことが判明したのである<sup>160</sup>（図3-3）。

方言を参照するには、言語学的な詳細な検討方法が必要であるが、「あし」の各部位の方言数の比からの考察も、一考に値する資料といえる。



（図3-3：「あし」の各部位別方言数 作成：栗山緑）

さて、日本人にとって「膝」は、「からだ」のなかでも、特に親しみを感じる部位であるだけでなく、必要とあらば便利な「道具」と化して私たちの生活を支えてくれるのである。

それは、今日でも私たちが特に意識することなく用いている「膝枕」という言葉から、「膝」が「枕」と化すことがわかる。「歌膝」という言葉は、「膝」が文をしたためるための「文台」のなることを意味しているのである。前述の入澤（1920）の「坐」の分類のなかの「立膝」の別名が「歌膝」で、この名は万葉歌人として有名な柿本人麻呂<sup>161</sup>が歌を詠む際の姿勢に由来する名称である（図3-4）<sup>162</sup>。



(図 3-4 : 柿本人麻呂の歌膝姿)

その他にも、立てた「膝」が「肘掛け」になることが、肘を膝に置いて扇子で顔を扇ぐ姿の図 (図 3-5) 163 から思い出されるように、「坐」する際にしばしば行っていたものだ。



(図 3-5 : 肘掛として使われる膝の一例)

このように、「膝」に関わるいくつもの事象から、「膝」は私たちの日々の生活のなかで、重宝な道具として使われてきたことに、あらためて気づかされるのである。

日本人の「膝」は、親近感溢れる存在であり、便利な道具となり、さらには付け加えると驚異的な行動力も備えているのである。

それは、「膝行」という、今日では茶道や武道といった伝統芸能のなかでしかみられなくなった所作が示していることで、「膝」を地に着いた低い姿勢のまま、上半身を左右に大きく振ることで、「膝」が足となって地を踏んで人体を移動させるのである。

幕末頃の日本人は日常茶飯事で行なっていた「膝行」を目した前述のペリー提督は、「膝行」についても鋭い注意力で観察しており、他文化圏の人にとって「膝行」がいかに異質であったかを以下のように述べている。

彼等は悉く、長い間の訓練によつてのみ獲得することのできる驚くべき程の筋肉の屈伸と関節のしなやかさを示し、又弾力のある演技を見せて見物人の驚異を買ふ、熟練した曲芸師又は道化師の一人を思ひ出させたのである。---- 栄之助は眼をふせたまま一寸それを聴いて、それから物慣れた態度で、まだ跪いたままで委員達の通訳の方へ進み、その口上を伝えてから、しかるべき回答をもって、もとの位置へ戻ってきた。

(『ペルリ提督日本遠征記(四)』) 164

They all showed a wonderful elasticity of muscle and suppleness of joint which could only have been acquired by long practice, and reminded one those skillful contortionists or clowns, who exhibit their caoutchouc accomplishments to the wonderment of the spectators. ----- The commissioners, after a momentary silence, spoke a word to the prostrate Yenoske, who listened an instant, with downcast eyes, and then by a skillful maneuver, still upon his knees, moved towards the commissioners' interpreter, and having communicated his message, which proved to be merely the ordinary compliments, with an inquiry after the health of the commodore and his officers, returned with an appropriate answer to this former position.

( "Narrative of the expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan." ) 165

そしてさらに驚くべきは、日本人の「膝」の威力は「飛行」も為しえたことである。12世紀の『吉備大臣入唐絵』のなかで、遣唐使として入唐した吉備真備が、唐の朝廷から多くの難題を出されその才芸を試される一場面で、鬼と一緒に「飛行」する姿勢が「正座」なのである。これはまさに「膝」で飛行しているように見えるのである(図3-6) 166。



(図 3-6：『吉備大臣入唐絵巻』の飛行の図)

#### 第四節 考察

以上のように、「あし」からみる日本人の「坐」は、その起源は「礼」の表意であり、そして日本人の「坐」は幾多もの型が存在し、また静の形（一所にとどまる）でありながら動の要素（待機の姿勢）をもった「坐」であることに独自性が認められる。

さらに、「あし」からみる日本人の「坐」として考察材料として「膝」は、日本人にとって親近感溢れる家族の一員のような存在であり、また便利な道具と化していた。

そして、日本人の「膝」の能力は、歩いたり飛んだりする能力をも備えた、最も頼りがいのある存在（パートナー）だったのだ。ここに、豊かな「膝文化」の存在が確認でき、日本の「あし文化」の重要な位置を占めているといえる。

しかし、近代化とともに日本人の生活様式は椅子が基盤となって「膝」を地についての「坐」することがなくなり、「膝」との縁が遠ざかっている。そのような現代の日本人は、昭和期ころまでの日本人がまさに「膝」を突き合わせていたような関係が自分の「からだ」のどの部位にも見当たらない。

医療の発達とともに、「からだ」との付き合いは生理学的なものだけとなり、それは薬や手術で対応し、科学的効果の追究に特化し、「からだ」をみずからの身体感覚で受け止めることが希薄になったといえる。

しかし、「あし」、「坐」、「膝」との関係を再考すると、昭和初期ごろまでの日本人の生活は、「あし」の曲げ伸ばし（膝の曲げ伸ばし）行動の繰り返りで形成されていた。

朝は布団の片づけで始まり、食事は卓袱台で床に坐ってとり、仕事や勉強の際には正座、トイレはしゃがみ姿勢で行う、といった生活様式だった。このような生活習慣のなかで、日本人の脚の筋力や柔軟性が鍛えられていたのだ。そしてその日々の生活行動から得た筋力・柔軟性の程度は、異文化の人からみて驚異的に映るほどの高度なものとなっていた。

現代社会の生活から消滅しつつある「坐」には、豊富な文化性のみならず、生理的な能力の強化にも貢献していたことが再確認できた。今日では、膝に負担の大きい「正座」が敬遠され、手軽さもあってか椅子生活が基盤となっている。

現代日本人が近代化された生活で歩かなくなっただけでなく、「あし」の折りたたみの繰り返しもなくなった以上、意識的に「あし」を動かさなければ、それは弱体化の一途をたどることになるのである。豊富な文化性が存在する日本人の「坐」は、日本人の健康にも大きく貢献していたことも、再認識する必要がある。

## 第四章 言語的視座からの「あし」

本章では、考えや思いをあらわす媒体としての「ことば」に焦点を当て、日本人自身の「あし」に対するその言語的表現を吟味しながら、日本人の「あし文化」を「ことば」から考察していく。

その方法として、第一節においてまず「ことば」から見えてくる日本人の身体認識を考察し、第二節で「からだ」の部位名称を使った比喩表現である「からだことば」を題材として、日本人の「あし」を考察する。第三節では、先人の知恵や教訓が凝縮された「ことわざ」と「慣用句」のなかの「あし」を考察し、第四節では、現代日本人の「あし」に関する考えや思いを「俗語」を題材として考察する。そして、第五節において、「あし」の基本的な機能である「歩容」に関する「ことば」である「歩容名称」について論じる。

### 第一節 日本人の身体認識と「ことば」

日本人の身体認識が「大まか」であることが「あし」を例にしばしば指摘される。それは、日本語で「あし」と言う場合、いったい人体の下肢の部位である「脚」のどの部分を指しているのか「あいまい」だからである。

それに対して、英語では‘leg’と‘foot’と別々の語彙が存在しており、その「ことば」を耳にするだけで、下肢のどの部分を指しているのか瞬時に理解できるのである。

しかし、この日本人の「からだ」の区分に関する「大まかさ」は、「あし」に限ったものでなく、「手」に関しても同様で、英語では‘hand’や‘arm’と分けているのに対し、日本語では「手」ひとつで表現している。

さらには、「クビ」も、「首」と「頸」と二種類の漢字があてがわれているが、日本語ではくびれたところを「頸」とすると同時に、「敵の大将の首を取

る」といった表現が示すように、くびれたところから上部の頭まで含めたところを「クビ」といっているのである。

この日本人の「大まか」な人体文節の傾向は、時代をさかのぼっていくさらに顕著となり、現在「ツメ」とよぶ指先の硬い部分である表皮が硬質化し部位は、昔は指先全体をさしていたことが「つまむ」や「つまびく」という指先で行う動作の語彙や足指の部分を「つま先」と呼ぶことからわかる。

「つめたい」も氷などにさわって指先が痛い感じがするという「つめいたい（爪痛い）」が語源であるなど、日本語の身体意識の「大まかさ」を示す例はいくらでもある<sup>167</sup>。

このように、「ことば」からみる日本人の身体認識は「大まか」であることが明らかなのであるが、「からだ」の部位名称を使った日本語表現を再考すると、「パンの耳」や「目尻」・「眉尻」、さらには「話の腰」、「うどんの腰」など独自性の強い比喻表現が幾多も存在することを再認識する。

そこで本節において、「ことば」に投影された日本人の「からだ」に関する認識（身体認識）を考察する目的で、1.日本人の「大まか」な身体認識、2.日本人の身体認識の独自性の二点から考察する。

## 1. 日本人の「大まか」な身体認識

日本語の「大まか」な身体部位の認識について、言語学者で国学者である金田一春彦<sup>168</sup>（2012）は、日本語の人体語彙の「単純さ」・「貧弱さ」と表現しながら、この「大まか」な身体認識の傾向は「からだ」の内部の臓器の語彙になると一層強まるとして説明する<sup>169</sup>。

それは、今日私たちが使っている「胃」・「腸」・「肺臓」・「心臓」などすべて中国との交流でできた名称であり、生粋の日本語ともいわれる和語<sup>170</sup>は「キモ」・「はらわた」・「わた」だけである<sup>171</sup>。そしてさらには、生理

に関する語彙<sup>172</sup>、キズや病気の固有名称<sup>173</sup>、味（「カライ」等）や視聴覚（「ミル」・「キク」等）といった感覚に関する語彙や、人間の動作に関する語彙（「あるく」・「とぶ」等）も、中国語・英語・ドイツ語と比して単純である<sup>174</sup>。

その要因は、欧米人や中国人は肉食であり、牛や豚を解剖して一つ一つに名前をつけていったことで、動物の体の各部名を人間の「からだ」に適用したためであろうと述べている<sup>175</sup>。それは、アイヌ語も「からだ」の部分名や臓器名に詳しい言語であるのは、クマを食べていたことが関係していると同様の例としてあげる。

また、日本人の身体認識の「大まかさ」は、日本人が肉体のことをはっきりと口にすることを避けるという気持ちの表れでないかとその要因を追加する<sup>176</sup>。

それは、アメリカの文学作品においては、「尖った顎」とか「黒くて太い眉」など、容貌について明確かつ詳細に「からだ」の部位名を使って表現しているのに対し、日本の古典文学である『古今和歌集』（平安初期）や『新古今和歌集』（鎌倉初期）などのなかでは、「目」や「鼻」などの人体用語はほとんど使われていなく、明治期になってようやく「からだ」の部位名称を用いる作品がみられるようになったことを例としてあげる<sup>177</sup>。

また、「大手を振る」、「小膝をたたく」、「後ろ指をさされる」などといった語彙も、肉体を表わす言葉の前に接頭語をつけて論理的には変則的な表現をするものが多いこともその例としてあげる。

さらには、日本人はお菓子などの食べ物の名前には、形が「からだ」の部位に似ているからといって、例えば‘Lady’s Finger’などをつけることはなく、「多摩川」とか「長良川」など風情あるものに命名する傾向にあるという私見も加えながら、日本語表現の特徴としての「肉体の忌避」について説明する<sup>178</sup>。

以上のように、金田一（2012）は日本人の「大まか」な身体認識の根拠を、食習慣や国民性（肉体語彙の回避）を論拠として説明する。

日英語の対照研究者の小林祐子<sup>179</sup>（1985）は、「からだ」の部位の区分について、「ことばに作られた体」と表現して説明する<sup>180</sup>。私たちは、「からだ」というものをそのまま認識しているわけではなく、人間側の必要性をみとすのに有用と思われる形に分節し、名前を与えられたもの（言語化されたもの）を頭にいれているのであって、文化ごとに志向する目的が異なれば「からだ」の切りとり方も変わる。その例として日本人が「肩が凝る」や「腰が痛い」と言う際、「肩」は英語の *shoulder* よりも指示する範囲が狭く、「腰」は英語の *low back*、*waist*、*hip* の上部の広範囲にわたる部分であることがあげられる。

そしてさらに、「我々はことばの上で構造化されたものがすべてであり、それ以外に体のとらえようがないと思こんでいる」と述べ、他言語で「からだ」を扱う場合でも母国語で育てられた見方を変えようとせずに、名前の置き換えで済ませようとするという。

以上のような小林裕子の指摘から考えると、日本人の「大まか」な身体認識の要因は、日本文化の中で「からだ」の分節に関する必要性が「大まか」であることが有用であるということになる。

## 2. 日本人の独特な身体認識

次に、「ことば」からみる日本人の身体認識の独自性について考察する。本章の冒頭で例としてあげた、独自性の強い日本人の身体意識のなかでも、(1)パンの耳と、(2)うどんの腰をその代表例として取り上げ、これらの表現の起源や要因を探る。

## (1) パンの耳

日本人の身体認識の独自性を再認識するきっかけとなったのが「パンの耳」であるが、日本人はどうして食パンの端の堅い部分を「耳」と呼ぶのだろうか。どうみても「耳」とは似ても似つかない形状である。

「パン」に限らず、他の食べ物にも「端」を「耳」と呼ぶものがある。たとえば、「南部煎餅」という東北の名物煎餅がある。それは小麦粉を原料に丸い鑄型で焼いてつくるのであるが、煎餅の周囲の部分を「耳」と呼び、その「耳」の部分（型につぶされてうすくなった部分）のさらに周囲が膨れた煎餅を「福耳」として、「ふくみみせんべい」という名で販売されているのである（写真 4-1）<sup>181</sup>。



(写真 4-1: 「ふくみみせんべい」の写真)

そこで、「端や隅」を意味とする他の「耳」を使った食べ物を対象とした比喩表現を調べてみると、豆腐にも「耳」が存在する<sup>182</sup>。

このように、日本人はパンや煎餅、豆腐など、形が四角であっても丸であっても、「端」や「縁」を「耳」と呼ぶのである。

そこで「耳」の意味するところを『日本国語大辞典』<sup>183</sup>を参照して調べてみると、[1] 身体の器官の一つと<sup>184</sup>、[2] 耳介の形やその穴などに形が似ているものや耳介のある「位置」に似た位置の部分・場所をいう、の二つに大別される<sup>185</sup>。

本章で問題とする区分の[2]には、さらに三つの分類（中分類）として、  
1. 物の、糸を通す穴<sup>186</sup>、2. 形が耳介に似ているものの称<sup>187</sup>、3. 物の端や

隅があり、本題の「パンの耳」があてはまる中分類 3 は、①豆腐・パンなど、四角い形のふち、またその堅い部分、②織物・紙・本など、平たいもののふち<sup>188</sup>、③大判・小判のふち、転じて、その枚数<sup>189</sup>、④兜の吹き返しの異称、⑤耳航(かわら)<sup>190</sup>の略称、の五つにさらに分類(小分類)されるほど、「物の端や隅」としての比喩表現をする対象物は多岐にわたっているのである。

では次に、以上のように多様に分類化されている「耳」の比喩表現[2]のそれぞれの意味が生まれた時期を明らかにすることで、「耳」の比喩の新旧を明らかにして、本題の「パンの耳」の意味分類である中分類3「物の端や隅」がその中でいつ頃から始まったかを明らかにする。

その方法としては、各比喩表現としての意味の出典時期を調べる。『国語大辞典』の出典はその意味の初出の文献として掲載されているので、その出典時期からその意味が一般認識となった時期という推論を行う。

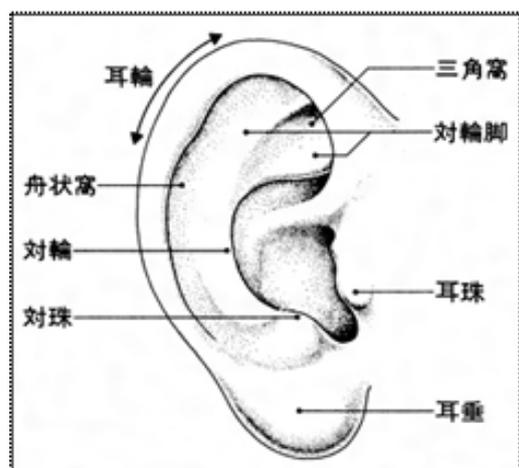
その結果、中分類1.「物の、糸を通す穴」のなかの、小分類㊦物の糸などを通す穴、の意味で用いられている文献が最も古く(『宇津保物語』970～999頃:「いと使いよき、てづくりのはりのみみと明らかなるに」)、次に中分類3.「物の端や隅」のなかの、小分類②「織物・紙・本など、平たいもののふち、の意」であり(『名語記』1275:「絹布のはしをみみとなづく」)、その後の中分類2.「形が耳介に似ているものの称」のなかの、小分類①器物の取っ手、の意(『山谷詩集鈔』1647:「鼎は足が三つ耳が二つありて、ことなうをもいものぞ」)の順であった。

以上の結果から、日本人にとって「耳」の比喩表現は、「穴」が最も古く(平安期)、次に「端や隅」(鎌倉期)、そして「耳の位置」(江戸期)の意というような歴史的な流れのなかで、「耳」の比喩的表現法が多様になっていたことが明らかになった。

すなわち、現代日本人が、食パンの四方の硬い部分を「耳」と呼ぶのは、鎌倉期からの「物の端や隅」を「耳」とする認識が一般化していたものが、20世

紀になって日本人の食卓に登場してきた食パンの四方の硬い部分に適用したと思われる。

「パンの耳」の初出の文献は、「サンドイッチを作る時に出たパンの耳を脂で揚げて」（曾野綾子『傷ついた葦』1970）のように使われていて、戦後、高度成長期のなかで日本人の生活が西洋化され、パン食が普及しいくなかで生まれた表現で、その後一般化された。しかし解明すべき点は、日本人が「物の端や隅」を表現するのになぜ「耳」を選んだかということである。そこであらためて、「耳」の解剖図を見てみると、「耳輪」という名称である耳介の周囲にそって細い幅で捲れているような形状で在る部分が、確かに「ふち取り」されているように見え、「端」あるいは「隅」として比喩するのに最適な部位であることがわかる（図4-1）<sup>191</sup>。



（図4-1：耳介の図）

ここで、改めて鎌倉期頃の日本人の観察力の鋭さに気づかされる。先述の初出の文献時期からの日本人の「耳」の比喩表現の変遷の考察の結果からも、平安期頃の「穴」としての認識が最も古いことは、同じように二つの「穴」がある「鼻」ではなく、「耳」の方が「穴」として認識が強く、また現代日本人からすると「耳」の比喩表現する際は、「耳」の形状をまず考えたゆえに「パンの耳」という比喩表現に違和感をもったのであるが、「耳」の形状やその位置を使っの比喩表現は、江戸期頃から始まったことから、「耳」の形状を比喩表

現の際の思いつくというのは、比較的新しい時代の日本人の感覚ということがいえるのである。

さらに追究すべき点として、日本人が物の「端や隅」をあえて比喻表現する所以についてである。物の「端や隅」を、ただ「端」や「隅」と呼ぶのでは充ち足りなかったゆえに、その比喻表現を用いるに至ったと思われるという点である。

あるものを何かで比喻表現する理由として考えられるのは、まずその比喻表現する箇所に意識が高いために違いない。あるいは「趣深く」するためでもあるかもしれないが、少なくとも当時の日本人にとって物の「端や隅」を重要視する価値観が存在していたといえるだろう。

その理由として考えられるのは、「儀式折り紙」や「切り紙」の存在である。7世紀に「紙」が高句麗から伝えられて以来、生活様式のなかから自然発生的に起こったと考えられており、「切り紙」と混じり合って神社の払いや御幣（ごへい）、垂（しで：玉串のこと）、注連縄（しめなわ）等の垂れ下げるものに始まり、政（まつりごと）や信仰などのなかで「紙」を折るという技法が発展した<sup>192</sup>。室町時代になって礼法としての「折り紙」が確立されていくなかで、「紙を折る」という技法における「隅や端」の重要性が高められたのだ。

それが「耳」を物の「端や隅」の比喻表現に用いることに発展し、そして紙幣などの「‘耳’を揃えて用意する」といった表現のみならず、「重箱の隅をつつく」という意識に至り、さらには「はきものをそろえると心もそろう」<sup>193</sup>などの精神性との関連にまで進化していったのである。その背景には、日本人の国民的な几帳面さが存在したと考えられる。

## （2）うどんの腰

「パンの耳」と同様に、日本人の身体認識に強い独自性が窺える表現は、「うどんのコシ」である。私たちは日頃深く考えることなくしばしば会話で用

いている「うどんのコシ」は筆記した文字として用いることは少なく、そのような機会がある場合は、たいてい「コシ」とカタカナで表記されているので、「コシ」を「からだ」の「腰」として意識している人は少ないに違いない。

この「からだ」の一部位である「腰」の比喻表現のひとつとしての①「屈伸したり、物をもちこたえる力、また押し通す意気」が転じて、②「餅や練った粉などの粘り気や、そば・うどんの弾力」と『国語大辞典』にあり<sup>194</sup>、人体としての「腰」の機能の特徴の強い「力」や「意気」が食べ物の「うどん」に適用され、それが日本人の食感としての歯ごたえの表現として用いられているのは注目すべき点である。

日本人にとっての「腰」は、他の「からだ」の部位に比べて特別な意味をもつことは、「腰がすわったひと」や「腰がぬける」などの比喻表現から明らかであるが、「腰」の比喻的用法の意味は前述の①、②の他には、③袴や裳などの腰にあたる部分。また、そのあたりで結ぶ紐、④壁・障子・乗物・書物などの、中程より少し下部をいう。また、器物等の中程の部分、または台脚の部分、⑤山の麓の近い所・すそ、⑥兜の鉢の周縁部に巻いた帯金物、⑦和歌の第三句の五文字、⑧「腰押」<sup>195</sup>の略、⑨布、紙など、形がくずれにくいような弾力性・強靱さ、⑩物事の勢い、また何かをする際の意気込み、の合計10の意味がある。

このように、人体の「腰」の位置に似た位置のものの比喻（③、④、⑤、⑥、⑦）のみならず、「腰」に関わる動作（⑧）やその「腰」の動きの意から転じてか、「物事の勢い」、そして、「意気込み」や「押し通す意志」と意識にまでも進展することは注目すべき点である<sup>196</sup>。

それは、日本人がいかに「腰」を中心とした動きをしていたか、そして「腰」を意識していたか、意識させられる動きをしていたかを物語っている。

日本人のなかに浸透している「腰」に対する深い意識が、物の「強さ」を表現するとき想起され、食べ物のうどんや餅のみならず、「画用紙」<sup>197</sup>や

「筆」<sup>198</sup>、「話」、「言葉」<sup>199</sup>にも「腰」をつけて「画用紙の腰」などと、あらゆる事象に「腰」を強さの比喩表現として用いていることを再認識させられる。

### 3. まとめ

「からだ」の部位名称という「ことば」からみる日本人の身体認識は「大まか」であることと、その独自性の強さについて明らかにしてきた。

本考察手法においては、多言語における「ことば」からみる身体認識との比較が十分になされていないことが指摘される点ではあるが、本研究は「あし」の文化性の考察主眼としているので、詳細なる言語的な考察に着手しなかったが、この点は本研究の次段階における大きな課題である。

日本人の身体認識の独自性については、「パンの耳」や「うどんの腰」を代表例として考察したが、その他にも日本人の身体認識の独自性が窺える表現として、「目尻」、「眉尻」、「矢尻」など、ものの先端部を「あし」ではなく「尻」とする表現がある。これは、床に「坐」することで「あし」は折敷かれてその存在感が希薄となり、「からだ」としての認識は頭と胴体が主となり、「からだ」の末端は「尻」として認識されるようになったと考えられる。

これはすなわち、日本の「坐の文化」が影響した表現と考えられ、「パンの耳」や「うどんの腰」の考察結果からも、物の端や隅を重要視する価値観や、日本の「腰文化」の反映といった日本文化が基盤となった表現で、「ことば」がその文化の投影媒体となるという特徴を、まさに「からだ」に関する表現が証明している。

さらには、「ことば」からみる日本人の身体認識の考察の結果の一つとして、時代によって日本人の観察力や感性に違いがみられることも明らかになった。それは、「耳」の比喩表現の意味の変遷から、平安から江戸期以前の日本人の観察力や感性は、現代の日本人より繊細だったという推論が可能になる。

そして、本節の研究手法で明らかになったもう一つの議論すべき点として、日本人は身体認識が「大まか」でありながらも、「隅や端」に価値を見出す傾向があることや、「ことば」には肉体の回避という文化的嗜好がありながらも、「パン」や「うどん」といった食べ物に「肉体」の部位名を使った表現をすることなどから、日本人の身体認識はきわめて「多元的」、あるいは「両義的」という一面がみえてくるのである。

医史学者の立川昭二<sup>200</sup>（2003）は、日本人の健康観が「多元的」であると指摘している<sup>201</sup>。そしてこのことの説明として「平たく言うと、健康について‘うるさい’国民ということだが、‘うるさい’というのはあれこれと要求が多く、こだわりや執拗に健康を追い求めることを意味し、すなわち健康について‘うるさい’というのは、健康の文化が豊かなことである」と述べ、さらに日本人の健康文化が豊かであることは、日本人の多元的な精神性に由来するという。

立川（2006）の論にそって日本人の身体認識を再考すると、身体認識が「多元的」であることは、日本人の「からだ」の文化が豊かであることを示唆しているといえる。

では、日本人の身体認識を「両義的」とみるとそれは日本人の「あいまいの知」との関連が考えられるのである<sup>202</sup>。

それは、日本人の身体認識の「大まか」であることを「あいまい」であるとおききかえることも可能ではないかという論理である。すなわち、人体の分節を「あいまい」にすることを良しとする価値観から「大まか」に表現したのではないかという推論である。

それは、金田一（2012）は日本語の特徴として「日本人は‘カン’を尊ぶ」ということは、日本語の重要な精神の一つ」と述べている。とすれば、日本人が肉体の部位を「大まか」に表現することは、聞き手の「勘」を尊重して理解を促していると解釈できる。

本節において日本人の身体認識を「ことば」から考察した結果、「からだことば」に、「あいまいさ」や「勘」を尊重する日本人の精神性が反映されているということが明らかになった。

## 第二節 身体語彙としての「からだことば」

前節において、「ことば」から日本人の「からだ」の認識を考察したが、次に「からだ」の部位名称を用いた比喩表現である身体語彙（「からだことば」）を題材に日本人の「あし」を考察する。

日本人の人体文節が「大まか」であることが明らかになったが、その「大まか」な語彙による比喩表現ということになる。この「大まか」な語彙を用いた「からだことば」であるが、日本語の「からだことば」は他に類をみないほど豊富にあると言われている<sup>203</sup>。

「からだことば」を初めて編集した辞典『からだことば辞典』（東郷吉男編、2003）<sup>204</sup>には、頭・目・口などの「からだ」の部位だけでなく、骨・肉・血などの素材、髪・爪などの付属物、涙・汗・糞などの分泌物及び排泄物が含まれた「たとえことば」としての用法の語彙が、73種、6,003語収録されているのである。

本節において、日本語表現における「からだことば」を題材に「あし」について考察する。

### 1. 「からだことば」のなかの「あし」

『からだことば辞典』に収録された、6003語の「からだことば」をまず、各部位名称の語彙の数で比較したところ、「手」が668で最も多く、次に

「目」(571)、「口」(345)という順で、「足」は220で六番目に多い語彙であった(表4-1)。

そして、「あし」の全体とらえる意味で、足の各部位である股・腿(38)、膝(51)、脛(8)、踵(3)をまとめると320語彙となり、4番目に多い部位となった(図4-2)。「手」も同様に、「手」の他の部位名である「腕」

(98)、「肘」(12)、「掌」(13)、「指」(69)をまとめて「手」全体とすると、860となるが、最多の「からだことば」の語彙数であることには変わりはない。

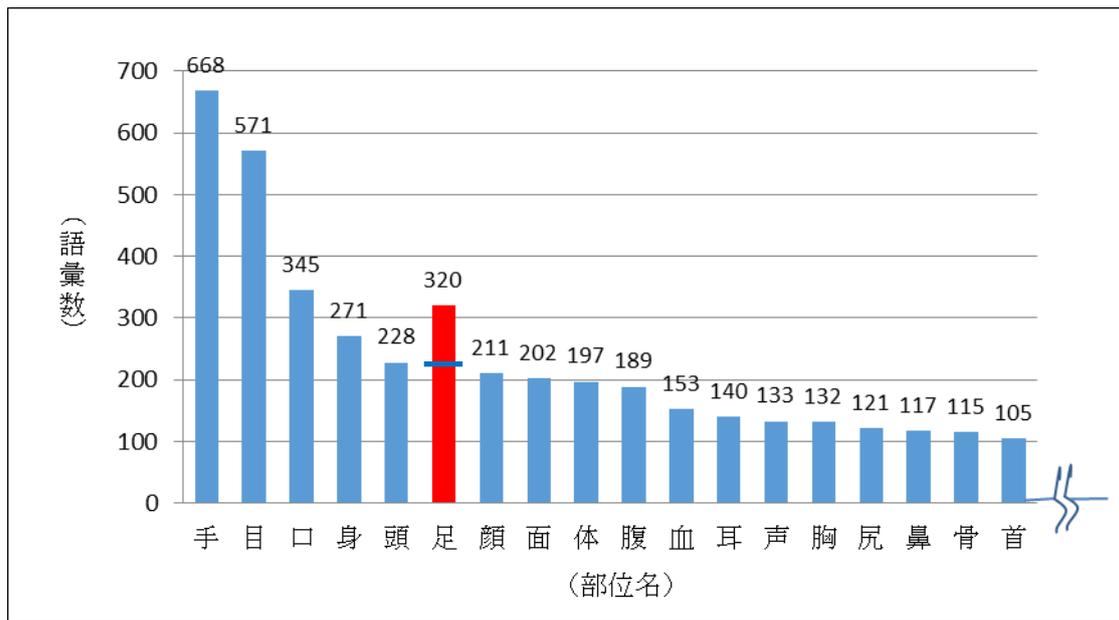
順	部位名	数
1	手	668
2	目	571
3	口	345
4	身	271
5	頭	228
6	足	220
7	顔	211
8	面	202
9	体	197
10	腹	189
11	血	153
12	耳	140
13	声	133
14	胸	132
15	尻	121
16	鼻	117
17	骨	115
18	首	105
19	腕	98
20	毛	93

順	部位名	数
21	腰	91
22	歯	75
23	背	71
24	息	71
25	指	69
26	肩	68
27	涙	64
28	節	61
29	肉	61
30	皮	60
31	筋	58
32	額	55
33	膝	51
34	肝	49
35	髪	47
36	肌	45
37	舌	44
38	乳	44
39	糞	43
40	爪	40

順	部位名	数
41	汗	39
42	股・腿	38
43	眉	35
44	脂	31
45	脇	29
46	頬	22
47	喉	22
48	臍	22
49	垢	22
50	拳	21
51	胴	20
52	髭	20
53	唇	19
54	顎	19
55	屁	17
56	皺	16
57	腸	14
58	掌	13
59	唾	13
60	尿	13

順	部位名	数
61	肘	12
62	脳	10
63	涕	9
64	瞳	8
65	脛	8
66	瞼	6
67	肺	6
68	瘤	6
69	睫毛	6
70	踵	3
71	旋毛	3
72	咳	3
73	膿	2

(表4-1: 「からだことば」の語彙数の最多順の表 作成: 栗山緑)



(図 4-2 :100 以上の語彙数がある「からだ」の部位の最多順位 作成：栗山緑)

「あし」は、比喩表現の対象として最多順位の上位に入るほど、比喩表現の題材として有用であることを示唆している。そして、「手」が「からだ」の部位のなかで圧倒的な最多数を有することは、「手」が最も注目を浴びた「からだ」の部位であることを証明している。

また、「目」が「口」より多いことは、まさに「目は口ほどにものをいう」という表現を裏付けているとみることができる。そして、その「目」より「手」が圧倒的多数を有する事実からは、「手は口ほどにものをいう」なのである。

そのほかにも、「身」が「口」の次にあることも、「手振り、身振り」という表現も裏付けている結果といえる。これほどまでに、「からだことば」の分析は日本語の比喩表現の証になっているということに感服するのである。

さらに、「手」が「目」や「口」といった顔の部位よりも多いという見方をすると、顔の表情で表現するよりも、「手」や「手」の動きで表現する方がより説得力があることを示唆しているとみることができよう。

そして、「あし」を用いた比喩表現は、「手振り」、顔の表情に次いで効果的な表現媒体であることを意味しているといえよう。

## 2. 「からだことば」考

『からだことば辞典』の編者である東郷（2004）は、「からだことば」の考察として「日本人は自己の身体をはじめ、あらゆる動植物・山川草木・自然現象に至るまで、すべての対象物に、感情移入しやすい民族である」と述べている<sup>205</sup>。日本人は自身の「からだ」も対象物として、感情移入した結果、膨大な「からだことば」の総数となり、また「手」に最も感情移入したということであろう。

『からだ言葉の本 付‘からだ言葉’拾遺』を著した秦恒平<sup>206</sup>（1984）は、「‘こころ’も‘ことば’も、‘からだ’に根を生うた花や葉のようなもの」と表現し、「からだ」という根幹との関わり如何が、色や匂い、形も様々な言の葉を繁らせ心の花を咲かせる、と小説家が為せる絶妙な比喩で「ことば」・「こころ」・「からだ」の相関関係を説明する<sup>207</sup>。すなわち、この相関関係によって「ことば」が表現力や伝達力を豊富にするのである。

そしてさらに、「一つの‘文化’を読み、‘文明’を聴くにも、それらを支えている要は‘からだ’の<sup>・</sup><sup>・</sup>たちを、体質や素質を、まず見究めるべきである」と加え、文化・文明を見る際に、その文化圏に住む人の「からだ」を分析する必要があるという、本研究の主眼としている「からだ」と文化の関係をまさに指摘している。

すなわち、「からだ」の動きやその部位を示すことは、誰にでもわかりやすい具体的表現となるだけでなく、細やかで微妙な感情表現をも可能にすることができるので、「からだ」は「こころ」を表現するのに最高の代弁者なのである。

心理学者の春木豊<sup>208</sup>（1988）も、「からだ言葉は、精神と身体が切りはなせない状態でそこに現象していることを示し、そこに相即不離の形で、心の状態（気分、感情）をあらわしているのである」と述べ、例えば「息づまる思い」は緊張した気分と息を詰めることが共に現象して、真に「息づまる思い」の状態であり、からだ言葉は人間が直面するシビアな現実を表現していると説明する<sup>209</sup>。

このように、「からだ」と「こころ」の深い結びつきを示している「からだことば」であるが、もともと日本語の特徴として「心理」内容をあらわす感情関係の語彙は豊富に存在する<sup>210</sup>。だからこそ、「こころ」の表現媒体である「からだことば」の語彙が、数多く蓄積されてきたのである。「からだ」は誰でも直截的に理解し、その人の思いや気持ちを最もリアルに伝えてくれる最高の表現素材（ツール）なのだ。そしてまさに、「からだを張って」表現している「ことば」が「からだことば」なのである。

柳瀬、ジュエル（1990）は、英語の「からだことば」との比較から「表現方法の違いの基盤は社会の制約という影響を含めて生活習慣、環境・風土あるいはその社会の構成員（民族）の特色といったものが深くかかわっている」と述べている<sup>211</sup>。

そして、「からだことば」は、①その部位本来の機能が表現の中心にあるものと、②本来の機能から転じて独特な意味をもつようになったものの二つに分類され、①のレベルにおけるそれぞれの語彙の数量的差異からは、それぞれの身体部位に託されたその言語環境の「思い入れ」を見ることができ、②に関しては(1)社会を構成する人々の共通基盤や均質性と、(2)社会的・文化的制約の量が要因していると分析している。

「からだことば」は、文化を見据えることができる「ことば」であり、その文化を形成している社会が映し出された表現ツールなのである。

このように、表現効果が高く文化やその社会を映し出している「からだことば」が日本語に豊富に存在するということは、日本の貴重な「ことば」文化ともいえる。ところが残念なことに、この貴重な文化が現代日本人の中から次々と消えているとののである。

歴史学者の立川昭二<sup>212</sup>（1996）は、講義で学生に「血」の入っている言葉を書かせたところ、「血液」、「輸血」、「血压」、「血液型」は出てくるが、「血潮」や「血色」、「血気」は出てこない。また薬学部の学生に、「薬」のつく言葉を書かせても、自分になる職業である「薬剤師」や、薬の名前の「消化薬」や「頭痛薬」は書けても、「麻薬」や「農薬」も出てこないまでに思考が専門化されており、「薬指」はなおさらのこと、もともと薬を入れて腰にぶら下げたことが起源の「薬玉」はほぼ皆無であるとしている<sup>213</sup>。

また、現代人は「肌」の手入れのことは「スキンケア」、「肌を許す」が「寝る」や「セックスする」となっていることを例としてあげ、「医学というものは、人間の生と死に直接かかわるという意味で、立派な文化であるはずなのだが、いまの医学は宗教や芸術の側から離れて、むしろ建築や土木の側に近くなっていて、文化というより文明といったほうが、分かりやすいものになっている」と続ける。そしてさらに「その人がその言葉についてどんな語彙を持っているか、それはそのままその人の文化なんです」と結ぶ。

### 3. まとめ

「からだ」の部位名称を用いた比喻表現である「からだことば」を考察したところ、語彙数の比較においては「手」が最も多い語彙数を有し、日本の「手の文化」を象徴していることが窺えた。また、次に最多数を有している「目」そして「口」の順位から、確かに「目は口ほどにものをいう」ことを裏付けているようであった。しかし、全体からみると、日本の文化では「手は口ほどに

ものをいう」であり、「からだことば」にみる日本文化は、まさに「手」が中心であった。

ここで思い出されるのは、卓越な日本人論と評されている『「縮み」志向の日本人』の著者の韓国人の李御寧<sup>214</sup>（1982）の日本人の「手」に関する記述である。

李（1982）は、日本文化の特徴として何事においても小型（compact）にすることを議論する中で、日本人の「縮み」志向を六つの型に分類している。そのなかの扇子を典型例とした「扇子型」における日本人の「縮み志向」とは、何かを引き寄せて手で握る「握りめし文化（引き寄せる）」である。そして、「日本人は食べ物を手で握ってつくるように、手のなかに入れて触らなければよくわからないのです。----（中略）----感情も握りで「手ごたえ」「手ごわい」「手痛い」になるのです」と表現し、以下のようにまとめているのである<sup>215</sup>。

すなわち、手ごろ、手軽にすることなのです。日本人は頭だけでなく、手で考え手で見えるのです。だから大きいもの、抽象的なもの、いわば手のなかに入れられないものは、「手にあまる」ものとなり、どうも「手に負えない」のです。

同じアジアの文化圏の李（1987）からみても日本人の「手」は、強い独自性があることを評している。このような特性のある日本人の「手」の「からだことば」が、格段に豊富になるのは当然のことといえよう。

そのなかでの日本人の「あし」は、語彙数の比較からみると、最多数である人体の上肢である「手」、表情を作る部位である「目」、「口」に続く順位であるので、比喩表現の媒体としては有用なものとされているといえる。

柳瀬・ジュエル（1990）が指摘しているように、「からだことば」の個々の意味の分析を行うことで、言語環境及び文化性・社会性の考察が可能となり、他言語における「からだことば」との比較研究には必須な手法となるが、本研

究は他文化圏との詳細な比較研究にまで及んでいない。また、言語学的追究は本論文の目的である多角的研究の範疇を超えることになり、次段階における課題としている。

本節における「からだことば」の考察結果の最後の点として、「からだ」と「こころ」が密接に関係していることと、日本語の特性としての感情関係の語彙が多いということから、おのずとその数が豊富になったことが指摘される。

人類の長い歴史からみると、人間にとっての「ことば」は比較的まだ新しいもので十数万年しか経っていない。即ち、私たち人間にとってまだ使い慣れていないもので、信頼のおけない伝達手段であったに違いない<sup>216</sup>。

そのような状態では、あれこれと「ことば」を並べて説明するよりも、誰にでも共通認識のある「からだ」で比喻する方が、確実に誤解も少ないと知り、表現上で「からだ」に絶大な信頼をおくようになった。ゆえに、「からだことば」の語彙数が増大することになったという推論も可能であろう。

### 第三節 ことわざと慣用句のなかの「あし」

本章第一節において「ことば」から日本人の「からだ」の認識（身体認識）の特性について論じ、第二節においては「からだ」の部位名称を用いた身体語彙の分析を通じて、比喻表現の題材とされる「からだ」とそのなかでの「あし」の意味について考察した。

本節においては、「あし」がことわざや慣用句のなかでどのような意味合いで使われているかについて検討する。ことわざや慣用句を題材としたのは、「ことわざ」は世代から世代へと受け継がれてきた教訓や知識、また鋭い風刺を簡潔な「ことば」にしたものであり、慣用句は習慣として長い間広く使われ

てきたことを総括した「ことば」・文句・いいまわしであることから、日本文化における思考が凝縮された語彙といえるからである。

『からだことば辞典』の編者である東郷吉男（2004）は、次のように記している<sup>217</sup>。

日本人は自己の身体をはじめ、あらゆる動植物・山川草木・自然現象に至るまで、すべての対象物に、感情移入しやすい民族であって、日本語・日本文学の考察にあたっては、このことに一考あるべきかと思うのである。

日本人は自然を愛で、敬い、調和・共存してきたことは、しばしば指摘されることだが、動植物などの自然を代表する言語媒体にこそ、日本的思考が顕著に表れているのかもしれない。そこで、動植物についての語彙・ことわざ・慣用句のなかに、「あし」に関する「ことば」を蒐集し、分析を加えてみたい。

#### 1. 「動植物ことば」と「動植物ことわざ」のなかの「あし」

この分析方法における主要参考文献としては、動植物の名称を用いた一般の言語生活で使われているものを中心に約 2,700 語が収録されている『動植物ことば辞典』<sup>218</sup> と、「井戸中の蛙」・「言わぬが花」といった動植物に関することわざと慣用句が 3,200 項目収録されている『動植物ことわざ辞典』<sup>219</sup> の二点を用いた。

蒐集した語彙は、動物類と植物類に分類し、さらにそれぞれを①「あし」の部位名称（「腿」、「股」、「脛」等）を用いているものを「部位：parts」（P）とし、②「あし」に装着する付属物名（「草鞋」、「股引」等）を用いているものを「付随品：stuff」（S）とし、③「あし」の動きに関する語彙（「歩く」、「走る」等）が用いられているものを「動き：movement」（M）として分類した。

その結果、動物類には 48 語彙（表 4-2）、植物類には 13 語彙（表 4-3）の「あし」に関する語彙・ことわざ・慣用句を確認した。

動物類の 48 語彙の内訳は、鳥類が 16 語彙<sup>220</sup>（雀 3、鴨 2、鶴 2、雉 2、鶏 2、鷺 2、鳥 1、家鴨 1、千鳥 1）、ほ乳類が 16 語彙（犬 5、馬 4、ヒト 3、牛 2、兎 1、狐 1）、節足動物が 5 語彙（蟹 1、蚊 3、蟻 1）、爬虫類が 4 語彙（蛇 2、亀 2）、魚類が 2 語彙（蛸 1、泥鰌 1）、両生類が 1 語彙（蛙）、その他 2 語彙（獅子、仏）であった（図 4-3）。そして、これらの語彙の中で①「あし」の部位別数は、「あし」全体（足、脚）を表現したものが 10 語彙<sup>221</sup> で最も多く、次に「脛（脛）」が 6 語彙<sup>222</sup>、「股」<sup>223</sup>と「足下（踝、足跡、跣足）」<sup>224</sup> が 4 語彙であった（図 4-4）。

②「あし」に装着する付属物の語彙は 2 語彙<sup>225</sup> あり、③「あし」の動きに関する 16 の語彙のうち、「歩き」に関するものは 7 語彙あり<sup>226</sup>、「走り」<sup>227</sup>と「地団駄」<sup>228</sup> が 3 語彙ずつ、「蹴り」が 1 語彙<sup>229</sup>、「その他」として 2 語彙<sup>230</sup> を確認した（図 4-5）。

<動物>

	部位(P)	付随品(S)	動き(M)
1	鴨の足鶴の脛	1 家鴨の脚絆	1 鷺足を使う
2	鴨の脛	2 兎の股引	2 千鳥足
3	鳥の足跡		3 狐の河原走り
4	雀の躍った足跡のよう		4 一時三里に犬走り
5	雀の脛から血を絞るよう		5 犬の川端歩き
6	雉の片股鷹の食		6 犬の子の徒歩き
7	鷺に尾がないとて脚切つて継がれず		7 犬走り
8	鶴の脛をきるべからず		8 犬も歩けば棒にあたる
9	足下から鳥が立つ		9 牛の歩み
10	足下の鳥は逃げる		10 牛の歩みも千里
11	鶏は跣足		11 石亀も地団駄
12	ばたばた言うても鶏は徒跣、田螺は家持ち		12 鼈の地団駄
13	駿足長坂を思う		13 泥鰌の地団駄
14	馬の足		14 蟻は蹴るに能わず、針は呑むに能わず
15	良驥の足を絆して責むるに千里の任を以てす		15 雀の喧嘩で股ふるふる
16	馬逸足といえども與に閑わざれば良駿となさず		16 雉の糞搔き足
17	蛸足		
18	蛙股		
19	蟹股		
20	蚊の脛八つ割		
21	蚊の脛に鑊をかける		
22	内踝は蚊に食われても悪い		
23	蛇足		
24	蛇の足より人の足		
25	輿馬を仮る者は足を勞せずして千里を致す		
26	怠け者の足から鳥が立つ		
27	獅子になるとも後足になれ		
28	事ある時は仏の足を戴く		

（表 4-2：動物類のなかの「あし」に関することわざ・慣用句 作成：栗山緑）

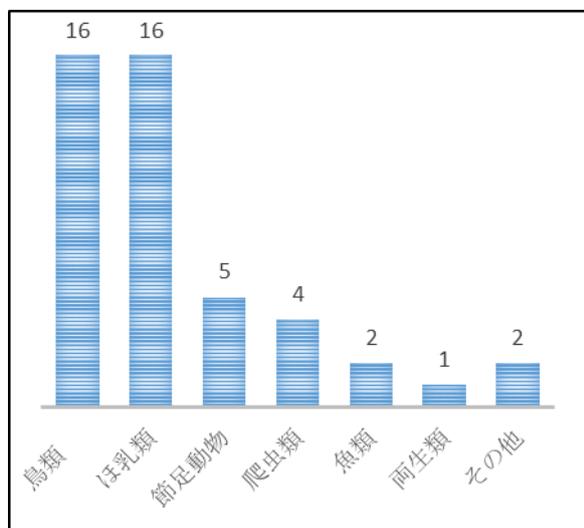
< 植物 >

	部位(P)	付随品(S)	動き(M)
1	大根足	1 作り物で早い蕎麦と足半	1 芋茎で足を衝く
2	漆千桶に蟹の足	2 下駄も仏も同じ木の切れ	2 長芋で足を突く
3	木の股から生れる	3 瓜田に履を納れず	3 山の芋で足つく
4	三月の木の股裂け		4 痛さに走る蚕豆
			5 十囲の木始め生じて薬なる足掻いて絶つべし
			6 立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花

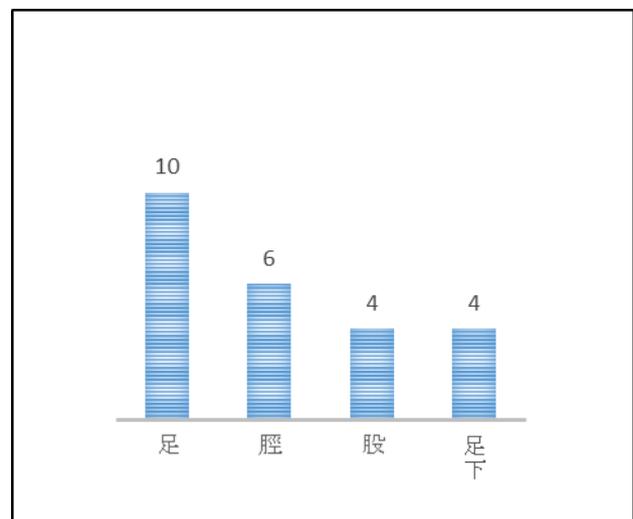
(表 4-3 : 植物類のなかの「あし」に関することわざ・慣用句 作成 : 栗山緑)

植物類の 13 語彙の内訳は、野菜類が 7 語彙<sup>231</sup>、「木」に関するものが 5 語彙<sup>232</sup>、「花」に関するものが 1 語彙<sup>233</sup>であった。しかし、植物自体に「あし」を反映しているものは 4 語彙だけで<sup>234</sup>、その他の語彙は植物名と動物の「あし」の部位名を組み合わせでつくられたものであった。

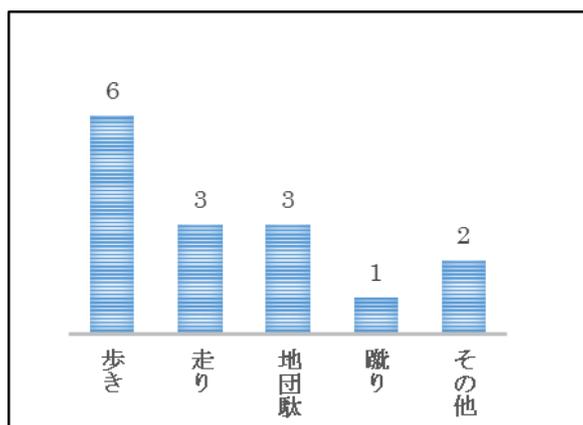
また、参考文献のなかには「カモシカの(ような)足」と「(金)蓮歩」<sup>235</sup> は、含まれていなかった。



(図 4-3 : 動物類の種類別語彙数 作成 : 栗山緑)



(図 4-4 : 動物類のなかで用いられた「あし」の部位 作成 : 栗山緑)



(図 4-5 : 動物類の「あし」の動きの種類別語彙数 作成 : 栗山緑)

## 2. 動植物語彙と「あし」

以上の結果から、動物類に関しては鳥類の「あし」がほ乳類と同じ語彙数であったということは、鳥類は地上ではヒトと同様に二足の脚の立位姿勢を行う動物だからであろう。

また、「あし」の次に「脛（脛）」を対象としていることが多いのは、その語彙が生まれた当時の日本人がヒトの脚の構造に関する理解を鳥類にあてはめたことが窺える。

というのは、鳥類の脚の構造は、腿は羽毛に隠れて見えず、見えているところは、上部から「脛」、屈折した箇所の下が「跗蹠（ふしゅ）」<sup>236</sup>、そして地面に接している部分が「趾（ゆび）」である。ヒトの脚の構造の解釈をそのまま鳥類にあてはめようとする、鳥類の「脛」の部分「腿」、足裏から踵の部分とされている「跗蹠」を「脛」、そして「足趾（ゆび）」の部分「足（足裏と足ゆび）」とみなすことになる。

鳥類の脚の屈折方向は、ヒトの脚の屈折とは逆であることが、踵から脛の部分である証拠なのだが、脚として視覚的に確認できる部分で屈折するところを「膝」と認識し、その下部ということで鳥類の「跗蹠」の部分「脛」として、ヒトの脚の構造の解釈をそのまま鳥類にあてはめていたのである。

以上のような誤解が、動植物に関する語彙・ことわざ・慣用句のなかの鳥類の「あし」の部分として使われた部位に、「足」の次に「脛」が用いられることが多かった理由であると考えられる。鳥類の下肢の構造からすると、「足下」とすべき部位であるが、語彙・ことわざ・慣用句で「脛」として用いられているのでそのままの語彙で分類した。

動物類の「あし」の動きに関しては、全体的に少ない語彙数であるが、その中で「歩き」が最も多いのは、動物にとっても「歩き」が「あし」の基本的な機能であることを示している。

しかし、ここで興味深い点は「地団駄」という動きを動物の「あし」に見ていることである。語彙数は少ないが、その「地団駄」を踏む動物は、石亀、スッポン、泥鰌で、風刺の意味で取り上げられた動物であるが、亀にできる「あし」の動きは「歩き」以外に「地団駄」くらいであるという意味である。

確かに、亀は「歩く」以外には急いで「歩く」ことであろうし、それが「走る」にとは考え難いが、「地団駄」を踏むことは想像可能である。このような豊かな想像力を持ち合わせていた当時の日本人に、一種の感動すら覚える。

今日では、「地団駄」という言葉すらあまり聞かなくなり、そしてもちろん「地団駄」を踏んでいる人をみかけることもない。「地団駄」という「あし」の動きを使った慣用句が生まれた頃の日本人は、「地団駄」を踏むことを日常茶飯事に行っていたのであろう。それは、当時の日本人は素直に身体を使って感情表現していたことを意味しているのかもしれない。

では次に、植物類に関してしてみると、まず「あし」に関する語彙が動物類に比べて極端に少ないのは、やはり「あし」は動く「からだ」の部位であるという認識が由来していることが考えられる。植物は基本的に動かない生物である。

また、数少ない植物自体に「あし」を反映させた4語彙は、木の幹やその部分から分かれた箇所を「股」としているものと、野菜である大根を表現の題材

としていることから、「あし」は「からだ」のなかでも「太くて」という認識の表れであろう。

ここに、植物類に関する考察にも、動物類の考察で述べた日本人の豊かな感性を付け加えるべき語彙は、「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」である。基本的には移動しない植物に、人の歩容の動きを投影しているのは、日本人女性の歩容の特徴をしっかりと認識しているからである。確かに、着物を着て草履や下駄を履いて歩く姿は、ゆらゆらとおぼつかなく歩いているような歩行形態である。当時の日本人の観察力とその表現力は絶妙である。

以上が、本手法で自然を愛でる心が強く、またあらゆる対象物に感情移入する傾向が指摘されている日本人の「あし」に関する認識について、語彙・ことわざ・慣用句のなかに追究した結果である。それは、日本人の基本的な「あし」観を探究することを目的とした分析でもあった。

### 3. まとめ

主要参考文献に収録されている約 5,900 の総語彙の中で、「あし」に関する語彙は 60 余りであったが<sup>237</sup>、約 20 種類の動物の「あし」を対象とした語彙と、10 余りの植物を対象とした語彙に対して検討を加えた。

動植物という自然界の中に日本人の「あし」に対する認識を追究した結果、「あし」は「立っている」（立位姿勢）、「太い」、「動く」（歩く、地団駄）部位というのが、人間の「あし」の基本的な認識であることがわかった。

また、本分析方法の数量的結果の判断は、多言語との比較など言語学的に詳細な検証が必要であるが、個々の語彙の意味内容からは日本人の感性ゆたかな表現力や想像力、そしてその基盤にある注意深い観察力の存在に驚かされる。

さらにいえることは、多くの種類の動物に人間の「あし」を投影していて、その対象となった動物が身近に存在していたことの証明であろう。

本手法で明らかにした語彙のほとんどは、今日の現代社会で使われていない。先人が作り上げたこれらの風情や含蓄ある豊かな「ことば」が使われることなく、あるいは知られることなく過ぎ去っていることは、貴重な日本文化が失われていることを意味する。

その要因には、現代の環境破壊や自然と分離した生活のなかでは、昔の日本人がもっていた感性を共有できる環境がないこともある。

本節で明らかになった日本人の「あし」に関する認識である「立つ」、「太い」、「動く」部位という人間の「あし」の基本的存在意義が、現代の日本人の「あし」観から希薄になりつつある。すなわち、「立つ」ことが減り、折り曲げて椅子に「座っている」ことが多くなり、「太く」て丈夫だった「あし」は、筋力がおちて「細く」なり、そして自分の「あし」を使って「動く」機会が激減している。

身体的にますます怠惰になりつつある現代日本人が、もっと積極的に「あし」を動かすことは、生理学的な体力や筋力の回復のみならず、本来、民族的に有していた豊かな感性の回復のためにも不可欠であるというのが、本章の議論が至った結論である。

#### 第四節 「俗語」のなかの「あし」

本章における言語的考察において対象とした「からだ」の部位名称、「からだことば」、そして「ことわざ慣用句」といった「ことば」は、伝統的慣習、倫理観など、日本人がもつ特有の価値観が基盤となっているといえる。そこで本節においては、現代日本人の概念が基盤となった「ことば」を題材にして、そのなかの「あし」について考察する。その題材として選んだのが、「俗語」である。

「俗語」とは、公式な場面では用いられないがくだけた場合にのみ用いられる「隠語」、「スラング (slang)」、「若者ことば」などのことで、荒い・汚い・下品・俗っぽいなどと意識される語彙や言い回しのことでもある。『若者ことば辞典』<sup>238</sup>の著者米川(2009)も、「俗語」は人の心理、社会・世相をよく反映するものとして、その研究意義を強調している<sup>239</sup>。

#### 1. 「若者ことば」・「新語」・「流行語」のなかの「あし」

「俗語」のなかの「あし」を追究するにあたり、参考文献は『若者ことば辞典』(東京堂出版、1999)<sup>240</sup>、『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』(三省堂、2002)<sup>241</sup>、『現代若者ことば考』(丸善、1996)<sup>242</sup>、『平成・新語×流行語小辞典』(講談社、1999)<sup>243</sup>及び『現代用語の基礎知識』(自由国民社、1998～2013)とした。そして『からだことば辞典』に倣って、「からだ」の部位名称及びその分泌物・排泄物を使用した語彙を抽出し、それらを「からだ」の各部位及び分泌物・排泄物別に分類した。

これら蒐集・分類した「ことば」を「新からだことば」とし、「新からだことば」集を作成した(表4-4)。また、本研究における「現代」とは、第二次世界大戦以後とし、1945年以降の「俗語」から「からだ」に関する語彙を抽出した。

その結果、24の部位名称を使った合計78語の「新からだことば」を確認した<sup>244</sup>。そしてその内訳は、「足」に関する語彙が16語で最も多く、次に

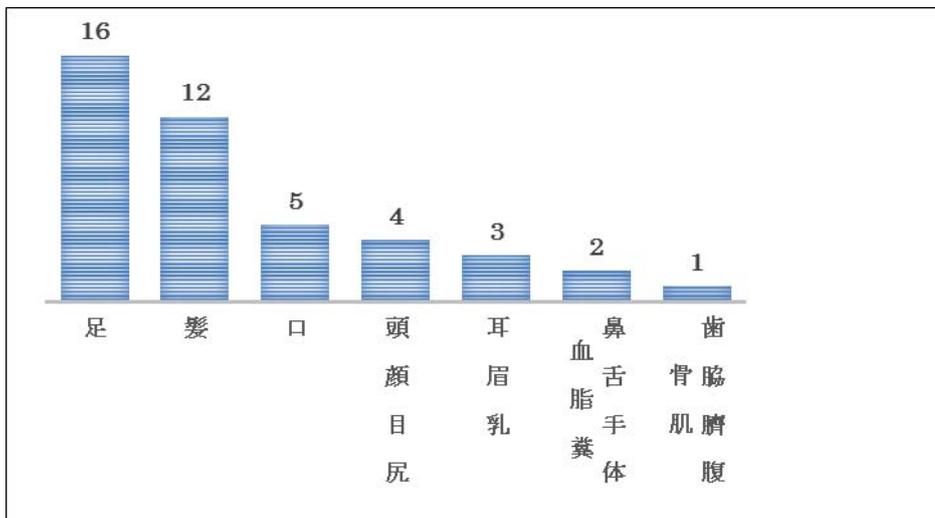
「髪」(12語)、「口」(5語)、「頭」・「顔」・「目」・「尻」それぞれ4語、「耳」・「眉」・「乳」それぞれが3語、「鼻」・「舌」・「手」・「体」・「血」・「脂」・「糞」それぞれが2語、「歯」・「脇」・「臍」・「腹」・「骨」・「肌」それぞれ1語であった(図4-6)。

	部位名	数	語彙	意味
1	頭	1	井のヘッド	井の頭線（首都圏の鉄道路線名称）
		2	頭湧いてる	頭がおかしい（「頭に虫が湧いている」から）
		3	八頭身	八頭身の伊東絹子がミス・ユニバースで3位入賞したことから広まった語
		4	洗脳	中国で反革命分子に行われた思想改造。中国語からの借用
2	顔	1	ガングロ	顔黒、色の黒い人
		2	顔不（がんど）ー	顔が不細工（ぶす）
		3	顔キャラ	Emailで○や×の記号で表情をつくって送ること
		4	ニューフェース	東宝が新人募集に使ったことば
3	耳	1	耳ダンボ	聞き耳を立てる。象の「ダンボ」の耳のように大きくなるさま
		2	馬耳る	人の言うことを聞かない
		3	耳ピ	耳ピアス
4	眉	1	マユラー	眉毛を書くのに命をかけている人
		2	on the 眉毛	前髪を眉毛のちょうど上で切りそろえていること
		3	リリ眉	郷ひろみのような眉毛
5	目	1	眼点	びっくりする意味
		2	out of 眼中	ある異性のことが眼中にないこと、問題外
		3	目点	非常に驚いた様子
		4	目が十字架になる	目がキラッと光る
6	鼻	1	鼻ピ	鼻のピアス
		2	鼻血ブー	性的な興奮状態を指すことば
7	口	1	Lucky Pocky 歯ぐきー	「キー」の語呂を合わせたただじゃれ
		2	口ピ	口のピアス
		3	口裂け女	通りすがりに「わたし、きれい？」と尋ね、「うん」と答えると、マスクをはずして耳元まで裂けた口をあけて笑うといううわさの女
		4	口コミ	口から口へと個人的に伝えていくコミュニケーションを意味する
		5	ため口をきく	年上、目上の人に友達にはなすような口調で話す
8	歯	1	歯紅	歯に口紅がついているさま
9	舌	1	滑舌	話すときのなめらかさ
		2	べろピ	唇のピアス
10	顎	1	顎足付き	「あご」は食事、「あし」は交通費、食事・交通費は先方持ち(TV・芸能・映画業界用語)
11	髪	1	くじゃくヘアー	前髪を上向きにカールさせて立たせた髪型
		2	毛さら	毛がさらさら
		3	ばつきん	金髪

		4	あほ毛	頭のでっぺんから二、三本とび出している短い毛
		5	茶い毛	茶色い髪の中の毛（茶々毛）
		6	茶髪	脱色または染色した茶色の髪
		7	ちり毛	天然パーマのちりちりの髪の中の毛
		8	リカちゃん毛	リカちゃん人形のようなバサバサで硬い髪の中の毛
		9	ルン毛	女の子の耳にかけている髪の中の毛が「し」のようにルンルンとはねているもの
		10	ロン毛	男のロングヘアー
		11	気苦労ヘアー	うまくまとまらない髪
		12	電髪	パーマメントウェーブ
12	手	1	山ハンド	山手線（首都圏の鉄道路線名称）
		2	Monkey hand	毛むくじゅらの手
13	脇	1	脇シュー	脇にシューシューとかける制汗スプレー
14	乳	1	爆乳	胸が非常に大きいこと
		2	貧乳	女性の胸の小さいさま
		3	F乳	フェイクな（Fake:見せかけの）乳パットで大きく見せている乳房
15	臍	1	へそピ	へそピアス
16	腹	1	デバラ	腹が出ている人
17	尻	1	プリケツ	おしりがプリッと出ていること、ヒップアップした形のいいおしり
		2	二尻	自転車、バイクの二人乗り
		3	半尻	一つの席に二人が半分ずつ座ること
		4	腰パン（ケツパン）	ズボンを下げてはいてトランクスのがのぞけるようにすること
18	足	1	象足	太くてくびれのない女性の足首
		2	ししゃも足	ふくらはぎがふくれ、足首が細くしまった足
		3	アスパラ足	白く細く長い足
		4	レンコン足	膝と足首だけが妙に細い足
		5	ごぼう足	ごぼうのように細い足
		6	こんにゃく足	運動不足、歩かないせいで、筋肉に張りがなくがっちりしていない、非常に柔らかい足
		7	ポッキー足	グリコポッキーのように、黒く日焼けした部分と靴下をはいていて日焼けしていない部分とにくっきり分かれている足
		8	サリーちゃん（足）	足が上から下までくびれがなく同じ太さで細い人。またその足
		9	アッシー君	足代わり代わりに車で女性を送迎する男性
		10	なま足	靴下・パンストをはかない素足
		11	かわ足	足をかわいく見せること
		12	柄足	タイツやレースの模様のストッキング、またそれをはいた足
		13	ゲタ入ってる	扁平足

18	足	14	レッグ・ハンティング	何の専門知識も経験も身につかないうちに会社を転々とする、ヘッド・ハンティングの対語
		15	足が棒	足が棒になるほど歩きまわること
		16	顎足付き	「顎」の項目の「顎足付き」に同じ
19	体	1	体入	一日だけキャバクラに体験入店してお金を稼ぐこと
		2	ボディ・コンシャス	女性らしさを表現する、体の線にぴったりしたファッション
20	脂	1	脂ギッシュ	脂ぎった+エネルギー
		2	オイラー (oiler)	脂性の人、しつこい人
21	骨	1	ボンレスハム	象足に同じ (太くてくびれない女性の足首)
22	血	1	喀血	ものすごく忙しくて血を吐きそうなこと
		2	血のメーデー (May Day)	再軍備反対のデモンストレーションで、2,300人がけがをした
23	肌	1	チキン肌	鳥肌
24	糞	1	糞ゲー	つまらないTVゲーム、ソフトウェア
		2	うんこ座り	道端などにしゃがみこむ姿勢、和式トイレで大便をする姿勢から名付けられた。

(表 4-4 : 「新からだことば」集 作成 : 栗山緑)



(図 4-6 : 「新からだことば」の各部位の語彙数 作成 : 栗山緑)

## 2. 「新からだことば」考

「俗語」である「若者ことば」・「新語」・「流行語」のなかから抽出した「からだ」に関する語彙である「新からだことば」には、多くのカタカナ表記、外来語（英語）が使用されていた。そして、「眉ラー」や「デバラー」のよう

に、英語の規則である語尾に‘er’をつけて人を表す単語にすることを日本語の名詞に活用させる英語化された語彙、また「山ハンド」・「アスパラ足」・「チキン肌」等に見る外国語の固有名称と組み合わせた語彙など、外来語が多く導入されていた。

そして、「からだ」に関する「俗語」のほとんどが「若者ことば」であったことから、戦後の青年層の「からだ」の意識を反映した語彙である。

「新からだことば」のなかで最多語彙が「足」で、その次が「髪」であることから、若者の意識が高い「からだ」の部位であることを示唆しているといえる。「若者ことば」は女性中心に展開されているということも、この結果の裏付けとなっている。

「あし」に関する語彙を詳細にみると、上記の現代の国際化社会の影響であるカタカナ表記された「アスパラ足」や「アッシー君」、また「素足」や「裸足」ではなく「生(なま)足」と表現する新規性や「レッグ・ハンティング」にみる奇抜性、「サリーちゃん足」や「ポッキー足」など漫画の登場人物や既製菓子を題材としていることから、まさに現代社会を写し出しているが、従来の「からだことば」では自然界の生物が題材であったのとは対照的である。この違いは、身近にあるものが「ことば」の対象となることを示唆しているといえる。

『若者ことば辞典』の著者でもある米川明彦(2009)は、1970年代前半まで続いた高度経済成長期の日本人の価値基準は「まじめ」であったが、物質的に豊かな社会になると消費や娯楽を追求するようになり、「楽(らく)」が価値基準となった。それが「ことば」にも反映され、特に社会的に自由な青年層を中心にその価値基準が展開され、「楽(らく)」と「楽(たの)しく」話す「若者ことば」が形成されていると述べている<sup>245</sup>。

確かに、「新からだことば」からは「ノリ」のよさや楽しさを感じるが、従来の「からだことば」のもつ優雅さや趣深さといったものは感じられない。そ

これは、「からだことば」の最多語彙順の上位には、「身」（4位）や「面」（8位）という語彙があり、「掌」という語彙も含まれているが、「新からだことば」にはそのような語彙はないこともこの結果を象徴しているであろう。そして、「新からだことば」の「あし」は、静的な意味合いがほとんどで、従来の「からだことば」の「あし」は（活）動的な意味合いが多かったことの差異については、一考すべき点である。

この静的な意味合いが示唆することは、「新からだことば」の「あし」の概念が「見た目（ルックス）」重視ということであろう。それは、「新からだことば」のほとんどを「若者ことば」が占めているので、若者の常に「美しく」あるいは「恰好よく」見られたいという意識が反映しているといえる。

「新からだことば」のなかで、動的な意味合いをもつ「あし」の語彙として、「歩容」名称も抽出したが、4語彙だけだった。それらを「新歩容」名称として以下のように表を作成した（表4-5）。

分類	数	「新歩容」名称	意味
歩	1	徒歩（とほ）る	歩く
走	1	マッハする	全速力で走る
	2	ダッシュる	全力疾走する。ダッシュする
その他	1	走り（ばしり）	使い走り

（表4-5：「新歩容」名称表 作成：栗山緑）

「新歩容」名称は、的確な分析を行い得るほどの総数が不足しているのであるが、個々にその語彙を検討すると、「歩」の分類の「徒歩る」は、「歩く」ことを「徒歩」という語に「～（す）る」をつけて動詞化していることに、その新規性あるいは「徒歩」という「歩く」の文語体を使用して口語に用いていることに奇抜性が窺える。

「走」の分類の「マッハする」・「ダッシュる」からは、「新からだことば」全体の傾向としての英語表記化と現代社会の高速化の双方の影響がみられるの

である。それは、第二章第五節「急か急か歩容」で明らかになった、高速度化社会のなかでは「歩く」が「セカセカ」速度になっていたことと統合できるような、「ことば」のなかにみえる日本人の「歩容」形態なのである。「ことば」はまさに、社会を反映して生まれていることがわかる。

また、「新歩容名称」が4語彙しか存在していないことは、現代の若者にとって「歩容」という行為には、俗語化するに十分な「ノリ」や「楽」、あるいは新規性や奇抜性が見出せないのか、あるいは俗語化する語彙としての感性の不足、すなわち、「歩く」や「走る」という行為が十分実践されていないという危惧感をもつにいたるのである。

その他の分類の「走り（ぱしり）」からは、若者世代であっても日本の上下関係重視の人間関係に対応していることを反映した語彙である。まさに、日本文化が反映した「ことば」といえる。

### 3. まとめ

「俗語」から考察した「あし」は、戦後の青年層の概念が基盤となっているものであった。そして、その「あし」の語彙の特徴は活動的な「あし」の意味をもっている語彙がほとんど見当たらなかった。それは、現代社会のあらゆることが自動化された環境で暮らす日本人の実情を物語っているのである。

そして、「新からだことば」の中で「あし」の語彙が最多であることの意味を、ここで改めて再考すると、(2)「新からだことば」考で述べた、「髪」が二番目に最多の語彙であったことと合わせて、若者、特に青年女性にとって気になる部位であることを要因としてあげた。それは「若者ことば」が女性を中心に展開されていることを論拠とした。

この点を詳細に検討すると、「あし」が見られる、あるいは見せる部分として存在する部位であるということで、戦前までの日本人女性の「あし」は、和装のなかで「あし」の形は全く見えず（わからず）、見えるのは足（先）だけ

であった。すなわち、洋装のなかの「あし」とは、必然的に「あし」を比喻する内容も変わってくるのである。

洋装の現代人女性の「あし」は、素肌あるいはストッキング、スカートあるいはズボンにしろ、「あし」のほとんどの部分の様相は明確に見えるので、「ししゃも」や「ごぼう」や「ポッキー」など多様な比喻の対象となり得、その結果語彙数も多くなる。

その上、日常生活のなかで床に坐するよりも、椅子に座ることがほとんどの現代の生活では、「坐」の生活に比べて「あし」の存在感は大きい。さらにいえば、戦後の欧米化の影響は、日本人の「あし」の概念に大きく、見せる部位という概念が付与された。それはもちろん、ファッション情勢に敏感な若者に影響し、「若者ことば」の形成にも当然ながら欧米化の風が吹いたのである。

「坐」の文化のなかの「あし」は、「膝」の存在感が大きかったが、欧米化された社会のなかの「あし」は、「あし」全体である「脚」の主張が大きくなり、「膝」の存在感が希薄になっている。それを証拠立てるように、「新からだことば」には、「膝」に関する語彙が全くないのである。

そして、伝統的な「ことば」である「からだことば」で圧倒的な最多数を誇った「手」の語彙は、「新からだことば」のなかでは2語彙だけであることも一考すべき点で、「新からだことば」からは、「手の日本人」や「手仕事の日本」という概念がみえてこないのである。

「新からだことば」のなかの最多語彙数からすると、現代は「足の日本人」になっている。そしてその内容からは、「動き」のない「静的な‘あし’の日本人」なのである。

また、「からだことば」のなかの語彙数の比較では、「目は口ほどにものをいう」を証拠づける結果であり、またそれ以上に「手」は「目」や「口」よりも雄弁で「手は口ほどにものをいう」であることを指摘した。

「新からだことば」では「髪」が「口」よりも雄弁で「髪は口ほどにものをいう」であるが、何より「足は口ほどにものをいう」結果なのである（図 4-5 参照）。

現代で「髪」が雄弁になった所以を、日本文化のなかで再考してみると、雄弁になるきっかけがあったのである。

それは、明治以前の日本人の髪型といえば男性は髷を結び、女性は腰までもある長髪を結び上げる以外になかった。すなわち、髪型の種類の選択は少なかったのである。それが、明治維新とともに男女ともに髪型の自由化を獲得するのであった。そのことを象徴する新語が大正期、明治期に多く生まれている。蒐集においてまだ追究不足の点はあるが、現段階までに確認した明治期と大正期の「新からだことば」集を以下に示す（表 4-6、表 4-7）。

部位名	数	語彙	意味
頭	1	ざんぎり頭	剃ったり結んだりしない、短髪のイガグリ状の男性の頭髪
	2	総髪頭	月代を伸ばして髪を後ろに下げた髪型「総髪頭をたたいてみれば王政復古の音がする」
脳	1	脳病院	精神病院
髪	1	束髪	女性の洋髪スタイル
	2	催促髷	未婚女性が結う島田髷。結婚を催促しているように見えることから、女流画家間の流行語になった
	3	庇髪	女性の前髪が庇のように飛び出している束髪
	4	半髪	月代を剃って小鬢を残した頭髪
顔	1	美顔術	顔のエステティック施術
目	1	千里眼	透視能力のこと
	2	広目屋	楽隊を伴って巡回した宣伝屋、ジンタ。チンドン屋
鼻	1	隆鼻術	美容整形手術
髭	1	官員ひげ	官員がひげを生やすことが流行、なまず（官員）ひげ、どじょう（下級官吏）ひげ

（表 4-6：明治期の「新からだことば」集 作成：栗山緑）

部位名	数	語彙	意味
髪	1	女優髷	帝国劇場の女優が前髪を七三に分けていたことからはやった髪型
	2	断髪	昭和初期までにかけてモダンガールと呼ばれた女性の間にはやった短く刈り上げた髪型
	3	オール・バック	飛行家スミス氏が紹介した髪型。‘Straight Back’ヘアスタイルのこと。
耳	1	耳隠し	昭和初期までにかけて女性のあいだに流行した耳の隠れる髪型

(表 4-7: 大正期の「新からだことば」集 作成: 栗山緑)

明治期も大正期も最多の「新からだことば」は「髪」で、明治維新や大正デモクラシーの影響で、日本の伝統的な身体文化に革命が起きたことに基づいているのであろう。それも、「からだ」のなかでも頭部に最も新風が吹き寄せたとでもいうように、頭から上だけの語彙に「新からだことば」が生まれている。

以上のように、日本文化における「髪」の文化的背景を明らかにしたが、現代の「新からだことば」に「髪」に関する語彙が二番目に多いということに戻ると、「髪」が比喩表現の対象媒体として適しているということの証明なのである。

青年女性にとっての「髪」だからということが大きな要因ではあるが、もう一つ日本人の髪の特徴が、真っ直ぐな黒髪であるということが、着色したり、パーマをかけたりといった多様な変化が楽しめるということの一因をあげておきたい。

さらには、日本文化のなかでの「一髪、二姿、三器量」<sup>246</sup> という髪に高い価値をおく観念が、現代日本人女性のなかに息づいていて、「新からだことば」の語彙数の増加に影響したという推論も不可能ではない。本研究の対象ではないが、日本人の「髪」に関しては、さらに精細な考究が必要であろう。

最後に、「俗語」のなかの「あし」の考察として、語彙数に関して述べておく。73種 6,003語彙ある「からだことば」の「ことば」は、古来の語彙が蒐

集されたものであるので、少なくとも 1000 年以上の間に存在した語彙からの抽出である。それに対して「新からだことば」は戦後 70 年あまりの間に形成されたもので、24 項目 78 語彙確認できたことを鑑みると、短期間に数多くの「新からだことば」が生まれたのである。それが、伝統的な「からだことば」のような豊富な数になるのは、遠い未来のことではないのかもしれない。

## 第五節 「歩容」語彙

本章における言語的視座からの「あし」の考察の最後に、「歩容」に関する「ことば」を取り上げる。「あし」の基本的な機能である「歩容」については、第二章で機能的な側面から日本人特有と指摘されている歩容形態について論考したが、本節においては、日本人が「歩容」をどのように表現していたかということを見ていくことで、「ことば」から日本人の「歩容」の機能的側面を考察する。その方法としては「歩容」に関する語彙を手掛かりに行う。

### 1. 「歩き」と「走り」の語彙

日本語のなかの「歩容」に関する語彙として代表的なものとして、まず思い当たるのは、「千鳥足」だろうか、あるいは「抜足・差足・忍足」といった一つの慣用句のような形で思い出す語彙ではないだろうか。

このような「歩容」に関する語彙を歩容語彙として蒐集し分析する。その際、「あし」の基本的な機能である「歩き」と「走り」に関する語彙を抽出する手がかりとして、「歩」、「走」、「足」の字を使用して歩容形態を表現している語彙を、『漢和辞典』（『学研新漢和大字典』普及版、学習研究社、2005）<sup>247</sup>、『字訓』（平凡社、2005）<sup>248</sup>、『広辞苑』（岩波書店、2008）<sup>249</sup>、『これは使える体ことば辞典』（講談社、2000）<sup>250</sup>を主たる参考文献として蒐集した。そして、この研究方法においては、一般的な日本人の歩容形態の

考察を目的とするために、「勇足（いさみあし）」、「真秀足（まほあし）」等の武術や歩行術における専門的な歩容語彙は除外した。

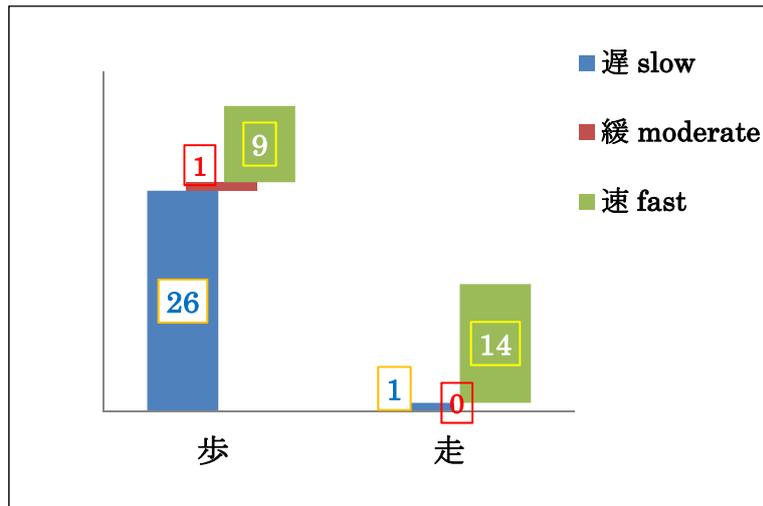
蒐集した歩容語彙は、その意味内容から「歩き（walking）」と「走り（run）」に分け、それらをさらに意味内容から察した歩容速度別に「遅（slow）」、「緩（moderate）」、「速（fast）」に分類した（表 4-8）。

その結果、「歩き」の歩容語彙は 36、「走り」の語彙は 15 の合計 51 語彙を蒐集した。そしてその内訳は、「歩き」の歩容語彙には「遅（slow）」が 26、「緩（moderate）」が 1、「速（fast）」が 9 語彙あり、「走り」の歩容語彙には、「遅（slow）」が 1、「速（fast）」が 14 語彙あった（図 4-7）。

種類	速度	数	名称	意味
歩 walk	遅 slow	1	安歩	ゆっくり歩く、しずしずと歩く
		2	間歩	静かにぶらぶら歩くこと
		3	遊歩	ぶらぶらと歩くこと、そぞろ歩き、散歩
		4	散歩	気晴らしや健康などのために、ぶらぶら歩くこと
		5	緩歩	ゆっくり歩くこと
		6	牛歩	歩みの遅いこと
		7	運歩	歩を運ぶこと(歩くこと)
		8	歩月	月の光をふんで歩く、風雅のために歩くこと
		9	摺足	足の裏で摺るようにして静かに歩くこと
		10	盗足	音のしないように、そっと歩くこと
		11	抜足	音のしないように、そっと足を上げてつま先立てて歩くこと
		12	差足	音のしないように、つま先のほうからそっと足をつけて歩くこと
		13	忍足	足音をたてないように、こっそり歩く足どり
		14	浮足	足の爪先だけが地面について、踵が上がり十分に地を踏んでいないこと
		15	探足	足元を探りながら歩くこと
		16	拾足	泥道などでよいところを選んで歩くこと(拾歩)
		17	雪足	鷺が歩くように、足を高く上げて歩く歩き方、ぬきあし、さぎあし
		18	千鳥足	左右の足の踏み所を違えて歩く、千鳥のような足つき
		19	乱足	歩き疲れたり、酔ったり、また病気のためなどで乱れた足つき
		20	高足	足を高く上げて歩くこと
		21	闊歩	大股で堂々と歩くこと

		22	虎歩	虎のように堂々と歩くこと
		23	禹歩（反閑）	大股で歩くこと
		24	帰足	帰ろうとする足どり、帰り道
		25	徒歩	乗り物にのらず足でいくこと
		26	遠足	遠い所まで出掛けること
	緩 moderate	27	軽歩	かるやかに歩くこと
	速 fast	28	驚足	大股に騒々しく歩くこと
		29	長足	歩みの速いこと、大股
		30	急足	急いで歩くこと
		31	急歩	急いで歩くこと（いそぎあし）
		32	早（速）足	歩くのが速いこと、健脚
		33	疾歩	足早に歩くこと
		34	刻足	小股に急いで歩くこと
		35	逃足	逃げようとする足つき
	36	飛足	飛ぶように速い足つき	
走 run	遅 slow	1	鈍足	走るのが遅いこと
	速 fast	1	却走	退き走ること
		2	出走	外に走りでる
		3	趨走	走りおもむくこと
		4	馳歩	走りまわる
		5	狂走	めちやくちやに走りまわること
		6	駆足	速く走ること
		7	迅走	速く走ること
		8	逸足	急いで走ること
		9	快足	きわめて足の速いこと、速く走れる足
		10	駿足	足の速いこと
		11	疾走	非常に速く走ること
		12	逸走	逃げ走ること
		13	馳走	走りまわること
		14	快走	気持ちがよいほど速く走ること

（表 4-8：歩容語彙表 作成：栗山緑）



(図 4-7 : 「歩き」と「走り」の歩容語彙数の速度別分類 作成：栗山緑)

## 2. まとめ

「足」・「歩」・「走」の漢字を含む「歩容」に関する語彙を合計 51 確認したが、「逍遙」など「足」・「歩」・「走」以外の漢字で「歩容」形態を表現する語彙もあるので、それらを含めるとまだまだ多くの歩容語彙が日本語には存在するはずである。

この 51 語彙数をどう評価するかについては、「言語学」という専門領域での分析が必要である。しかし、本研究ではそのような詳細な検証は考察方法として取り入れていないので、「ことば」を一般的に分析した結果によって明らかになったことを論じる。

それは、それぞれの歩容の語彙がいつごろから一般認識されるようになったかという時代的背景で、その当時の日本人の「歩容」についての認識の考察といえよう。

そこで、それぞれの歩容語彙の初出の文献の時期を調べたところ、出典が確認できないものが 3 語(「雪足」、「高足」、「長足」)あったが、「鈍足」<sup>251</sup> 以外は出典時期が昭和初期以前のものであった。すなわち、本研究手法で

蒐集した歩容語彙は、昭和期以前の日本人にとっての「歩容」の種類ということとなった。

そして、これらの歩容語彙の特徴としては、「運歩」・「歩月」・「千鳥足」・「拾足」など風情ある表現された歩容語彙が多いということである。また、意味内容が「散歩」や「歩月」など「歩容」の目的を意味するもの、「安歩」・「飛足」など「歩容」速度を表わすもの、「浮足」・「拾足」など足運びの詳細を示すもの、「雪足（鷺あし）」・「虎足」など動物の歩容形態と照らし合わせているもの、「馳走」・「迅走」・「逸足」など同速の表現も幾種もあるなど、多種多様に意味づけされた語彙なのである。

この特徴は、日本語が「漢字」という表現媒体を用いるがゆえに、「歩」・「走」・「足」という文字と組み合わせるだけでその詳細を表現することを可能にするからかもしれないが、見事に「歩容」の詳細を表現している。

それにも増して、その表現の主人である当時の日本人がこのように詳細に、「歩容」状況を表現する繊細な感性を持ち合わせていることに注目すべきである。その感性が基盤になって、このような多種多様な意味内容の歩容語彙が存在しているに違いないからだ。

そして一考すべき点は、これらの表現豊かな語彙のほとんどが現在では使われていないということである。私たちに馴染み深いものは、「散歩」・「徒歩」・「遠足」、そして冒頭でとりあげた「抜足」・「差足」・「忍足」くらいであり、その数は僅少である。

さらに追加する点としては、これらの多種多様な歩容語彙を認識していた昭和期以前の日本人の「あし」は、現代人と比べて、活動的かつ巧みな足運びを行う能力を有していたことが見て取れるのである。以上のように、歩容語彙を題材として日本人の「あし」を考察した。

## 第六節 考察

本章において、日本人にとっての「あし」を言語的視座から考察するために、第一節「からだ」の部位名称、第二節 身体語彙「からだことば」、第三節 自然に関する語彙・ことわざ・慣用句、第四節「俗語」、第五節「歩容語彙」というふうに、五種類の語彙を題材として選んだ。

その結果、以下のことが明らかになった。

- ①「あし」は、大まかな日本人の身体認識の代表例とされる
- ②豊富な「からだことば」のなかの「あし」は、語彙数が最多上位に入る
- ③古来、日本人は、「あし」を「立位姿勢」・「動く」・「太い」という認識で捉えていた
- ④現代の青年層にとっての「あし」は、動きのための道具というより視覚的対象のための一部位という認識で捉えられている
- ⑤「歩容」の目的・速度・足取りを表現する繊細な感性を有していた

ここで、本章の冒頭に取り上げた日本人の身体認識の大まかさについて再考する。

まず、この大まかさは時代をさかのぼると、よりその傾向が強くなることが指摘されていたが<sup>252</sup>、ということは、この大まかさの程度が時代とともに変容しているということになる。

そして、古い時代にその傾向が強いということは、時代が新しくなるにつれ、その傾向が和らいでくるということになる。すなわちそれは、大まかにとらえることに支障がでてくるということではないか。

とすると、この大まかさの代表例として「あし」がしばしば取り上げられていたということは、「あし」が最も大まかな感覚でとらえるのに支障が出てきたということではないか。

それは、「からだ」の他の部位よりも、その新傾向による影響が多かったために、「あし」が日本人の身体認識の大まかさの代表にすることで、その理解が促しやすかったのである。そして、「あし」が受けた新傾向とは、次のような説明となる。

「坐」することが主流であった頃は、「あし」は折りたたまれ、あるいは尻の下に敷かれるといった状況で、「あし」全体が見えない。すなわち、「あし」のある部位を明確に示す必要性がなく、「あし」という語彙が「あし」のどの部分も意味するような大まかな語彙で十分であった。

ところが、近年になって「椅子の坐」の生活になると、折りたたまれていた「あし」が伸び、「あし」全体が見えるようになった。そして、「あし」の形状が長いので、いろいろと「あし」のある箇所を意味する必要性が増し、「あし」という語彙の大まかさに不便を覚えることが多くなった。

このような「からだ」のある部位に影響する環境の変化は、「あし」以外の他の「からだ」の部位に起きていなかったため、日本語の身体語彙の大まかさが不便になあってきた現代において、そのことを感じたに違いない多くの人にわかりやすい例として、「あし」が選ばれ、代表格となったという解釈である。

しかしそもそも、身体認識が大まかという判断する前に一考すべき点がある。それは、人体の区分というものがその文化の目的や必要性によって決められるので<sup>253</sup>、一概に、大まかであるとか細分化されているという判断には、十分な注意を払わなければならないのである。

というのは、この判断がなされるのは、他言語との比較によってはじめて自国の人体分節が独特なものであり、また同じ意味の部位名でもその意味する「からだ」の部位に多少なりとも違いがあることが判明する。そこで、初めて大まかであったり、細分化されていたりするとかの判定がくだされるのである。

ある言語での必要性によって分節された「からだ」の部位名称を、他言語のそれにそのまま当てはめることによって生じるこの判定は、時には「英語には‘腰’がない」というようなことになるのである<sup>254</sup>。

それは、日本語の「腰」を英語の **low back** に対応させて（訳して）いるが、よく見ると **low back** とは「背（**back**）の下部（**low**）」という意味で、「腰」という単語はないのである。それでは、**waist** を「腰」に対応させようとすると、**waist** は胴の最もくびれた狭い部位なので、「腰」の意味する **back** の下部と **hip** の領域を併せ持った部位には当てはまらないということで、言語的に詳細に分析すると、英語には「腰」がないことになってしまうのである。

また、この「腰」こそが、日本人の身体認識の「大まかさ」という指摘の範疇には入らない部位であり、また日本文化の独自性を表す部位でもあるので、「腰」と全く同じ意味での部位名称は他言語には存在しないのは当然であろう。

そして、この自国の人体分節の認識を他にあてはめようとする強引さが、日本人にはある。それは、第一節の冒頭でも取り上げた、「目尻」・「眉尻」・「矢尻」に見られるように、「からだ」の一部位にまで「からだ」全体を投影してきているのである。

また、この強引さは「隠語」にもあらわれおり、例えば新聞業界ではトップ記事の紙面を「頭」といい、二番目に重要なニュースを「肩」という。そして、正月元旦のトップ記事を書くことを「首を取る」という。さらには、紙面最上段の日付や新聞名などが載っている横書きの部分を「かんざし（簪）」と呼んだり、紙面下の横長い広告の箇所を「ズロース」（下着）と呼んだり、「からだ」のための衣類や装飾品を使ってまでその認識を適応させて名付けている。

特にこの強引さが顕著に表れるのが、第一節（2）うどんの腰についての考察のなかでとりあげた比喩表現における「腰」の意味の一つの「和歌の第三句の五文字」である。

また、短歌を代表とする和歌は、五音節句と七音節句との繰り返しによる音数律が基本となっているが、例えば「五七五七七」の音数律の短歌は、第三句の五文字が「腰」とされる。それは、第三句目が「五七五七七」という音数律のちょうど真ん中あたりになり、音数律を一つの「からだ」と見立てれば、「腰」のあたりになるという考え方である。

このように、日本人は目に見えない「ことば」にまでもその構成を一体の「からだ」と見立てて比喩するのである。日本人のあらゆるものに人体構造を投影してみる傾向の強さが、日本語の「からだことば」の語彙を類稀なほど豊富な量を生み出したに違いない。

しかし、この身体語彙に関して一貫しての疑問は、日本人は何故に比喩表現において「からだ」の部位に絶大なる信頼をおいているのかということである。

その可能性としては、「ことば」が人類にとっては比較的新しいものであり、まだ使い慣れていない段階でこのような比喩表現を形成していくにあたり、語彙だけで気持ちや想いを表現することに慣れておらず、誰にでも共通して理解できる「からだ」の部位名や動きを使って表現すれば、誤解なく伝えられる、といった感覚や理解があったのではないかということ述べたが、それが日本語に特に多いということに注目すべきであったので、ここで、「他の民族に比べて日本人は特に多い」と指摘する。

しかし、この点は太古の昔であっても現代においても、何も比喩表現を使わずに「ことば」だけで気持ちや想いを十分に伝えることは難しいということ、前述（第四章第二節 2. 「からだことば」考）の秦（1984）も、「‘からだ’の表現力や伝達力を、‘ことば’は、この際、日本語は大変上手にいかしている」と述べたうえで、「‘ことば’はなかなか十全な働きをしてくれる発明でなく、さまざまに他から補足され補強されて、どうやら大過なく人の世の役に立っているものだ」と分析をしている。

そして、「ことば」への不信または不十分な感じを、物書きである自分たちが痛感し、文芸とか話芸と言うように、ことばの「芸」を磨き、「技」を試みねばならないとも述べている<sup>255</sup>。

「ことば」という表現媒体は、もともと「想い」といった「こころ」を表現するのに十分ではないという特性の存在をみるのである。「ことば」を、その誕生から今日に至るまで、馴れ親しんで巧みに使い分けができていくようにみえても、やはり「からだ」の表現力や伝達力には及ばないのである。このことを、古代の日本人は「ことば」を使い始めた時からすでに感じていたのかもしれない。すなわち、日本人が比喩表現において「からだ」の部位に絶大な信頼をおいている理由の第一は、「ことば」という表現媒体の特性を的確に理解していたと思われる。

もう一つの可能性としては、日本人の感性ともいえる趣ある表現にする意図のためではないかということである。それは、誰にでもわかる「からだ」の部位名や動きを使うことで、日本語表現の特徴とも指摘されている暗喩的な表現にもなりえるのである。あれこれと「ことば」（語彙）を並べて表現するより、「からだ」を使って表現する方が的確でまたわかりやすく、そのうえさらに風情があり、時に粋すら感じさせるのである。日本人が「からだ」を信頼する理由は、実はそこを目指したのかもしれないと推測される。

もちろん、この第二の推論を確証させるためには、個々の「からだことば」の時代的背景を分析し、風情ある表現はいつ頃が多いのかといった検証という段階を踏むべきであるが、本研究の研究方法がそのような言語学的分析までは着手しておらず、ここ第四章の考察の推論の一つとしてあげるにとどまるを得ない。しかし、次段階の研究課題とすべき点ではある。

以上の二点が、日本人が「からだ」に絶大な信頼をおいて比喩表現の媒体とする所以となる。

ここで、「からだ」の部位を表す語彙が大まかであるという本章の主題に戻ると、この大まかさがあるがゆえに、前述した「目尻」・「矢尻」を始めとする、「隠語」や概念において、「パンの耳」や「うどんの腰」などを代表とする独自性の高い表現の域に達することができるのである。

すなわち、この表現効果を得るために、日本語の身体認識の「大まかさ」が存在しているに違いないとまで感じさせられるのである。

そして、言語的視座でみた日本人の「あし」に関する考えや印象については、その時代の社会や風潮を映し出していることが、「俗語」からの考察で明らかになった。

現代日本人の「からだ」の環境は、「あし」を動かす機会が減っているのは周知の事実であるが、コンピューターやリモコン使用の常識化に加え、昨今の *i-pad*・*i-phone*・*smartphone* の登場や IC カードの使用の一般化などから見ると、現代人の「手」や「指」に新たな環境が与えられているのである。

「手」や「指」に今までほとんどなかった動作が担わされている。指先だけを使って、ボタンを押したり、あるいは軽くすりこむような動き、卵くらいの大きさのものを始終掴んで小刻みに机上で動かしたりと、全く力のいらぬ簡単な動きなのである。このような「手」や「指」にとっての新たな動きが、どのように日本人の身体認識の大まかさと関係してくるかについては、まだ明らかにできてない。

このように述べていると、「あし」の考察とは離れていっているようだが、上半身の動きが大なり小なり変わっても「あし」は常に動作の基盤となって支えていることに注目しなくてはならない。

また、昨今の「手」や「指」に与えられた新たな動作環境は、まるで 21 世紀における新しい「手の日本人」、あるいは新しい「手仕事の日本」となっていることを意味しているのかもしれない。

さらには、この「手」や「指」の新たな動きに対して、どのような新概念が付与されるのか、そしてどのようなノリがよく、楽しい「俗語」が生まれるか等、日本人の「からだ」文化の新風潮に対する言語的な変化に興味は尽きない。

## 第五章 日本人と「あし」

本章において、日本人にとっての「あし」という問題提起のもとに、「あし」の概念について考察する。前節の言語的視座のなかで、その語彙から当時の日本人の「あし」に対する考えや理解といった概念的な考察も行ったが、本章においては日本人の「あし」の概念のなかでも一般的に認識されているものについて考察する。

物事の内容を考へる際、もちろん時代、世代によつて変容するが、一般的認識されているに日本人の「あし」に関する概念は、肯定的ではないようにみえる。それは「某さんの方には、足を向けては寝られない」、「三尺去つて師の影を踏まず」といった慣習やことわざは、21世紀になると古典的ともいわざるを得ないかもしれないが、時代を少しさげても「布団の上を踏まない」、「人の枕元を歩くべきでない」といった躰としての常識があり、そしてもちろん、「机の上に‘あし’をのせない」のは現在でも当然の礼儀であることから明らかである。

しかし、このような「あし」の行為に高い意識を払っているのはなぜであろうか。「あし」はそれほど注意を払わなければならないほどの「からだ」の部位のように見える。このように、すぐに考へうる日本人の「あし」の概念を押し測れる事象のすべてが肯定的とはいえず、むしろ否定的のようにみえる日本人の「あし」に関する概念を本章において考察する。

### 第一節 「あし」と日本人の衛生観

「あし」に対する印象で、万国共通なのが「臭い」とまずあげべきであったかもしれない。この「臭い」という印象をもつようになったのは、「あし」の保護機能のために作られた足を包み込むようにした形である閉塞型の履物の

「靴」を着用するようになった頃からである。すなわち、人類の長い歴史からするとごく最近の事なのである。

人類の「靴」の歴史は太古の昔までさかのぼるが、ヒトが「あし」を覆うものを着けるようになった理由は、まず「あし」を寒さや暑さ、疵や毒といった生死にかかわるような外的要因だったであろう。しかしそれだけではなく、「汚れ」や「湿潤」といった日々の生活のなかでの必要性から生まれたものもあるだろう。すなわち、「あし」が「からだ」のなかでは最も外部物質との接触を受けやすい部分であり、それはまた、最も「汚れ」の影響をうける部分であることは直立二足歩行を始めたヒトの宿命ともいえる事実で、「あし」＝汚いという印象を持つに至るに不思議はない。

さらに日本人は「あし」を保護のための履物を着用するようになって、その履物は「靴」のように「あし」を覆うのではなく、足底だけが藁や板で保護された解放型の履物であるので、履物を履いても「あし」は「汚れる」あるいは「汚い」という認識は、「靴」文化圏の人に比べ強かったに違いないと推測する。

そして、そのことを窺い知ることができるのが日本語の「あし」の語源なのである。「あし」の語源は『日本語源広辞典』（小学館、2005）<sup>256</sup> を例にみると、七つあげられているが<sup>257</sup>、その第一が「①アシ（悪）の意で、身体の悪しく汚い部分をいう。またはハシ（端）の転」で、二番めの説も「アはイヤの反。イヤシの転」とあり、日本人が体の下肢に名前をつけるにあたって「悪し」という印象が最も強かったことが推測できる。出典が江戸中期の語源辞書『日本積名』（貝原益軒著、1699年成立）であることから、江戸期の日本人にとって「あし」は「悪しく」で「汚い」あるいは「不潔」という一般認識が存在していたことになる。

しかし、日本人にとってこの「汚い」ということは、衛生的に「汚い」ということ以上の意味があることを、文化人類学者の大貫恵美子<sup>258</sup> が日本人の衛

生観について論じられている『日本人の病気観 - 象徴人類学的考察 - 』

(1985)<sup>259</sup>を参照し、本章の基礎資料としてここで詳細に検証したい。

では、大貫(1985)のいう現代(1980年代)の日本人の衛生習慣とは、「外」から帰ったらまず履物(靴)を脱ぎ、手を洗い、うがいをすることであり、それが子供の躰として多くの家庭で行われていると説明する<sup>260</sup>。確かに、このような儀式ともいえる衛生習慣を、21世紀の今日でも行っている。しかし、今日の方が強硬な病原菌や疾病の出現、大気汚染や自然環境の変化といった、つい半世紀前まででは考えられなかった複雑な環境に対応する衛生習慣は過度になっているといえる。それは、高価なマスク、手洗いのための高効果洗浄液などが常識化していることから窺えるのである。

大貫(1985)の鋭い観察力が発揮する、日本人の履物の着脱に関しては、子供用の靴には脱ぎ履きが楽にできるようにと、ゴムバンドやマジックテープなどがついていて、靴紐を締めたり緩めたりといった手間が省ける靴が重宝がられていることも、日本人の衛生習慣の反映として説明する<sup>261</sup>。21世紀の今日でも幼児用の靴にこのような機能がついていることはよく目にするが、マジックテープ付きの靴と言えは障害者用が定番だった感がある。日本人の履物の着脱の習慣は、あらゆる層にその解決策が施されていて、大人の靴では靴紐の靴でありながら、靴の側面や踵部分にチャック機能がついていて、着脱を容易にした機能靴は多い。そして、今日の高齢化社会に対応するためか、着脱事の面倒回避のためにこのような機能靴は増えている。下駄や草履といった日本の履物の着用時には、全く問題としてあげられるものではなかった。日本人が欧米的な住居に住み、靴生活になってから始まった新傾向である。

では、子供の履物の着脱習慣の例に戻ると、子供がバスや電車の内向きの座席から景色をながめるときにも表れるのは、日本文化の基盤にある「内・外」概念の「内」を車内に適用し、車外が「外」として振舞うためであると述べている<sup>262</sup>。

このような光景は、21世紀の今日ではあまり見かけなくなっているのは、多くのバスや電車の座席の向きが、進行方向に位置するようになったためなのか、今日の子供たちの興味が外の景色ではなく、手元のコンピューターゲームに移ったから等の種々の要因があげられるが、20世紀ごろまではよく見かける光景であった。

さらに大貫（1985）は、この「内・外」感覚は人間だけのものでなく、他の生き物にも適用されていることを、ペット犬を例にして説明する<sup>263</sup>。

それは、日本人にとって犬は「外」、猫は「内」に属すものであることが、犬は「外」で飼うもの、猫は「内（家の内）」で飼うものであった。それゆえに、アメリカの家庭で犬が居間のソファやあるいは寝室のベッドに寝ているのは、異様な感じを抱かせる。室内犬を飼っていた日本人の友人は、その犬の外出には抱きかかえて行き、屋外犬を家に入れる時には入念に犬の足を拭いていた、と大学の友人が大貫に語ったことを例として取り上げる<sup>264</sup>。

今日では、ペットとしての犬や猫の全国飼育世帯率が10%を超し、そのうち7割以上が犬・猫とも室内で飼育するという<sup>265</sup>。犬に関しては、外の散歩の後の入念な洗浄は現在も変わっていない。室内で飼う猫に関しては犬のように外へ散歩はしないので足の洗浄の必要性はない。日本人の「内・外」概念が、共に暮らす生き物までに及ぶ徹底性は、衛生感覚の強さが関係しているに違いない。

そして、日本人の衛生感覚の強さが表れてくるのは、「内」で履物を脱ぐことが、単に「外」を汚いという感覚を超えたものであると大貫（1985）は指摘する。それは、靴を脱いだ後でさえも足と床について特別な注意を払うからである<sup>266</sup>。その証拠に、アメリカ人がよく壁紙を張り替えたり塗り替えたりして壁の清浄に気を払うのに対して、（伝統的日本人家屋の構造上壁は頻りに清浄されるものではないという理由を提示しながらも）日本人は畳と廊下が毎日

の掃除の重要な個所とされ、往々にして壁の清掃には無頓着であるからである<sup>267</sup>。

また、日本人の床に対する清浄感覚はたたみや廊下が目に見えて汚いかどうかの視点ではなくむしろ文化的なもので、自己もしくは家が「内」で自己の家の外を「外」とし、履物、足、床などに代表される汚い場所を「下」とした空間分類が存在する<sup>268</sup>。そして、「外」のものに触れる「手」、地面と接触する「足」、外気の身体内部への通り道にあたる「喉」の洗浄に重点とおくところに日本的な衛生感覚の特徴があるという<sup>269</sup>。このように、日ごろ意識することなく習慣で行っていることが、文化的なものであることが再認識させられる。

大貫（1985）の自国の衛生文化に関する鋭い考察は、日本のなかのあらゆる行為に対して見逃されることはなく、さらには、車掌やバス、タクシー運転手やドアマンの着用している白い手袋は、皆が触れる「汚い」部分に触れないうえ、白手袋の着用が清潔さの象徴の証とされていると鋭い着眼力を発揮する<sup>270</sup>。その他にも、日本人にとって「下」に属する下半身部は最も不潔とされ、その洗浄に関してより慎重であることは、多くの日本人が洗濯の際には下着は他の衣類とは別にしていたことに象徴されている<sup>271</sup>。このような日本人の衛生論理からすると、トイレと風呂場が一緒になった西洋式の風呂は矛盾の極みであったのだ<sup>272</sup>。

車掌やバス、タクシー運転手の白い手袋は今日で見ることは少なくなり、また、下着を別にして洗濯することを行っている家庭もほとんどない。二、三十年という短期間に日本人の衛生習慣に変化が起きているといえる。

以上のように日本人の徹底した衛生観念の例は、枚挙に暇がない。日常生活のすべてがこの高い衛生感覚に基づいたものであることを大貫（1985）は具に示している。

そして、この日本人の徹底した衛生観念の強さあるいは高さの要因を、梅原猛<sup>273</sup>（1967）が「浄という価値」（桑原武夫編『文学理論の研究』1967）で述べていることに照らし合わせて論じる<sup>274</sup>。

梅原（1967）は、『古事記』の中での「浄・不浄」の対立の形成や、神前に奏上する詞である『祝詞』<sup>275</sup>の中で「不浄」が最大の罪とされていることが古代日本人の世界観やエートス（ethos）<sup>276</sup>の最も基本的な原理の一つとしてみることができるということが<sup>277</sup>、現代の日本人の衛生観や病原論、治癒力の観念に類似していると大貫（1985）は考察する<sup>278</sup>。すなわち、古代の不浄観の「うじのわいた身体」や「殺された死体」などが、現代の人混みを不浄とするところに、相通じるものがあり、『古事記』・『祝詞』ともに不浄は「地下界」に位置づけられているところが、現代の「下」を「不浄」とするところで一致し、古代において自然の諸力が祓い清めの役割を担ったことが、現代も塩で死の穢れを払拭したり、手洗いは水の力ということで、同様の観念がみられるという解釈である<sup>279</sup>。

さらに、日本社会では「清く、正しい人」を目指す道徳的価値としての清浄さが重要とされていることは、多くの学者が言及しており、身体および一般的健康についての清潔さにも緊密な関係にあると大貫（1985）は強調する<sup>280</sup>。

すなわち、「清浄」＝善、「不浄」＝悪となるのであるが、このような結びつきは倫理に関わることとなり、浄・不浄の観念が世界観を秩序づける主要な原理となり、また日本人のエートスの重要な位置をしめる次元に踏みこむことになる。ここに日本人の高い衛生観の源があるとするに、異を唱える隙を与えない。日本人の徹底した洗浄行動は、本人の無意識のうちに道徳的な善を追究する姿勢が基に存在するとみると、日本人の高度な衛生感覚すべてに納得がいく。

確かに、清掃行動をする人をみると、何かしら尊い行動のように見え、自身が率先して行う際には、何かしらの満足感や優越感すら感じていることに気づくのである。

日本の学校教育のなかで、清掃は大切な学習の一つとして位置づけられており、片づけること、清潔にすることが常識であることを覚えるのである。そこに道徳的な善の追究があるからこそ、学校教育のなかに組み込まれている可能性は高い。日本以外で、清掃行動が学習の一つである国はほとんどない。

日本人自身がこの文化的背景に基づいた道徳観に気づかずに、ただ善き事として行う清掃行動は、その高度な程度、言い換えれば、執拗な程度に見えることが、同じアジアの文化圏内の隣国韓国から以下のように指摘されているのである<sup>281</sup>。

日本人はもっとも清潔な民族として知られています。湿気がフランスの二倍といわれる国ですから、風呂好きはさておいても、武士が刀をかたときも離さなかったように、日本人はまた箒をかたときも離さなかったのです。掃き、払い、洗い、磨く日本の生活はごみとの戦いだったのです。日本人はムダなものと共生することができない体質なので、必要でないもの、よけいなものには我慢できなくなり、それらを見るとすぐに払いのけたり、切り捨てるのです。

(李御寧『「縮み」志向の日本人』)

この引用箇所は、「‘自然’にあらわれた‘縮み’文化」として、日本人が作り出す自然として庭は、きれいに洗われきちんと整理された自然風景であり、それはほんとうの自然でないことの説明のなかで述べられている。

さらに李は、ほんとうの自然というのは、すこしずつみなムダなものであり、汚れているので、韓国人はゴミに対してさほど神経質にならず、あまり汚れを落としすぎるとそれは不自然なものになるということを、きれい好きな嫁に対して「そんなにすると福がつかないようになるし、子供も授からないようになる。この世のものにはゴミと汚れがつきもので、すこしはおおまかに暮らすように」と年老いた姑が諭すことを例に説明している<sup>282</sup>。

しかし、この潔癖というまでの程度に研ぎ澄まされた日本人の清掃行動は、その背景にある道徳的な価値の理想の程度にまで達した時に、その成果の大きさは感動に値するほどである。

例えば、車用品販売会社イエローハットの創業者鏡山秀三郎<sup>283</sup>は、社長当時自らが社内掃除のみならずトイレ掃除を行っていた。それは決して社員に強制することなく本人のみで行っていたのだが、やがて社員にも浸透し、ひいては行き届いた仕事に繋がって定評となり、会社としての利益にも反映したことがあげられる。

その他の例として、職場環境の維持改善運動の「5 S」がある。それは、「Seiri（整理）、Seiton（整頓）、Seisou（清掃）、Seiketsu（清潔）、Shitsuke（躰）」という、各言葉をローマ字表記にした際の頭文字をとって「5 S」と呼んでいるのである。これは、職場環境の美化のみならず、従業員のモラルの向上効果をもたらすものとされ、製造・サービス業界では常識となっている<sup>284</sup>。

以上のようにみていくと、日本人の高度な衛生観は道徳的価値観の基盤を指摘する大貫（1985）の卓越な考察に同調せざるを得ず、それはまさに、本研究で日本人が「あし」にもつ否定的な概念についての考察にあたって、最も納得のいく論であった。そして、日本人の伝統的な衛生観と「あし」が密接に関連していることを確信した。

## 第二節 「踏む」という行為

では次に、「あし」基本的な行為である「踏む」について考察する。

本章冒頭で、日本人の「あし」の概念の典型例として提示した「三尺去って師の影を踏まず」、「布団の上を踏まない」、「人の枕元を歩くべきでない」

など、否定的な意味合いが窺える「あし」の行為は、「踏む」という動作であるからだ。

「踏む」という動作あるいは行為は、何故に忌み嫌われるのであろうか。全体重を支えている二足の「あし」で「踏む」ということは、力学的にみても大きな力であるので、強い力を必要とする際には、これほど重宝することはない。ただ、足踏みするだけでよく、さらなる労苦ほとんどいらぬ。

ただそれがゆえに、大人であれば50kg以上の方が布団を「あし」で踏むということは、布団の柔らかさが簡単に潰され、その踏む回数が増えれば布団の傷みもはやいという危惧からであろうか。また、人の枕元を歩く際に、もしも「あし」を踏み間違えると、顔を踏むことにもなりかねないのでこのような安全を目的として礼儀が生まれることもわかりやすい。

また、たとえ人の影であっても、そこにその人の生身の「からだ」の一部としてとらえ方をする文化的な思考から、影であっても踏むことは失礼ということも理解できなくはない。

以上のように、「踏む」ことの物理的な効果の危険回避を込めて、否定的な意味として用いられるようになった可能性も否定できないが、汚い「あし」が行う行為はどうあっても否定的とらえるということもある。

そこで、「踏む」という行為には元来どのような意味合いがあったの、その漢字「踏」を手がかりに調べてみた。「踏」という漢字は、「足」を表わす部首と音を表わす「沓（くつ）」の旁から成りたっている。「沓」は、祝祷の器である臼（えつ）の上に水をそそぎ、その祝祷を汚し無効にするという意味であり、踏む行為は呪的な意味との関連が始まりであった。

古代中国が由来とされる「踏青」<sup>285</sup>や「踏歌」<sup>286</sup>などの民俗は、踏む行為に呪的な意味合いがあって生まれたものであることも、「踏む」ことに呪的な効果を狙った証でもある<sup>287</sup>。その他にも、陰陽道の呪法の一つである「反問（へんばい）」<sup>288</sup>や日本の鬼追いの行事である「追儼（ついな）」の由

来である「方相氏（ほうそうし）」<sup>289</sup>なども乱舞的足踏みに呪術的效果を目的とした事例である。また、相撲で行われる「四股を踏む」の「四股」も「踏む」という呪術的な要素が起源で、もとは「醜（しこ）」の意で地霊を鎮撫し喚起して悪霊を祓ったり、作物の豊作を祈願したものといわれている<sup>290</sup>。さらには、「地団駄をふむ」や「駄駄を捏ねる」の「だ（ん）だ」も、荒れすさぶる悪霊を鎮めおさえたり、憑依する巫女の身体に靈魂を鎮めるために行われた足踏みであった<sup>291</sup>。以上のように、踏む行為は元来呪的な行為であった。

この点に関して、演劇評論家であった武智鉄二<sup>292</sup>（1989）は、古代より農耕生産労働を基盤とする日本民族において、アゼ踏みやムギ踏みなどから、踏み固めることで粃をよみがえらせて稲にする生産性と関連していることを観察するなかで、そこに死者の魂の復活を粃の発芽に連想するに至り、「踏む」ことが生産性を高めることと理解していたと述べている<sup>293</sup>。

「あし」の行為を否定的にとらえながらも、「踏む」ことが生産性につながっているという、肯定的なとらえ方をする一面を日本人はもっていたのである。

同じような例は、他にもある。それは、伝承呪術として家の戸口またはすぐ近くに出産時のエナ（胎盤）を埋めるという俗信で、それは埋めたエナの箇所を通る人が「踏む」ことによってその子どもが丈夫に育つと信じた。また、「うぶ毛剃り」という風習は、生まれて一週間もたたない赤児のうぶ毛を剃って道の四辻に捨て、多くの人々の足で踏まれて新しいよい毛が生えてくると信じた。

このように、「踏む」ことによって踏まれたものが生々発展の活力を得ると信じたのである<sup>294</sup>。「踏む」という行為のもつ元来の意味合いから、「あし」には肯定的な意味合いも存在しているのである。

### 第三節 汚い「あし」と食べ物

第一節において「あし」の否定的な意味合いについて考察し、第二節では肯定的な意味合いとして「踏む」を考察した。すなわち、「あし」の概念には肯定的と否定的の双方の意味合いが存在することが明らかになった。

本節においては、前節と同様に「あし」が否定的にはとらえられていない事例をいくつかとりあげて考察する。

それは、日本人が「汚い」という「あし」の概念を有し、また、高度な衛生感覚を持ちながら、その汚い「あし」と特に清潔であるべき食べ物を同等に扱う事例がいくつも存在するのである。日本人の高度な衛生感からすれば、理解しがたい。では、その例をいくつかここで概観する。

#### (1) 餅踏み

「餅踏み」とは、江戸期ごろから始まったといわれる一歳の誕生を祝う儀式である（写真 5-1）<sup>295</sup>。日本各地で行われているが特に九州地方に多い<sup>296</sup>。その九州各地の「餅踏み」にはそれぞれの地域色があり、餅の形や並べ方、踏み方、呼び名も「一升餅」・「誕生餅」・「立ち餅」など違いはあるが、餅を「あし」で踏むことに変わりはない<sup>297</sup>。



(写真 5-1 : 福岡県の餅踏みの様子の一例)

いぬいの隅に蔵建てて  
宝の山に帆を上げて  
  
お前百まで わしゃ九十九まで  
ともに白髪が生えるまで  
  
鶴は千年 亀は万年  
この子（子どもの名を呼ぶことも）百まで  
  
めでたい めでたい  
  
(これを三度繰り返す)

(祝い唄の歌詞)

福岡県福岡市内で行われている「餅踏み」を例にその詳細を紹介する。別名「誕生餅」と言われ、紅白各々一升分の鏡餅をやや平らにして並べる。そして、祝われる子供に草鞋を履かせて、周囲の者たちが祝い歌（写真 5-1 の右側）で囃しながら子供に餅を踏ませる。一升分の餅には、「一生」という言葉にかけた「一生、丸く長生きできるように」とか「一生、食べ物にこまらないように」などの願いが込められている。餅を踏ませた後は「物トラセ」という儀式で、子どもの前にそろばんや筆記道具、お金などを置き、その子が何を取り上げるかによって将来を占うのである。

「餅踏み」の真意は、「大地」にみたてた餅を踏むことで、「大地にしっかり足をつけ歩いていけるように」、また餅についた足形を小判の形にみたてて「一生お金に困らないように」などの願いが込められているという。そして、子供が踏んだ餅は、切り分けて親戚や近所に配ることも福運の分配という意味がある。

## （２） 「足踏み」（製法）

「足踏み」製法とは、素麺・饅頭・麩などの製造過程で、小麦粉でつくられた生地の弾力性（コシ）を出すために行われる一製造工程の名である。その名の通り「あし」で踏んで行われものであるが、うどんの製造での周知度は高い。

当初から比較的近代までは、「あし」（足）で踏む際に生地の上に莫塵をひいて直接足で踏むことはなかったようであるが、現在は生地をビニールで包み、足もビニールで覆って行うところもあるが、機械化や衛生面の関係で「足踏み」を行うところは少なくなっている。明らかに近代工業化に伴って、「足踏み」文化も消滅しつつあるといえよう。

図 5-1 は『本朝食鑑』（1695 頃）にある麩の作り手である麩師の図である<sup>298</sup>。その説明には「塩少々を加え、揉み洗いは、手でもんだり、脚で踏ん

だり、杵で搗いたりする」と書かれており、図はまさに麩の生地を足で踏んでコシを出している一工程の図である。

樽のなかでの「足踏み」の様子は全く想像の域をでないのだが、麩師の裸同様の姿からは、裸足で麩の生地を踏んでいることに間違いはないだろう。

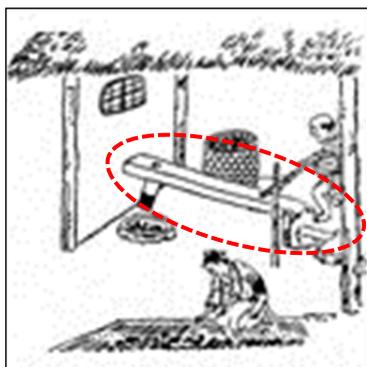


(図 5-1: 麩師の「足踏み」製法の様子)

### (3) 米踏み

「米踏み」とは、長く伸びた柄を足でふみながら米を搗く道具のことである(図 5-2 ; 丸で囲んだ部分が「米踏み」)<sup>299</sup>。別名「唐臼」、「踏み臼」という。

直に米を踏むものではないが、名前からだけでも、日本人にとって特別な食べ物である米を踏むというところに違和感をもつのである。別名である「唐臼」が示すように中国由来のものである。



(図 5-2 : 米踏みの使用風景図)

(4) その他 Shoe Kitchen (靴修理店)

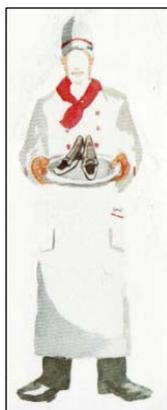
上記の三つの事例が古くから存在しているものである。そこで最近の事例をその他として一つ紹介する。

それは、‘Shoe Kitchen’ という名の、都市部を中心に全国に店舗をもつ靴修理店である。洒落たレストランの厨房 (kitchen) そのものの構えの一角には、白い装いのレストランの料理人風の従業員たちが、顧客の持ってきた靴の修理に応ずる (写真 5-2) <sup>300</sup>。その名の示すように、「靴を料理する」という発想である。



(写真 5-2 : Shoe Kitchen 店内)

修理された靴はまるでレストランのメニューの一品のようにトレーにのせられてでてくるという発想である (図 5-3) <sup>301</sup>。



(図 5-3 : Shoe Kitchen の従業員の図)

ドイツの整形外科の知識にもとづいた靴の制作・調整技術を駆使し、「毎日の歩行を支える靴は、食材と同じように、健康にとって大切なものです」、  
「あなたの靴を料理します。シェフの腕をお試してください」という宣伝文句である。

傷んだ靴を、調理場のいでたちの場所で修理するという考えをつくりあげた日本企業の独自性があるのかもしれないが、傷んで汚れた靴を食べ物にみたくて料理するという発想に大きな違和感を抱いた昨今の事例である。

#### (5) まとめ

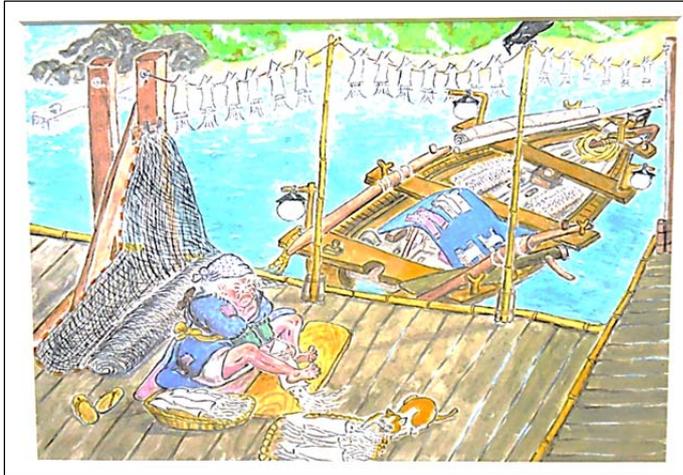
以上が、日本人にとって「汚い」という概念をもつ「あし」と、特に清潔である食べ物を一緒にした事例を江戸期頃から現代に至るなかで4つをとりあげて提示したが、このような例は、枚挙にいとまがない。もう少し、ここでその例をあげると、まず「寿司下駄」がある。

「寿司下駄」とは、握り寿司の飾り皿のことで、その形はまさに下駄のように二枚の歯のような台がついた木製の皿である。

祝いの典型膳として出される寿司が、汚い「あし」を置く下駄の板の上に盛られるのである。寿司下駄に「下駄」を想像して食べる人はほとんどいないと思われるが、その名を再考すると食指が動かなくなるのだろうか。

また、「具足煮」もある。鎧兜の別名である「具足」という言葉を使った「具足煮」は、海老や蟹殻を鎧に見たてて名付けたもので、その調理法は殻をつけたまま輪切りにして煮たものである。「具足」という「足」を使った語彙と料理法の「煮る」の一字である「煮」を一緒にすると、「足」を煮ているようにとても食する気にならないのだろうか。

そして、究極ともいえる事例を見つけた。それは、今年初めに福岡市で催された絵画コンテストで入選した「烏賊干し」である（写真 5-3）<sup>302</sup>。



（写真 5-3：「烏賊干し」の絵）

「子供のころの風景」がテーマの絵画コンテストで、絵の説明書きに「昭和 20 年代の頃こと。ばあちゃんたちは、烏賊を干して、踵で伸ばしていた。でも、うまかった」とある。この事例に関しては特に説明はいらないほど、汚い「あし」と食べ物が融合したもので、描いた本人が「でも、うまかった」と、その「でも」が「汚い‘あし’の踵で踏んで伸ばされたものだが」と代弁している。

日本人は、「あし」が汚いと物理的にも概念的にも理解しながら、その「あし」が直接接触したものを美味しく食する感覚があるのである。一方で高度な衛生感覚を持ちながらで、全く独特な感覚を有しているのである。

汚い「あし」と清潔であるべき食べ物、あるいは清潔であるべき「もの」が融合の例はまだまだ存在するに違いない。しかしここで本題に戻り、上記にあげた 4 つの事例を個々に検証する。

「餅踏み」については、日本人の「あし」の否定的な概念からみて最も異質さを感じる事例であった。というのは、日本人にとって食べ物のなかでも最も重要ともいえる「米」からつくる餅は、その丸い形や貴重さなどからも祝いや神事のために使われる神聖ともいえる食べ物なのである。

米を踏むと目がつぶれるとか、足が頭について離れないといった俗言がありながら、その神聖な餅を「あし」で踏むことが祝いの儀式として行なわれるのは、あまりに矛盾している。

前節で「エナ」や「産毛剃り」について紹介した長野県上田民俗研究会長であった安間清（1971）は、「聖なる食べ物である餅をふませることによって、餅に籠る靈力を子供の体内に宿らせようとする願いであったに違いない。餅を踏んで子供に生々の活力が与えられると信じたものだろう」と述べ、「あし」のもつ不浄観については何も言及していない。

この最も違和感をもつ「餅踏み」儀式の解釈はいかにあるべきなのだろうか。「あし」の語源の考察から、「あし」が汚いという一般認識が江戸期から存在していたのが明らかであり、「餅踏み」儀式も江戸期から行われるようになっているので同時期に相反する概念が共存していることになる。日本人は、一方では「汚い」という否定的な意識をもち、一方では、その意識が存在してないかのような「あし」に関する事象をもつ。

「餅踏み」に関して考えられる要因としては、餅を踏む「あし」が歩くか歩かないかの満一歳の子供の「あし」だからということである。その「あし」はまだほとんど地を踏んでいなく、言うなれば汚れていない「あし」なのである。それがゆえに、神聖な餅を踏むことに抵抗はなく、それよりも安間（1971）のいう「餅に籠る靈力を子供の体内に宿らせようとする願い」が強いのであろう。

「足踏み」製法についても、その成立時期が「餅踏み」と同じころの江戸期であることが、初出の文献の時期から推定できるので、やはり日本人が「あし」に汚いという意識を持っていた時期に共存していたことになる。ただ、「餅踏み」儀式と大きく違うことは、踏む「あし」が大人の「あし」であり、すでに十分汚いといえる「あし」なのである。

そこで考えられる要因としては、前章において日本人の独特な身体認識に関する一考察としてあげた、日本人の多元的な精神性である。相反する意味合いも、日本人の多元的な精神性でどちらも共有できるという考えである。

「Shoe Kitchen」に関しては、現代の事例ということで、日本人の概念の変容の可能性があげられる。前章の「俗語」からの考察で、時代とともに日本人の「あし」に関する概念が変容していることが明らかになったように、「汚い」という否定的な意味合いも時代とともに薄れてきている可能性もある。

以上が、汚い「あし」と食べ物を一緒にした個々の事象の考察である。

#### 第四節 幽霊の「あし」

私たち日本人にとって、「幽霊にはあしがない」という一般認識があるが、何故に幽霊の「あし」を消失させたのであろうか。幽霊とは、人間の姿をした死者の霊とされているので、人体としての「あし」は本来ならあるはずである<sup>303</sup>。幽霊という超越的な存在の「あし」に関するこの特異な概念を、日本の「あし文化」の一つとして本章において考察する。その考察方法として、第一節において、日本の幽霊の「あし」の消失に関する先行研究を概観し、第二節において「あし」を文化の表彰体として追究している本研究からの一説を試みる。

##### (1) 幽霊の「あし」の消失に関する諸説

江戸時代になって、幽霊談の絵画的表現なされるようになった頃から「あしのない」幽霊画が描かれるようになった。しかし、この頃のすべての幽霊画に「あし」がないということではないが、その要因としては、①歌舞伎に登場する幽霊が、漏斗（じょうご）とよばれる先が細くなっている衣装で「あし」を

隠していたからと、②円山応挙<sup>304</sup>（1733-1795）の幽霊画が有名になったからの二つが俗説であった<sup>305</sup>。

そういった風潮のなかで、江戸期の国学者の大石千引（1770 - 1834）<sup>306</sup>は、幽霊に「あし」がない理由を、中国明時代の『五雜俎』（1619年）<sup>307</sup>に、術を使って腰から下がらない歌妓を呼び出す話や、『史記』巻43「趙世家」に、帯から下がらない死者について言及する話を例に<sup>308</sup>、天上界に住む天人あるいは靈的存在を超自然的なものを意味する記号として「あしがない」ということが機能していたのではないかと指摘した<sup>309</sup>。

現代になってからは、近世文学・芸能史学が専門の諏訪春雄<sup>310</sup>（1988）が、②以前の古浄瑠璃『花山院きさき諍』<sup>311</sup>（1673年）の挿絵に、すでに「あし」のない幽霊が描かれており、その背景には「幽霊にはあしがない」という一般認識が流布していたので<sup>312</sup>、舞台や絵画によって表現されたのではないかと指摘している<sup>313</sup>。

そしてさらに、挿絵としての「幽霊のあし」の有無は、正本が歌舞伎か人形浄瑠璃かによって決まるのは<sup>314</sup>、人間が上演する歌舞伎では衣類で「あし」を隠すことまでしかできないために挿絵には「あし」があり、人形芝居の人形には原則として「あし」がなかったのも、浄瑠璃本の挿絵の幽霊には「あし」がないと説明している。

また、日本の幽霊が「あし」を失ったことの根源的な要因としては、絵画における雲の多様な役割をあげている<sup>315</sup>。その雲の役割とは、①死者の乗り物、②神・仏・鬼など超越存在の乗り物、③不可思議な力の表現、④空間処理の技法<sup>316</sup>の四つあり、①と②は日本人が新しく強調し増幅した観念で<sup>317</sup>、③と④は中国の雲気が万物の創出する根源であることを論拠としたものである。そして、③は神仙・靈獣・瑞鳥などの常ならぬ存在の靈力や不可思議な力の表現とされ、④は神仙の遊ぶ山岳や森林を雲気で表現する技法として用いられるものであるという。

このように、中国の雲気の表現を継承して日本絵画の雲に新たな工夫が加えられ<sup>318</sup>、①と②のような超越存在は移動に際して雲を用い「あし」を使わないという観念が生まれた。その際、雲上で「あし」を組んだり蓮華座に坐ったりというようにも描かれ、自身の「あし」を不活動にするようになったのではないかと指摘している。

もう一つの日本の幽霊の「あし」の消失に関する説は、日本とアメリカの現代美術史及び美術批評史を専門とする加治屋健司<sup>319</sup>（2011）が絵画的技法からの推論している<sup>320</sup>。加治屋（2011）は、話の挿絵が必ずしも本文と対応するものではないのだが、先述の『花山院きさき諍』の本文には異様な姿に変貌していく幽霊の描写の異様さの表現自体に、「あしがない」という記述はなく、また同時期に刊行された『絵入源氏物語』の「夕顔」（1654年）のなかの、人間の姿をした物の怪についても「あしがない」という表現はないが腰から下が描かれていない（図 5-6）<sup>321</sup>。これらのことから、幽霊の出没自由な特徴を絵画の技法的理由で「あし」を失わせることの必要性が生まれ、もし「幽霊にあしがない」という社会通念が存在していなかったら、出没自由な幽霊を表現するためには、体の一部を不在にして時間的な継起を空間的な秩序に変換する論理が当時の絵師たちの約束事とされたのではないかと考察している。

以上のように、日本の幽霊に「あしがない」ということには関して、二つの俗説と三つの説が存在しているのである。

## （2）幽霊の「あし」についての本研究からの一考察

（1）で概観した日本の幽霊画の「あし」の消失については、中国や仏教思想が当時の庶民の間に一般認識化されていた可能性の有無によって論が展開されている。その可能性が有りとした諏訪（1988）もその証明の難しさを述べているが<sup>322</sup>、そのような事実を信じる観念が近世の人の中に広まっていなければ、亡者だけが「あし」を失うことはないと指摘している。本研究からの幽

霊の「あし」の消失に関する考察においても、中国や仏教思想が庶民に広まっていたかどうかの分析には着手せずに、その他の観点から考察する。それは、本章第一節及び二節の考察してきたことを踏まえて三つの視点から推論する。

その第一は、日本人の衛生感覚からである。日本人の「はきもの」の着脱は外の汚れを内に入れないために行うものであるが、死に至る時にまでその慣習が適応されている。それは、身投げの際には「はきもの」を脱いでいたことであるが、死後の世界にも土足で入らないという意識の表れなのである。とすれが、「あし」がなければ汚い「あし」に気を煩わすこともないので、幽霊の「あし」を消滅させた可能性を指摘する。また、死後の世界では「はきもの」を履く必要もないことも「あし」を消失させることの理に適うのである。

第二の要因としては、本章第二節で考察した「踏む」ということの本義からである。「踏む」という行為には、地霊の鎮魂や生命のよみがえりを招く呪術的効力が存在する。そのような効力をもつ「あし」は、死後の世界にとっては似つかわしくなくあるいは好まざる事態を招くものなので、幽霊となったものの「あし」を消失させた可能性を指摘する。

そして第三の要因は、視覚的効果からの考察である。「あし」がない立位の人体というのは、浮いているように見える。そしてさらには、「あし」がないが故にその基本的な機能である「歩く」や「走る」という歩容能力を失ったことを意味するのであるが、それが却って人体としては限りのある歩容能力が無制限になった印象を与える。すなわち、「あし」がない立位の人体図は、浮遊しているようにみせる上に移動範囲が無制限になったということになり、神出鬼没（出没自由）な幽霊の特徴を十分に表現することができるのである。

以上の、①日本人の衛生感覚、②「踏む」行為の本義、③視覚的効果の三つの要因から、幽霊には「あし」がないという認識が生まれたのではないかとい

う一考察を、「からだ」を文化の表彰体として論じている本研究から掲示しておきたい。

## 第五節 他文化圏の「あし」の概念

高度な衛生感覚を持つ日本人が、衛生的に汚れることが多い「あし」に否定的な概念をもつことは、無理からぬことである。その高度な衛生感覚というのは、日本人の道徳的感覚と結びついている。その感覚には「不浄＝悪」・「浄＝善」という心理的投影があり、「善」を目指すがゆえに「不浄」を忌み嫌い、それを徹底的に洗浄すれば、「悪」を削除し得るという心理が働いている。

この日本人の「あし」に関する概念の独自性をより明確にするには、他文化圏との比較が必須である。しかし、本研究の現段階ではまず「あし文化」を証明するそれぞれの事象の蒐集およびそれらの基礎的考察として終え、他文化との比較研究は次段階での課題とした。

ところが近年、西欧人の「あし」に関する文化的事象をまとめた書籍が出版された<sup>323</sup>。健康・医学・栄養分野に多くの著書を出版しているキャロル・リンツラー (Rinzler, Carol) が、「あし」に特化して研究を推進したものである。本論の最後になってしまうが、彼女の著書を日本人の「あし」の概念の独自性の理解を促す資料として追記したい。

その内容は、まず著書の題名『LEONARDO'S FOOT: How 10 toes, 52 bones, and 66 muscles SHAPED THE HUMAN WORLD』でもあるレオナルド・ダビンチ (1452-1519) の代表作、'The Vitruvian Man' (標準的な成人男性の理想的人体構成図)<sup>324</sup> をとりあげ、詳細に分析された人体の理想的構成率 (プロポーション) のなかの 'foot'<sup>325</sup> の長さは、身長  $\frac{1}{6}$  が理想とされていることを示す。ダビンチの分析なので、西欧人の

人体における統計からの値と推測するが、人種的な違いはないのかは不明である。

そして、‘foot’の形態的障害である「クラブフット：clubfoot（湾曲足）」や「フラットフット；flatfoot（偏平足）」が西洋社会の歴史では、差別的な扱いを受けてきたとする。中世のヨーロッパでは、陽気で愉快的ギリシャの神々たちは魔女の保護者（パトロン）と見做され、特に山羊の下半身と頭には角をもつギリシャ神話の牧神パン（Pan）の「蹄の足」は「悪魔の足」とみなされた。そこで、人間がフラットフットであることさえも牧神パンの弟子の証しとされ、魔女狩りの対象となった。「あし」を覆っている人間は「蹄を隠している」と建議をかけられ、人々は「あし」を覆い隠すものである「靴」や、靴職人までに対しても懐疑的になった。

日本では、足（脚）の形態的障害が欧米人に比べてどれくらいの割合があるのかについては、資料があまりにも不足している。日本の障害者に対する態度の歴史的傾向からすると、障害が隠ぺいされ、公の場で目にすることが少なかったため、主観的な障害者の割合を憶測するわけにもいかない。しかし偏平足については、遺伝的要因以外での発症は少なかったと考えられる。その理由は、日本の履物の構造上、足ゆびが自由に動かせる環境でかつ鼻緒をつかんでの足運びなので、土踏まずのアーチが落ちていく状況になることは少ないからだ。

それに対して靴社会に馴染む欧米人は、偏平足の発症率は高いと推測されるが、「あし」に形態的障害が差別の対象とされたことは、時代背景である中世期のヨーロッパにおける禁欲主義的な社会風潮に原因があると思われる。

極端な禁欲主義が横行する中で、陽気で愉快さをもつ牧神パンが非難の対象となったことは、それなりに理解できたとしても、牧神パンの有するすべてが否定され、蹄と全く形状がちがう偏平足や、靴職人までも差別視するというのは、一種の集団的な極限状態が働いていたのかもしれない。

しかし、日本人の高度な衛生感覚、言い換えれば異常なまでの潔癖症は、感性的欲望を悪の源泉と考え、人間的情欲を徹底的に抑圧しようとした中世ヨーロッパの禁欲主義に伍するものがある。

日本人の「あし」に関する差別的用語としては、「ちんば」や「びっこ」があるがヨーロッパの中世期のように善悪思想との結びつきは考えられず、またそれほど強い差別感の事例もみあたらない。とはいえ、「ちんば」や「びっこ」の初出の出典から、江戸期ころからその差別用語の一般化が考えられる。また、蹄の足に関して、江戸期の被階級差別であった穢多・非人が、豚や牛などの蹄の動物の処理にあたっていたことから、四足の動物を意味して「四つ指」が被差別民を意味する隠語であったことと、類似している。

中世の西欧世界で「あし」の奇形が差別視される一方、土ふまずの高いハイアーチの「あし」は「美」として崇められた。そのような「あし」は「バナナフット (banana foot)」と呼ばれ、絵画や彫刻のなかにも描かれるだけでなく、バレリーナたちにとっても、舞踏中に優美な線がだせる理想的な足とされた。

日本では美しい「あし」の形が特定されないのは、日本文化のなかでは肌を露出しないのが基本だったので、素足を見る機会が少なかったためかもしれない。たとえ、足先であっても、白い肌が見えることは性的刺激を与えると考えられていたのである。あえて比較対象としてあげるならば、「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」といった着物を着た女性美の理想を体の動きで示したものくらいであろう。

そして、リンツアーは履物に関しての文化性として、古代文明の時代には室内で履物を履くことはほとんどなく、どの宗教も（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教）も聖域に入る際は、「はだし」となることを掟とした。

古代メソポタミアでは上位の者の「あし」に接吻をすることは「服従」を意味し、古代エジプトでは、勝利の賛歌に「敵をサンダルの下に轢いた」という文句が含まれた。聖書時代の兵士たちは先代に倣って、敵の肖像をサンダルの底に描いて、歩く度に踏むようにしていた。湾岸戦争でサッダーム・フセイン元大統領が失脚した時、その銅像が倒され、多くの庶民がその顔を踏みにじった行為にも、長い歴史的背景があったわけだ。

また、敗者は勝者の足台とされたり、地面に土下座して勝者の「あし」の埃をなめてきれいにする風習もあつたりし、それが後に「敵を踏んでからその足を洗う」という儀式へと発展していった。これは、まさに江戸期におけるキリシタン迫害のための「絵踏」を想起させるが、古代エジプトにおける風習と、何らかの繋がりがあるのかとさえ思えてくる。

また、旧約聖書の時代には訪問者の足を洗うことが敬意を象徴とされたが、これは聖書の舞台となったほとんどの地域が砂漠地帯であったことと関係している。それは砂にまみれた「あし」で室内を汚さないためであり、「あし」を洗うことは重要な礼儀であったことに由来する。

イエス・キリストが弟子たちの「あし」を洗ったのは、イエスと信徒との間に隔たりなく、「平等」であるということの意味した。そしてその後、他人の「あし」を洗足することが、キリスト教の博愛主義的行動の象徴として継承されていった。この点は、日本人の「あし」の概念が神道の「浄・不浄」観の反映からきているという本研究の一考察と、対比すべきところである。キリスト教における洗足は、汚いものの洗浄を身分の分け目なく施すという平等感に重視を置いているのに対して、洗浄に善追究を投影する日本文化である。同じ洗浄化行為にもその目的の違いがみえてくる。

そして、キリスト教文化と日本文化における「あし」の概念が大きく異なる点は、聖書のなかでは「あし」は性の象徴とされていることである。それは、「あし」が男性の性器の象徴とされ、当時の履物であるサンダルの着脱や「あ

し」を洗うこと、また裸足になることは、性的なニュアンスが含まれていた<sup>326</sup>。

古代文明では、聖域において履物を脱ぎ、裸足でいることが神への礼儀とされたのは、当時の履物が高位の象徴とされていたので、いかなる人間よりも高い位置にある神への表敬を意味した。

そして時代が下って紀元の聖書の時代になると、履物を脱ぐことが性的交渉を意味するようになるのは、その頃には履物が一般的に浸透し、一日中履物を着用して寝床に入る時によく履物を脱ぐような慣習となったこと関係していると思われる。しかし、足に性的な要素を感じるのは、どうやら古代人に限られたことではないらしい。最近、インターネットを媒介して行われた調査では、最も性欲を掻き立てられるものは何かという質問に、「foot（足）」と「toe（つま先）」が他を大きく抜いての一位だった<sup>327</sup>。そして、その回答者の大半が男性だった。女性の足に、性的刺激を促すものがあるのだろうか。

不思議なことに、この回答は、近年の脳の体性感覚野の研究結果とも合致している。というのは、男性器を制御する脳の部位が toe（つま先）の感覚部位の隣に位置していることや<sup>328</sup>、また foot（足）の汗には異性を惹きつける性ホルモンの分泌を促すフェロモン（pheromones）が含まれていることが明らかになったからである。

足と性の結びつきは、生理学的なものであるといえるのだが、日本文化では西欧のような「あし」の性的概念がほとんど見当たらない。とはいえ、谷崎純一郎の『痴癪老人日記』（1962）は、嫁の「あし」に性的刺激を感じる舅の言動が書かれており、その他にもいくつかの日本の小説でもフェチシズム（呪物崇拜）として「あし」が対象となっているものもある<sup>329</sup>。

日本文化においては、「あし」に性的意味合いが少ないのは、日本の履物では足（foot）が常にむき出しになっていることや、履物の着脱が日常茶飯事であることによる馴れが性的刺激を鈍化させているせいかもしれない。

以上のように、リンツアーの著書を通じて、「あし」の概念に関する比較研究材料を多く見出すことができたが、最近登場した‘Shoe Kitchen’という現象に象徴されるような、日本文化における「あし」の概念の変容についても、さらに追究していくことが新たな課題となった。

## 第六節 考察

本章において、日本人の「あし」の概念を考察するにあたり、①日本人の衛生感覚、②「踏む」という行為の原義、③汚いとされている「あし」と清潔であるべき食べ物との同等な扱い、④幽霊の「あし」、⑤他文化圏（欧米社会）における「あし」の概念の五つの観点から行った。

その結果、①では大貫（1985）の卓越な考察である日本人の病気観に関する考察に追随し、日本人の道德観と結びついた衛生観では、汚い＝「悪」という論理が衛生的に汚くなることの多い「あし」にも適用され、「あし」に否定的な概念が付与されたという論考となった。しかし、この衛生的に汚いということ、日本の広義の意味における信仰体系のなかの「浄・不浄」観の不浄からの詳細な考察も必要であった。それは、日本における「浄・不浄」観についての論考は多くの研究がなされているが、本研究としてはその真髓からの考察は手に余るものがあり、不浄概念からの考察には及ばなかった。しかし、今後の課題として取り組むべき点であるので、その基礎的見解として本節において少し言及しておきたい。

不浄とは、人々のなかに危険を招き不幸を呼ぶという認識があり、そのような不幸はなるべく避け、それに見舞われれば原因を追求し速やかに取り除かなくてはならないものである<sup>330</sup>。本章第二節の冒頭で指摘した「あし」のもつ物理的な力の強大さは、その用い方によっては凶器となり得るものでまさに人々の生活のなかで不幸に値する事態を招く可能性がある。そこで、強大な力

は発揮することのできる「あし」を、汚い＝不浄だけ理由からでなく、不浄という範疇化されることによって、人々は「あし」に対して一種の特別な気配りを行うようになり、それはすなわち「あし」の所作に慎重になるということなのである。その特別な気配りによって、「あし」を無碍に使うことが憚れることになり、「あし」のもつ危害性の回避をなり得ると考えることができるのである。

文化人類学者の波平恵美子<sup>331</sup>（1992）は、日本の「浄・不浄」観とは相反するものでありながらも、不浄が浄に転換する例が日本の民俗宗教には多々存在することを指摘している<sup>332</sup>。不浄なものは、清めることによって浄となり得、不浄とされたものは浄に転換しなければならないものという忠告をうけたようなものなのである。

「あし」のもつ否定的概念を不浄としてみると、不浄化されることによって、清潔を心がけるようにという忠告とともに、「あし」の所作にも気をつけよという人々の暮らしに不幸を招く危険性を回避するためのもう一つの忠告も存在するという解釈も可能と考えられるのである。

このように、日本人の「あし」の否定的な概念については、二通りの考察が可能であり、今後より詳細な追究に取り組み、日本の「あし文化」の独自性としての論考に取り組みなければならない点である。

②については、「あし」の否定的な概念として典型的な動作である「踏む」の原義が、肯定的なものであることが明らかになったのであるが、③で取り上げた事象のほとんどのが「踏む」行為のものであったことは、まさに波平（1992）の指摘する不浄である「あし」が浄として扱われている例であるといえる。「あし」を汚いという印象だけからみると、清潔であるべき食べ物と一緒にたにすることに不合理を感じるのであるが、「踏む」の原義からすると全く問題のない取り合わせなのである。

そして、日本の幽霊に「あし」ないということも含め、日本人の「あし」に関する概念は独自性の強いものであることは明らかである。⑤において、他文化圏の比較の一端として近年出版された欧米社会における「あし」に関する事象を総括したリンツァー（2013）の書籍を概観し、日本と全く違う概念があることが窺えたが、リンツァー（2013）がアジア圏の「あし」の文化の事象として取り上げていたのは、インドの仏足石<sup>333</sup>と中国の纏足<sup>334</sup>だけで日本の「あし文化」の事象について何も述べられ触れられていなかったのである<sup>335</sup>。日本の「あし文化」の独自性は、無形であることが多いからに違いない。

今後の課題として、他文化圏との比較研究の際には日本の「あし文化」の独自性はこの無形であることに焦点を当てて追究すべきである。

## 第六章 日本人と「はきもの」の着脱

日本人は、住宅や建物の出入り口では必ず「はきもの」の着脱を行う。そしてその際には、脱いだ「はきもの」の始末をきちんと行うという慣習がある。

この日本人であれば誰しも行う「はきもの」の着脱の慣習を、日本の「あし文化」の一つの考察対象とする。その考察方法として、第一節において「はきもの」の着脱の慣習としての観点から、第二節において「はきもの」の着脱に関する文化的事象をとりあげて考察する

### 第一節 「はきもの」の着脱の慣習

私たち日本人は、「はきもの」を脱ぐ場所できちんとそろえて並べることが礼儀とされているが、その整然と並べられた「はきもの」の光景には感動すら感じさせられる美しさがある。

ところが、古い絵巻物を見てみると、脱がれた草履や下駄のほとんどはいわゆる脱ぎっぱなしの状態（図 6-1）<sup>336</sup>で、今日私たちが行っているようにきちんと並べているものは皆無とっていいほど見当たらないのである。下駄にいたっては、ほとんどが片方は見事に裏返しに描かれている（図 6-2）<sup>337</sup>。



（図 6-1：『本願寺聖人親鸞伝絵上巻』1295年）



(図 6-2:『慕帰絵詞』1351 年)

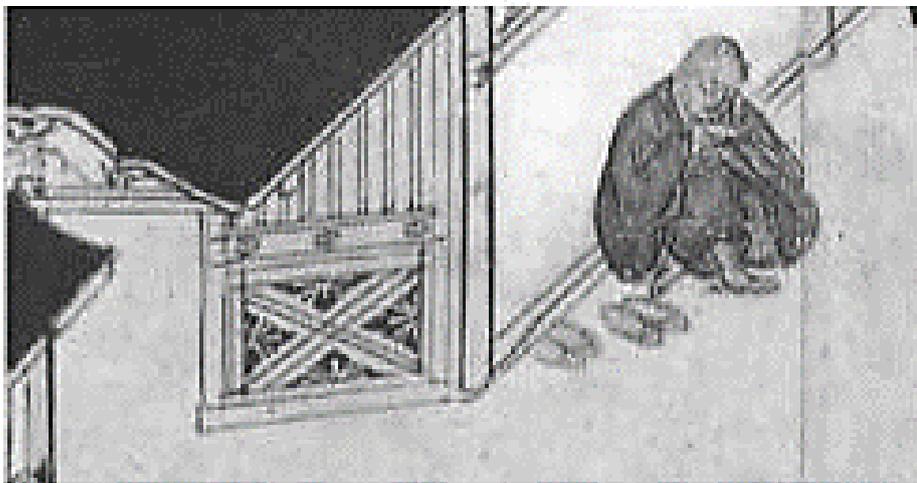
では、今日私たちが当然の礼儀として行っている、脱いだ「はきもの」をきちんとそろえるということは、いつごろから始まったのだろうか。また、どのような経緯でそろえて並べるようになったのであろうか。

そこで本節において、日本人の脱いだ「はきもの」の後始末の慣習について、(1)絵巻物を中心として視覚的資料のなかの脱がれた「はきもの」の絵図の分析、(2)「はきもの」の始末に関する思想的要素、(3)「はきもの」の始末に関する作法、(4)他文化圏での「はきもの」の始末の四つの観点から考察する。

#### (1) 脱がれた「はきもの」の絵

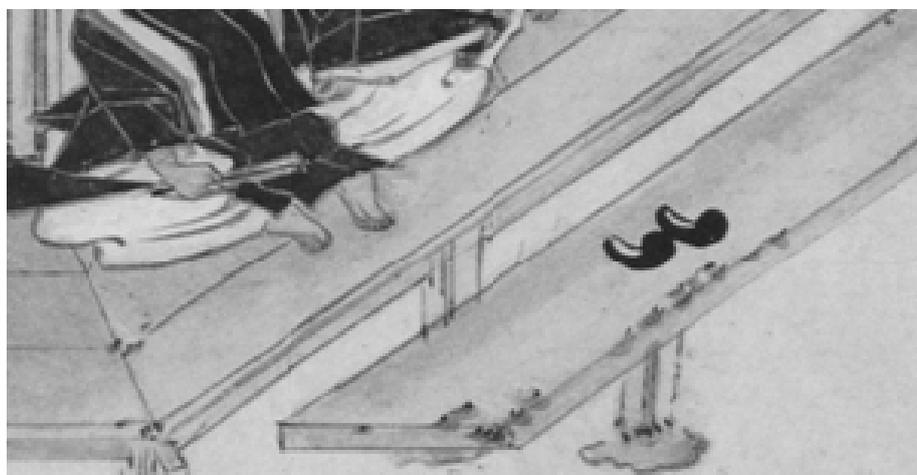
近世までの日本人の行動様式を視覚的に考察できる資料として、絵巻物を中心に明治初期までの文献のなかに脱がれた「はきもの」の絵を調査したところ、平安末期頃までは都市部（都）に描かれている人で「はきもの」を履いている人はほとんどいなく、中世期になってから「はきもの」を履いている人の絵が増えていることから、この頃から「はきもの」文化に馴染んでいったのであるが<sup>338</sup>、その頃の脱がれた「はきもの」絵のほとんどが、現在私たちが行っているように（以下、現行）並べたものではなく、脱ぎっぱなしの状態であったが、現行に近い絵を以下の三点確認した。

① 中門<sup>339</sup>の外で、主人を待ちくたびれて眠っている僧の横に、二人分の草履がきちんと並べておかれている（図6-3）<sup>340</sup>。



（図 6-3：『法然上人絵伝上』巻十二）

② 公家などの高貴な身分のもののはきものである「沓」が、式台のようなところに現行と同じ方向におかれているが、きちんと揃えられてはいない（図6-4）<sup>341</sup>。同じようなおき方がされているものが、少し時代が下って江戸期の庶民風俗絵にある（図6-5）<sup>342</sup>。それは煮売屋<sup>343</sup>で食事をしている客が、食事をするところでは胡坐をかき、その下においてある下駄が図6-4と同じようにおかれている。



（図 6-4：『法然上人絵伝下』巻三十八）



(図 6-5 : 煮売屋の図)

③ 脇本陣の入り口で、主人の「あし」を中間（ちゅうげん）<sup>344</sup> が桶の中で洗っている場所近くに、草鞋が現行と同じように揃えて置かれている（図 6-6）<sup>345</sup>。しかし、その近くにある脱がれた下駄は現行とは反対の向きである。絵



(図 6-6 : 脇本陣の入口の図)

巻物のほとんどがこのように入る方向のままに脱がれている。そのなかでも、入る方向できちんと並べているものもあったが、少し離れたところの草履はそろえられてなく脱ぎっぱなしであった（図 6-7）<sup>346</sup>。



(図 6-7 : 『法然上人絵伝下』 卷四十)

以上三点が、現行に並べ方をしている図絵であった。①と③に関しては、他人のための「はきもの」は揃えておくということが考えられるが、②に関しては「はきもの」の主人本人が意図的にそのようにおいたのか、あるいは他のものが主人のためにそうおいたのか判断し難い。また、現在行われているように丁重においているものではない。③の図 6-7 は、現行とは逆の向きではあるが、確かにきれいにならべている。しかし、少し離れたところにある草履は脱ぎっぱなしであり、「はきもの」の後始末に関して統一的行われていたとは言い難い。

このように、絵巻物を中心として視覚的資料のなかの脱がれた「はきもの」の絵図を蒐集した結果、明治初期までは現行のように脱いだ「はきもの」をきちんと並べる慣習はなかったようであり、現代の日本人は「はきもの」の着脱に関して新たな美学を付加したといえる。

## (2) 禅語と「はきもの」

「はきもの」の着脱の場にしばしば見受けられる文言が、「脚下照顧」である。「自分の足もとに気をつけ、自己反省や日常生活の直視をうながす」とい

う意味であるが<sup>347</sup>、その由来は、中国の宗の時代の臨濟宗中興の祖、五祖法演<sup>348</sup> 禪師（1024?-1104）の逸話によるものである。

ある夜、五祖法演が高弟と共に寺から帰る途中に提灯の明かりが消えた。その時、弟子たちに一句を求めたところ、その中の一人克勤<sup>349</sup>（1063-1135）が「下座、巡堂、喫茶、各各照顧脚下」と答えたという話である。克勤が意図したところは、禅の修行の日々は、敬礼を表す下座、日々の務めの巡堂、行の遂行の助けとなる喫茶、そのすべてが足もと（脚下）を十分に気をつけて行わなければならないものである。提灯が消え何も見えなくなった状況では、足もとが見えず何も行えないことに比喻した。十分に気を払うべき足もとが見えないのは、自分の基が見えないということで、転じて自己反省を促す意味となった。まさに、足もとでの行為である「はきもの」の着脱はまさに足もとで行うものである。「はきもの」の始末も、自己反省の機会として行うようにという教えということである。

近年では、「はきものをそろえると心もそろろう。心がそろうとはきものもそろろう。ぬぐどきにそろえておくと、はくどきに心がみだれない」<sup>350</sup>という一所作が「こころ」を先導するという「からだ」と「こころ」の深い結びつきの好例とされている。

このように、「はきもの」の後始末に一つの思想が付加されるにいたっているのである。

また、現代の日本人にとって「はきもの」を脱ぐ場としての認識である「玄関」という言葉も、元来禅語である。玄妙な道にすすみいる関門、すなわち仏門に入ることを意味する<sup>351</sup>。禅宗の住職の居室である方丈への入り口を「玄関」と呼んだ。その所以は、式台付きの土間の形式の出入り口が、禅宗の方丈の玄関の形式と似ていることから、中世の武家社会で好まれていた禅の思想が反映されて名付けられた<sup>352</sup>。

現代日本人にとっての「玄関」は、家の出入口であり、すなわち、「はきもの」を脱ぐ場という認識だけで、その原義を知る人は少ない。

### (3) 「はきもの」の着脱の作法

「はきもの」の着脱を慣習として行っている日本には、その作法が古くから存在している。その最も古いものが、「くつの礼」である。「くつの礼」とは、貴人に道で出会ったとき、馬からおりて「くつ」を脱ぎ礼をとるという作法で、京都諸家中の乗馬弓矢の実例故事について記した『家中竹馬記』（1511）に、左の沓だけ脱いで礼をすることを「片沓の礼」<sup>353</sup>と記されている。左の沓を脱ぐというのは、再び乗馬せずに礼に徹するという意志を表すことが考えられる。それは、乗馬する際はまず左足を鐙にかけて乗馬するからである。

18世紀には、「沓揖（ゆう）」という神社祭式での沓の着脱に際し、笏（しゃく）をとり上体を軽くかがめる作法がある<sup>354</sup>。笏とは、朝務・神拝の際に手に把る官人用の長方形の薄板のことで、板の内面に必要事項を記載して忽忘に備えるのを本義としたもので、礼服の際にからだの真ん中に立てて持ち歩くのが定番である。「揖」の意味は、笏を手にして上体を軽くかがめて行う礼ということなので、沓を履いて行う礼ということである。

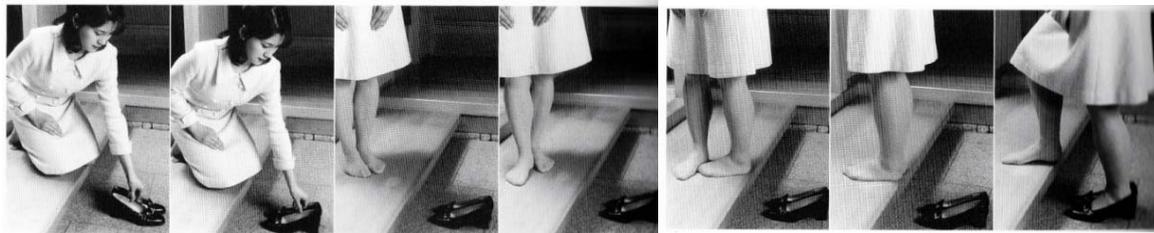
「くつの礼」及び「沓揖」ともに高貴なものの行う作法であり、脱いだ「はきもの」の始末に関する詳細な作法はみあたらない。

脱いだ「はきもの」の始末に関する詳細な記述は、『小学禮法詳説』実地修身巻一の學校常禮章「傘履」に記載されていることを確認したが、「履物及び傘等を丁寧に着むべし、脱ぎ棄置き、または抛捨て去べからじ」で、脱いだ「はきもの」の取り扱い方についてであり、その並べ方などの詳細な指示はない。しかし、挿絵のなかの下駄箱には下駄のつま先が前にして蔵められている（図 6-8）<sup>355</sup>。



(図 6-8 : 学校教育での「はきもの」の始末の教えの解説図)

唯一「はきもの」の後始末についての詳細が記述されているのを確認できたのが、現代の小笠原流礼法の指南書（写真 6-1、解説①～⑦）で、以下のように行う<sup>356</sup>。



⑦                  ⑥                  ⑤                  ④                  ③                  ②                  ①

- ① 下座側の足から框に上がります。
- ② 両足をそろえます。
- ③ 下座側の足を、左足にかけます。
- ④ 左足を少し引き、身体の向きを下座寄りにかえます。
- ⑤ 引いた左足に右足をそろえ、相手に背をむけないようにして框に対してやや斜めにかまえます。
- ⑥ 跪座の姿勢をとり、下座側の手ではきものの向きを変えます。
- ⑦ はきものを下座寄りにそろえます。

(写真 6-1 : 玄関での「はきもの」の脱ぎ方とそろえ方の作法)

小笠原流（礼法）とは、武家故実から出た兵学・軍学及び礼法の流派の一つで、京都の小笠原家に発祥した武家故実が、安土・桃山期に信濃の小笠原氏の

武家故実として諸大名に相伝され、江戸期に兵学・軍学のみならず女子の書札  
礼や嫁の躰・礼儀作法として流布されたものである<sup>357</sup>。

そして、現代の小笠原流礼法の真意は、相手を思いやる心と行動の合理性と  
説く。脱いだ「はきもの」をきちんと揃えるのは、脱いだ場所を乱さない、  
汚さない、そして次なる行動への合理性のための所作ということなのであろう。  
訪問を受けた方は、客人が帰られるまでに「はきもの」の左右を少し離して玄  
関中央にそろえておいておく。「はきもの」の主人を思いやる所作はまさに、  
日本人の礼の真髓である「真心の具体的な表出」を「はきもの」を通して行っ  
たものであろう。

#### (4) 他文化圏での「はきもの」の着脱

日本では、「はきもの」の着脱が慣習として行われているが、多文化圏にお  
ける「はきもの」の着脱において、日本のように何かしら意味や意義を見出し  
ている国はあるのだろうかという疑問をもつ。

まず、古代エジプト文明期ではその「はきもの」であるサンダルは、初期王  
朝時代（BC3050頃-BC2686）には儀式や謁見など特別な機会だけ履き、目  
的地までは従者に持たせて大切に扱われていたという<sup>358</sup>。新王国時代

（BC1550頃-BC1069）になると、サンダルに豪華な装飾がなされるようにな  
り、習俗として高位者の前では脱ぎ、聖域でも履かなかった。聖域で着用し  
ないのは、古代アジア圏では広く分布した習俗であった。

そして、現代にいたっても多くのアジア圏の国々では室内で「はきもの」  
を脱ぐが、脱いだ「はきもの」の後始末に気を配ることを民族単位で行ってい  
るのは、日本と韓国だけと思われる。

韓国での脱いだ「はきもの」の始末は、入ってきた方向のままにそろえ、出  
る時にその向きを変えてから履く。しかし、現在ではこのような「はきもの」

の着脱の作法を行う人は少なく、「はきもの」を外向きにそろえておくことは、「早く帰りたい」という意向を表示しているにとられかねないという。また、訪問を受けた方が訪問者の「はきもの」を日本式にそろえておくことは、「もうお帰りの準備が整っています」という訪問者の早期退出の希望を暗示しかねないという。一挙手一投足に意図とする想いが、同じ文化圏でありながら全く違うことを再認識する。韓国との並べ方の違いは、相手に対する思いやりの違いということになる。

さらには、我が国で脱いだ「はきもの」の並べ方は、並べる場所に十分な空間がある場合、写真 6-2<sup>359</sup> のようにするのは、次なる行動を迅速に遂行するためであり、またもしその場が訪問先としての個人の家など他人の手を煩わせる可能性があるならば、自分の「はきもの」の処理は自分で行うという意図で外に向けて揃えておくというのが一般的な日本的思考である。



(写真 6-2 : トレーニング室入口並べられた運動靴)

しかし、ここで「はきもの」を並べる空間が少ない場合の並べ方（写真 6-3）<sup>360</sup> を再考すると、ただ単に「はきもの」の踵の部分を限られた空間の内に向けているだけで、合理性に欠ける並べ方である。とすると、この並べ方は整理整頓に関する日本的な方法、「端や隅」を重要視する日本人好みの並べ方と考えられる。



(写真 6-3 : 玄関に並べられた「はきもの」)

#### (5) まとめ

私たち日本人が行っている脱いだ「はきもの」を履きやすい方向にむけてそろえておくという慣習は、絵巻物などの視覚的資料の分析によって、近代以後から始まったものであることが明らかになった。そして、それは学校教育でその詳細を学んだというより、家庭や社会生活のなかでの躰や礼儀として学んできたものであった。また、禅語の「脚下照顧」や「はきものをそろえるところもそろろう」といった思想的な要素が付与されたり、作法として形作られたりと、日本人の「はきもの」の着脱には多様な文化が存在している。そしてそれは、日本と同じように「はきもの」の着脱の慣習をもつ韓国との比較によって日本の独自性も窺えた。

日本人の「はきもの」の着脱の慣習は、日本の「はきもの」の歴史とともに歩んできたものなのでその歴史は長い。すなわち、長い月日のなかで様々な文化的な要素で付加されてきたともいえる。その文化性のなかでも、(2)の考察のような思想的な意味合いとの結びつきは、前章までにおいて度々指摘してきた「あし」と精神性との結びつきの一環として捉えることができる。すなわち、日本人の「はきもの」の着脱の行為は、「こころ」が反映されているのである。

そのことを証明する新たな事象を、最近の新聞記事のなかに見つけた<sup>361</sup>。その記事とは、自分の家庭内暴力が原因で妻と二人の子供を失った夫が、いなくなった彼らの靴を、平和な暮らしを営んでいた時を再現するかのように玄関に並べておいているのは、その並べられた靴が自分と家族との繋がり象徴とする唯一のものであるからとその本人（夫）は語っている（写真：6-4）。



（写真 6-4:いなくなった妻と子供の雨靴が並べられている家の玄関）

日本人にとっての「はきもの」の着脱の行為で始末された「はきもの」が、「こころ」の拠りどころにさえなっていたのである。日本人の「はきもの」の着脱の慣習の長い歴史のなかで、現代に至ってもさらなる文化性が付与されていることが、精神性という観点から窺い知ることができるのである。

日本人の「はきもの」の着脱の慣習は、時代とともに多様化されているのである。

## 第二節 「はきもの」の着脱の文化

### (1) 「はきもの」のための役職

「はきもの」の着脱の役として、最も知られているのは「草履取」であろう。豊臣秀吉が下積み時代に、草履取として織田信長の草履を胸元に入れて温めていたという話は有名である。

「草履取」とは、武家などに仕えて主人の草履を持って供をした下僕のことである。「じゃうりもち」として室町時代から存在した。江戸時代になって「ぞうりもち」と呼ばれるようになり、「御ぞう」が俗称である。男色の流行期に、武士が草履取の名目で召し抱えた美少年を「小草履取」と呼び、青年の草履取を「中草履取」、草履取の仲間を「仲間草履取」、武家の奴を「奴草履取」や「立派草履取」、と詳細に分けていた。大名や武家の交際が多くなってから、老練なる草履取も増え、柳営退出の雑踏する際には、遠くから主人の足下へ草履を投げて、投げた草履が正しく主人の前に揃うように日々練習し、行列の時に草履を手代わりに投げて渡す手練のものもあったという。

「草履取」以前の「はきもの」の着脱の役には、12世紀の文献にみられる「沓取（履取）」<sup>362</sup>と14世紀の文献にみられる「くつの役」<sup>363</sup>がある。

「沓取（履取）」とは、主人のくつを持って供をする人のことで、「くつの役」とは、儀式参列、正式の外出などの折り、主人の乗り物の乗り降り、建物の出入りなどで「はきもの」の脱着、保管にあたる役である。武家にあっては、昵近の者の役とされ、別名「沓の手長」といった。

このような役職が存在したのは、現在の「玄関」のような「はきもの」の着脱を行う場所が確立されてなかったことが主な原因だろう。玄関のような空間は、平安期の寝殿造の中門廊につくられた車寄や板扉が最初で、中世期には主殿造<sup>364</sup>の中門に受けつがれ、高貴な身分のものは輿や車から直接出入りするのので、「はきもの」の着脱の必要がなかった。その後、近世になって‘式

台’<sup>365</sup> や ‘玄関’ が出入り口となった。民家では、明治になるまで ‘玄関’ をつくることが許されなかった。

江戸期には、芝居、寄席などで、客の脱いだ「はきもの」の番をする「下足番」の役もあった（図 6-9）<sup>366</sup>。明治期に西洋靴を着用するようになって、草履の着用の減少とともに「草履取」は消滅するが、「草履取」に代わって「鞆持ち」が登場してくるのは興味深い。



（図 6-9：下足番の図）

## （2）「はきもの」の着脱に関する慣用句

次に、日本の「はきもの」の着脱に関する慣用句を『故事俗信ことわざ大辞典』<sup>367</sup> から蒐集する（表 6-1）。そして、「はきもの」を履いているときとの比較として「はだし」の慣用句も取りあげた。また、出典が日本以外のもの及び俗信は除外する。

その結果、草鞋は 10 語彙、下駄は 5 語彙、草履は 2 語彙、「はだし」は 1 語彙であった。

はきもの	数	ことわざ	意味
草鞋	1	草鞋を履く	-旅に出発する -罪を犯した者が追求を逃れるためにすむ土地を離れる -商人が物の値段を高く偽ってうわまえをとる（下駄をはかせる）
	2	二足の草鞋を履く	同一人が両立しないような二種の職業を兼ねること。昔、ばくち打ちがそれを取り締まる

		捕吏を兼ねることをいった
	3	二足の草鞋は履けぬ ひとりの人が同時に二つの仕事はできないことにいう
	4	長い草鞋を履く 博徒などがその土地にいられなくなって旅に出る
	5	草鞋を脱ぐ -旅を終える -旅の途中で宿泊する -旅の途中で博徒などが、ある土地の博徒の家などに一時身を落ち着ける
	6	傾城買いの草鞋履かず むだな金を使う者が、必要なことの費用を惜しむたとえ
	7	仲人は七足かたごの草鞋を履け 縁談は簡単にまとまるものではなく、仲人は双方の間を何度も足を運んで、はきものを履き切らすほどの苦労をするということ
	8	百足が草鞋を履く 足がたくさんあることから、きわめて億劫なこと、面倒なことのたとえ
	9	百足に草鞋をはかすよう ひどく手数のかかることのたとえ
	10	嫁と草鞋は上を履け 嫁がいい気にならないように頭を押さえよということか
下駄 (足駄も 含む)	1	下駄を履く 売買の仲人や、人に頼まれた買い物の時などに、値を高くいって上前をはねる(足半を履く)
	2	下駄を履かせる 物の価格を一段高く偽る。また、物事を実際よりもよく、または大きく見せる
	3	下駄を履くまで 最後の最後まで。物事が終わるまで
	4	下駄を履いて首ったけ 異性に深く惚れ込んで夢中になっていることのたとえ(下駄をはいても首まで沈むほどの深みにはまっているの意)
	5	使い先で足駄を履く 使いに行った出先で、つり銭などをごまかして着服する
草履 (雪駄も 含む)	1	草履履き際で仕損じる 仕事が終わってさあ帰ろうと、草履を履くその間に失敗する。今までの成功を最後の最後に失敗して全部だめにするたとえ。
	2	足袋は姉を履け雪駄は妹を履け 足袋は洗うと縮むし、雪駄は履いているうちに緒もゆるんでくるものだから、それぞれ買う時には見当をつけておいたほうがよいということ
はだし	1	はだしになる 履き物をぬぎ、本気になる。なりふりかまわず本気になる

(表 6-1 : 「はきもの」の着脱に関する慣用句 作成 : 栗山緑)

その結果、草鞋は 10 語彙、下駄は 5 語彙、草履は 2 語彙、‘はだし’は 1 語彙であった。草鞋が最も多いのは、誰もが手軽に手にすることができる「はきもの」であったからに違いない。第二章第二節において引用した、デンマー

ク人のスエンソン艦隊士がその見聞録に、草履が至る所に脱ぎ捨てられていることから、誰もが手にしやすいことを指摘した記述を想起する。

確かに江戸期には、草鞋は自分ですげる人がほとんどであったろう。特に農家では、草鞋を編むのは農閑期の生業でもあり、草鞋が何足編めるかが成人としての目安でもあった。また、長旅以外では買うものではなかった<sup>368</sup>。すなわち、草鞋は他の「はきもの」より、容易に入手でまた利用頻度が高かったので慣用句の数も増えたに違いない。

下駄の慣用句に関しては、「はきもの」として一段高いという高さを意味内容に反映させたものがほとんどであった。また、「脱ぐ」ことが慣用句にあるのは草鞋だけで、下駄や草履のように着脱が安易ではなく、「脱ぐ」ことに手間暇を要することが要因していると考えられる。日本の「はきもの」のほとんどが、着脱に要する手間がかからない、後がけの無い構造となっている。「はきもの」の着脱を慣習とする日本人にとって便宜性の高いものであった。

草履の慣用句に関しては、日々の生活の中で最も利用している「はきもの」に違いないが、慣用句形成における何か特別な意味を見出すことが少なかったことが、慣用句の少なさに反映されていると考えられる。

本節においては着脱に関するものだけに特記しているので、着脱の安易さの程度と、下駄のような他の「はきもの」と違う特性の有無が慣用句の数に比例していると考えられる。

「はだし」の慣用句からは、日本の「はきもの」は‘はだし’に比べて何かと負担になることが多く、靴のように「あし」に密着して負担なく歩容を助ける付属品ではないことを示唆している。

### (3) 昔話のなかの「はきもの」の着脱

日本の昔話のなかには、「はきもの」の着脱が主題となっているものがある。それらは、着脱の主が人間ではなくむかでやなめくじといった昆虫類で、「兎

と亀」の話にみられるような対照的な生き物を配して、不利な条件の方が優位になるという教訓話である。人間以外の生き物にも「はきもの」を着脱させる発想は、「はきもの」の普及及び着脱の慣習の一般化したことを示しているのであるが、それと同時に「はきもの」の着脱が文化として形成されているともいえる。そのなかの一つとして、「むかでの使い」を例に以下に記す。

ある時、むかでと蚤と虱とが寄り合いました。寒い日だったので、こんなときにはみんなで酒でも買って飲もうじゃないか、とむかでが言いました。それにはみな賛成しましたが、さて誰が酒屋まで使いに行くかということになると、蚤は、おれはぴんぴん飛ぶので瓶(かめ)をわってしまいそうだから、この使いはできない、と申します。また、虱も、わたしはぐずぐずして歩くのがとてもおそいから、どうもお役に立つまい、といました。仕方がないのでむかでが自分で行くことになりました。ところがいくら待ってもむかではもどって来ません。蚤と虱はどうとう待ち切れず、いったいむかでは何をしているのだろうと、見に出かけました。すると庭のすみでむかでが何かをしているので、おいおいむかでさん、何をしているんだ。おそいじゃないか、と声をかけました。むかでは見向きもせず、おれは足がたくさんあるものだから、まだわらじをはいているところだと答えました。

(長崎県西彼杵郡伊王島の「伊王島村郷土史」) 369

むかでの「あし」の多さと日本の「はきもの」のなかでも着脱に手間のかかる草鞋の着脱を組み合わせ、おもしろみを集める譚である。この他にも、「むかでの医者むかえ」<sup>370</sup>・「むかでとなめくじの伊勢参り」<sup>371</sup>・「むかでとなめくじの競争」<sup>372</sup>など、上記の「むかで使い」同じように、着脱に時間のかかる草鞋をむかでで履くことが主題となって展開する話である。

このように、人間の「はきもの」の着脱の行為を昆虫に反映させるようになっていることから、着脱の行為が慣習となっており、そしてそれは文化として形作られていることを示している。

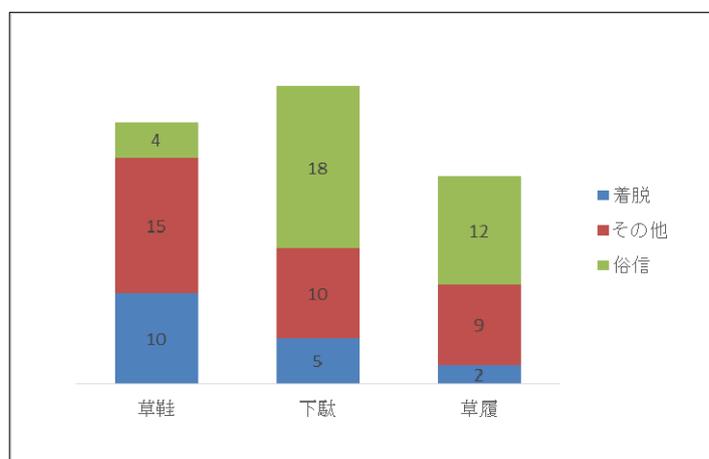
#### (4) まとめ

日本の「はきもの」の着脱に関する文化的事象として、「はきもの」のための役職、「はきもの」の着脱に関することわざ・慣用句、そして「はきもの」

の着脱が主題となっている昔話を取り上げて考察したところ、それはまさに下駄や草履といった日本の「はきもの」が形成した文化ともいえるほど、それぞれの文化的事象の内容は、日本の「はきもの」が主役であった。

(1) では、草履取にみられるような詳細な職種分類や、主人に「はきもの」を差し出す技術を磨くなど、その高度に進化したともいえる「はきもの」の着脱のための職種は他に例をみないものに違いない。

(2) においては、着脱に関するものだけを蒐集したが、それぞれの「はきもの」に関するその他の故事俗信・ことわざなどすべてを含めての数は多く、その総数の最多順をみると、草鞋<sup>373</sup>が29、下駄<sup>374</sup>が33、草履<sup>375</sup>が23であり、下駄に関するものが最も多かった。以下にその詳細のグラフを示す(図6-10)。



(図6-10: 草鞋・下駄・草履の慣用句の分類を示した総数比 作成: 栗山)

ことわざだけの比較では、草鞋(15)・下駄(10)・草履(9)の順で、その最多順は着脱に関するものと同じであるが、俗信だけの比では、下駄(18)・草履(12)・草鞋(4)の順で下駄が最も多いことが要因となっている。下駄に関する俗信が最も多いのは、草鞋や草履は自分でも作れるもので

あるが下駄は購入しなければならない特別な「はきもの」であるがゆえに、他の「はきもの」よりも大切に使わなければならないといったような意識が高くなり、それが種々の俗信を生む結果になったことが考えられる。

改めて（２）を再考すると、靴着用とともに育った現代の日本人にとっては、日本の「はきもの」に関して形成された慣用句は、実感を伴った理解ではなく、全く文献としての机上の理解だけになるほど、これらの日本の「はきもの」の着用経験はほとんどなくなっている。それは、この豊かな日本の「はきもの」文化、すなわち従前の「あし文化」となってしまいうということなのであるが、日本人の「はきもの」が洋靴となった今日、靴の日本の「あし文化」が形成されていくのであろうか。靴文化になっても、日本人の「はきもの」の着脱の行為は継承されていくに違いないが、言語的視座で考察した「俗語」のように、新たな慣用句が着脱に関しても誕生してこないであろうか。「俗語」の特性として、それは「ノリがよく」また「楽しい」慣用句という予想となるが、このような観点からの新たな追究も今後の課題である。

（３）に関しては、「はきもの」の着脱に関する内容の昔話として周知度が高いものを取り上げて考察したが、膨大な数が存在する日本の昔話のなかには、着脱に関するものが他にも存在するに違いないが、本研究ではこれ以上の蒐集に及ばなかった。しかし、（３）で取り上げたいいくつかのものからだけでも、「はきもの」の着脱が文化として形成されていることを昔話を例に提示することはできたと考えている。しかし、昔話に関してもさらなる追究し、「はきもの」の着脱の文化の論考を深めていかなければならない。

### 第三節 考察

日本人の「はきもの」の着脱は、日本の「あし文化」のなかの一つとしてその独自性が色濃く表れていることが、本章の考察によって明らかになった。

前章まででは、日本人の「あし」を形態的・機能的・言語的・概念的側面から考察し、日本の「あし文化」は「あし」自体だけでなく、「あし」のための付属品である「はきもの」のための行為（着脱）にもその独自性が反映されていた。

しかし、日本人の「はきもの」の着脱の独自性については、もう一つ再考すべき点があったことを述べておきたい。それは、日本人の「はきもの」の着脱の行為を改めて分析すると、日本人は汚れを「内」に入れないうために「はきもの」を脱ぐのであるが、外用の「はきもの」を脱ぐと次には内用の「はきもの」であるスリッパや上履きを履く。そして、その「内」のなかでもトイレではトイレ用のスリッパに履き替えるなど、日本人の「はきもの」の着脱は「はきもの」からの離脱というより、「はきもの」から「はきもの」へと移行なのである。この点に関して、少し見方を変えると欧米人が一日中同じ「はきもの」

（靴）を着用し、夜ベッドに入る時にようやく「はきもの」を脱ぐことと、日本人が種々の「はきもの」を常に着用し、寝床に入る時にようやく「はきもの」を脱いで裸足になることとあまり変わりはないようにもみえるのである。

すなわち、日本人の「はきもの」の着脱には、玄関など内と外がはっきりした場所で行う着脱一があり、内に入ってからその空間によっては、専用の「はきもの」の着脱を行う着脱二が存在する。そして、この着脱二においてはその「はきもの」が共有するものであれば、脱いだ「はきもの」の始末の作法が適応されるのが現代日本人の「はきもの」の着脱なのである。

このような着脱の連続は、「はきもの」の着脱が行われるようになった頃から、すでに行われていたのである。それは、中世の絵巻物などから窺えるのであるが（図 6-10）<sup>376</sup>、当時の日本人は板張りのところでは草履をはき、畳や



(図 6-10 : 『慕帰絵詞』)

ゴザの上に上がる時は草履を脱いで裸足になるという習慣があった。それは、日本の家屋が構造上板敷のところは、縁側などのように外界と直結した壁や戸のない空間なので汚れやすく、その汚れが「あし」に付着しないための配慮であったに違いない。また冬季には寒さ対策の意図もあっただろう。このようにみていくと、日本人は「はきもの」を履くようになってから、「はきもの」から「はきもの」への着脱の行動様式を何百年も行ってきていたのである。

日本人の「はきもの」の着脱の行為は、その長い年月の歴史のなかで、儀式や高貴な身分の人に対する礼儀としての作法が存在し、慣用句が形成されたり、昔話の主題となったりして文化性が高められてきた。さらには、脱いだ「はきもの」の後始末に気を配ったり、その方法が一つの作法となったり、そして思想的要素も付加されたりと、多様な文化となっていた。このように、独自性が強くかつ多様な日本人の「はきもの」の着脱の文化は、今後欧米化した暮らしの中で靴着用とともにどのような展開がなされていくのか興味もたれる。

## 終章 日本人と「あし文化」

一般的にその国の文化を代表するものとして、私たちはまず宗教・芸術・芸能・文学・建築などに、まずは注目する。しかし、ヒトの「からだ」もまた、それら諸伝統に負けず劣らず、その国の文化を雄弁に語る表象体であり得る。

日本語の「からだ」の語源の一つが「カラタチ（殻立）」であり<sup>377</sup>、つまり、「からだ」は「殻」でもあり得るわけだが、そのカラに「文化」という中身を投入することによって、新たに見えてくる「からだ」のなかでも「あし」を多角的に考察し、日本における「あし文化」の存在の大きさをまず再評価したことが、本論文の特徴であるということを主張する。

そして、この「カラタチ（殻立）」のなかのもう一つの漢字である「立」に、本研究としては注目すべき点がある。「からだ」の語源説の第一は「カラダチ（軀立）の略」で、第二の「カラタチ（殻立）の義」とともに「立」があり、日本人にとっては、「立つ」ことに「からだ」の意義を見出していることが明らかだからである。

立ち構えの研究で業績の多い運動生理学者の平沢彌一郎<sup>378</sup>（1988）は、この大和言葉に由来する語源に注目し、他の言語の「からだ」の語源と比較してみると、英語では‘body’、ドイツ語では‘körper’、フランス語では‘corps’、ギリシャ語では‘σωμα’で、「人間が立つ」という意味が含まれているものがないことを指摘する<sup>379</sup>。

さらには、ヘブライ語で書かれた旧約聖書には、皮、背、胴などのからだの部位名称はあるが、ギリシャや近世の「からだ」にあたる言葉がないことも加え、古来の日本人は他民族とは全く異なった「からだ」の認識があったことは、興味ある問題であると述べている<sup>380</sup>。

この指摘は、本研究にとって大きな意味を示唆している。それは、古来の日本人が「からだ」というものに対して、「立つ」ということ、あるいは「立って

いる」ということに大きな価値観を抱いていたことを裏付けているからである。そしてそれは何よりも「あし」を意味している。古来の日本人は、「あし」を使って立っていることに「からだ」の意義を抱いていたのである。

平沢（1988）は、語源からだけでなく縄文初期の遺跡から出土された土版もその裏付けとしてあげている。それは、生後 10 か月くらいの男の子の足跡がつけられ、まん中に紐を通したと思われる小さな穴が一つあるものであった<sup>381</sup>。

平沢（1988）は、この日本最古の土版の解釈として、初めてひとり立ちをしたわが子の成長ぶりを喜び、その子を立たせてその足型をとって素焼きにした。そしてそれを、その子の首につるして近所や親戚回りをしたのか、あるいは氏神に奉納して子の生涯と健康を祈願したのだらうと述べ、縄文人は足を成長のシンボルと考えていたと推定している<sup>382</sup>。

平沢（1988）は、自身の専門分野から「立つ」を「立ち構え」と捉えているが、本研究としては立つ「あし」、あるいは「立つ」ことを可能する「あし」として捉え、その裏付けとしても重要な資料である。

日本人の始まりと言ってもよい縄文時代から特別な意義を抱いていた立たせることのできる「あし」に注目し、日本人が多様な文化的価値を積極的に形成してきたことを実証的に解明し、従来、ほとんど顧みられることのなかった日本人の「あし」に、「あし文化」が存在していたことを提唱することが本研究の一眼目であった。

日本の「あし文化」は、実に豊富かつ多様であるがゆえに、結果的に本論文ではその一端を提起することで結ぶことになったが、本研究によって日本人の「あし」の多様な文化性の再認識を促し、「からだ」を動かすための「あし」の重要性が周知されている今だからこそ、日本の「あし文化」再考に大いに意義がある。

そこで、「あし文化」に関する論考をさらに一步踏み進めるためにも、本終章においては前章の総括に加えて、補足の議論を展開してみたい。

#### (1) 現代日本人の「あし」

戦後の近代化が進むにつれ、日本人種の遺伝的特徴であった「胴長短脚」という体型が「脚長」に変化してきている。そしてその要因が、近年の栄養状態や生活環境の変化にあることが明らかになり、いわゆる人種の遺伝的特性も、少なからず環境的因子に依存するものであるといえる<sup>383</sup>。

しかしその一方で、現代日本人の足に関しては、「外反母趾」という足部疾患が起きている。この形態的機能障害は、外因的要因と内因的要因が組み合わさって発症するが、そのなかで最も大きいのが外因的要因である靴の着用である<sup>384</sup>。

その裏付けとなる事実が、オーストラリアの原住民アボリジニー (aborigines) の足を例にあげることができる。成人になるまで靴を着用したことの無いアボリジニー族の足の親ゆびの角度は、日本人の3~4歳と同じ程度の5度である。このことから「外反母趾」は裸足生活者にはほとんど発症しない可能性が高いといえる。

しかし、この点に関して日本人の足の形態的特徴について言及しておかなければならない事実がある。それは、子どもの成長にともなう足形の変化についてであり、私たちの足は、第一指側角度(親指が外反する角度)と第五指側角度(小指が内反する角度)が成長とともに大きくなる。3~4歳頃までは親指がほぼまっすぐに伸びているのが学齢期以後、親指の外反傾向が顕著になるが、特に女兒では外反の角度が急に大きくなる<sup>385</sup>。

これは学齢期以後の靴や靴下の着用による圧迫で外反していくとだろうと容易に推測するが、なぜか日本人より長時間靴を着用しているアメリカ人の子供にはこの傾向がみられない。日本人の足の成長段階での変化の特性の原因は明

らかでないが、靴の適合性向上につながる問題として追究が必要であると指摘されている<sup>386</sup>。

以上のように、昨今、足の問題としてしばしば取り上げられるようになった「外反母趾」は、一般認識としては靴着用によるものとされているが、特に日本人女性においてはお洒落のために窮屈な靴や、馴れない高いヒール靴を長時間着用することだけではなく、もともと「外反母趾」を招きやすい足の構造をしている可能性があることをこころしておくべきである。

現代日本人の「あし」の変容については、「立ち構え」が後退傾向にあることも指摘されている<sup>387</sup>。それは、立位で重心位置を測定する指標は、踵の最後端からつま先までを100とした場合の踵からの重心位置（position of gravity: G%）であらわされるのであるが、6歳から14歳までは40～50%へとゆっくり前方へ移行し、15歳から90歳代の間で同じ47%の周囲に位置することを1960年時点で判明していた。それが、1980年の再測定では、40%周囲に後退していることがわかり、現代人の立ち構えがいわゆる「ふんぞり返って」いる姿勢であることを示唆しているのである<sup>388</sup>。

身体的能力が最高の時期である10代から、運動機能が低下した年齢に至るまで、同じ重心位置が維持されていることは注目すべき点で、いうなれば、成人の「立ち構え」は47%周辺に位置しなければ、生理的、物理的、心理的の安定を保持することができないともみることができる。等差級数的に変化していけば2000年には33%になり、もはや直立姿勢を安定保持することが不可能になってしまうだろうと、平沢（1988）は警告していた。

その予測が、どの程度的確なものであったかについては、その後の追跡調査は見当たらないが、昭和初期ごろまでの日本人の歩容形態の特徴として、つま先重心であったのが、踵着地の歩行形態になっていることが、平沢のこの予測を追随させることになっているといえる。

## (2) 日本人と「歩容」

着物や履物に起因した日本人特有の歩容形態のほとんどが、現代の日本人に継承されていた。それは、200～300年の日本の履物の着用歴と40～50年あまりの靴の着用歴の差から、依然の歩容形態に変容がないのは必然的であるからだ。

その長い歩容形態の年月のなかで、日本人はその特性を生かした文化を築いていたことが、「引きずり足」を進化させた花魁の「八文字」歩容や、雪駄やポックリ下駄などから鳴る音に粋の文化を、そして「お引きずり女は嫁にもらうな」にみる「歩容」の俗信や下駄の傷み具合からその人の性格を占ったり、あるいは下駄を蹴り放って明日の天気を占ったりと、日本人は自らの歩容の特性を楽しむ能力があった。それは独特な文化形成とでもあった。

歩容は、歩行速度、加齢、性差、履物、歩行面等のさまざまな因子によって変化する<sup>389</sup>。

近藤義忠(2003)は「文化としてのウォーキング」という論考のなかで、「民族がもっている身体の形態的特徴や運動様式の特徴は、それぞれの環境への適応の表現態、ないしは発現態であるといつてよい」と述べている<sup>390</sup>。

日本人の有する幾多もの歩容特性はまさに着物や履物もしくは生活の環境の適応の表現態である。そして、数多くの「歩容名称」の存在からは、日本人の「あし」使いに関する繊細さや意識の高さであり、それはすなわち、歩容名称に反映された日本人の情緒の豊かさや繊細な感性の表現態である。

しかし今日、豊かで貴重な表現技法が使われることなく、過去のものとして忘れ去られていることは、現代日本人がそもそも歩かなくなり、そのような歩容表現を体感する機会がなくなったことが要因としてあげられるが、日本的感性そのものが変容した可能性も考えられる。

現代社会の生活環境で、「急か急か歩容」形態が形成され、「徒歩(とほる)」や「ぱしる(走る)」、「ダッシュする」といった表現されるように、面

白味を感じさせる感性ともいえるが、高速化社会を反映したような新たな歩容文化が形成されているとみることもできる。

しかし、強歩大会や修行法の「歩行（ほぎょう）」に象徴される「特殊歩容」を、精神の向上性のために行うということこそが、日本人の「あし文化」の重要な一面でもあった。

本論文の「歩容」に関する考察は、人間の歩行分類<sup>391</sup>のなかの無意識に歩いている自由な歩行である「自然歩行」の歩行形態について追究であったため、「強歩」や「歩行（ほぎょう）」といったある特定の目的のために意図的に行う歩行の「特殊歩行」については次段階の考察課題として残さざるを得なかった。しかし、ここで日本人の「歩容」の独自性の重要な位置をしめる、「強歩」や「歩行」などの心身鍛練の目的で行われた「歩容」について補足しておきたい。

「強歩」すなわち「強歩大会」は、以前は多くの学校で学校行事として行われていた生徒（学生）の心身鍛練を目的とした歩容であった。その耐久能力の鍛練を目的とした長距離を踏破する「強行遠足」ともいえる歩容は、何十キロもの行程を夜を徹して行われることもあった。また「かち歩き」も、「飲まない」「食べない」「走らない」という目的のもとで行われる「強歩」に似た特殊歩容の一つである。「強歩」その名の「強」が示しているように、心身を「強く」する願いを込めていたのであろう。現在では、民間の野外活動グループが主催して、健康目的としても行われていることもある。「強歩」の起源は、日本の歩行に関する歴史のなかでは、歩くことを健康や修行といった目的のために行う多くの事象から窺え、江戸期に最盛されている。

「お遍路さん」と親しみを込めた名で知られる四国八十八ヵ所の霊場巡りである「遍路」は、弘法大師空海が815年に開創したといわれる霊場を巡拝することで、八十八の数は八十八の煩悩を断滅して八十八所の浄土を現じ、八十八尊の功德を成就するためといわれる<sup>392</sup>。八十八の煩悩を「あし」を駆使し

て断滅させ、そして八十八の功德を成就させる行ともいえる。この地道ともいえる「あし」の行は、歩かなくなった現代日本人に人気があることは興味深い点である。「あし」の原点に戻って踏破することで、自分の原点に戻れるという感想はよく聞かれることである。

その他には、江戸中期の「養生法」の流行時に、「歩き」養生が存在していた。まさに『養生訓』（貝原益軒）「巻第一 総論上」「身体と運動」の項に、「身体は日々少づつ労働すべし。久しく安坐すべからず。毎日飯後に、必ず庭圃の内数百足しづかに歩行すべし。雨中には室屋の内を、幾度も徐行すべし」<sup>393</sup> があり、「巻第五 五官」の「導引・按摩をしてはいけないとき」の項にも「只身をしづかに動かし、歩行する事は、四時ともによし。尤も飯後によろし」<sup>394</sup> と記されている。

当時の社会秩序の安定した中で、現代日本人に比べても日々の生活がまさに運動であった江戸期の人々に、常に身体を動かすことの重要性を論している教訓である。確かに職業によっては、一日中安座の状態の者も多かったから活動的な日々の重要性を論していたのであろう。何よりも、貝原益軒自身が「歩き」養生を実践したゆえに85歳の健康寿命を全うしたのである<sup>395</sup>。

上野国（群馬県）安中藩が行った「安政遠足（とおあし）」は、藩士の訓練のために安中城門から碓氷峠の熊野権現まで7里余りの中山道を徒歩競走させ、その順位を記録させていたが、順位や時間自体は重要ではなかった。また、薩摩藩の武士階級子弟の教育法である「郷中（ごちゅう）」には、「山坂の達者は心懸くべき事」とあり、山坂を歩いて体を鍛えることを教育の根幹の一つとしている。学校行事として行われていた「強歩」の起源は、これらの藩士やその子弟教育のための特殊歩容にあることが窺える。

以上のように、心身鍛練を目的とした「歩容」は、日本の歩容特性の大切な一要素だったといえる。歩かなくなった現代日本人には、この自国の歩容文化が心身の健全な状態を取り戻すために用意されていることを忘れてはならない。

近年、「歩容」が健全な心身のために効果的ということが、科学的に証明されてきている。それは、運動の与える身体的好影響のみならず、精神的好影響ともいべきものである。運動が、ストレス・不安・抑うつ<sup>396</sup>の軽減、記録・学習能の向上効果の研究報告のみならず<sup>396</sup>、最近では運動が脳やこころの健康を保持増進するための有効な道具であるということが、脳科学の分野から明らかにされつつある。

その中で、うつ・不安に関する脳の機能・構造（セロトニン神経活動とコルチコトロピン放出因子神経活動）と運動条件の影響を概説した研究が新しい<sup>397</sup>。その内容は、ヒトはうつ・不安状態を意識的に制御することは困難であるが、運動を行うことによって比較的容易に非意識下で機能する神経機構に働きかけることができるというものである。すなわち、うつ・不安の背景となっている神経活動不全は非意識下で進行しているので、運動でその神経系活動を変容させ抗うつ・抗不安効果をもたらすことが可能となるのである。しかし、運動選手の過剰な練習量がうつ状態を引き起こすように、運動の実施法や運動条件によって得られる効果が異なるので、運動の強度・時間・頻度などの運動条件の統制や脳に与える影響についてのさらなる検討が必要である。

我が国のうつ病の有病率は5～8%といわれており、現在も増加傾向にある<sup>398</sup>。うつ病や不安障害の発症原因についての明確な要因は解明されていないが、主要な要因とされている身体的・心理的な負担環境を運動によって軽減する可能性が証明されてきている。まさに、「あし」を動かして「からだ」の正常な機能・機構を奮い起していく重要性の証明ともいえる。

しかし、現実には現代の日本人の運動量は毎年減少していることは、毎年報告される厚生労働省の国民健康・栄養調査で明らかである。平成24年度の20歳以上の男性の歩数の平均は7139歩、女性6237歩で、毎年減少しており、平成15年度に比べると、男性が400歩あまり、女性は500歩あまりの減少である<sup>399</sup>。歩幅から概算すると、一日約4.5kmの歩行距離に足る脚力で

生活していることになるのだが、江戸庶民は一日平均約 10 里（40 km）を踏破して旅を続けることができた「あし」に比べて雲泥の差である<sup>400</sup>。「あし」で心身の健康を保ってきた日本人の「からだ」がこのような状態では、確かに不安定になるのは必然的な結果である。

### （3） 坐の行方

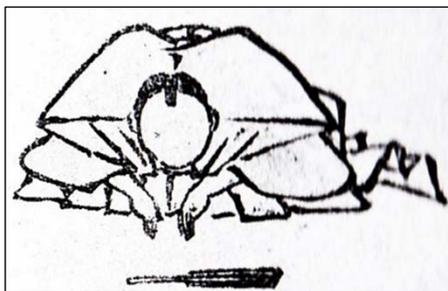
日本人の「坐」姿勢は、「礼」の表意として始まり、多様な「坐」姿勢が歴史とともに形成されていく中においても、その「礼」という意義は今日にいたるまで一貫している。しかし、現代の欧米化された生活環境のなかでは、椅子の生活となり「膝」を床について座る機会は減少し、「正座」も特別な機会の「坐」姿勢となりつつあり、価値観においても欧米化の影響で変わりつつあることは明らかである。特に「礼」を重んじる気風は過去のものとなることが多くなっている。

ところが、「坐」することなく「礼」を軽視する風潮がみられる現代にも、「礼」をこめた「坐」の形が存続していることが現代の電子化された意思伝達の文書の中に確認される。それは、携帯電話や電子メールの文章のなかで「謝り」や「嘆願」などを表現する表記である絵文字、顔文字である。それらは以下のように手と膝を地にして身を低くする「平伏」の絵が当然のように用いられているのである。

平伏	m( _ _ )m	m( _ _ )m	m( . _ . )m
お願いします!	└(°ロ°)┘	↓	└( _ _ )┘ ↓
平謝り	<( _ _ )>		

平伏の「坐」は、羽織袴の様相でちょん髷の男性の姿が古典的なものとして周知のものであるが（図 7-1）<sup>401</sup>、日本人の「礼」としての「坐」は、実際に

「坐」する機会や「礼」意識がうすれても、日本人の心身に深く根を下ろしているのである。



(図 7-1 : 平伏の「坐」の例)

では、この日本人の心身に浸透している「坐」の将来はどのようになるのであろうか。入澤(1920)は大正期に、日本人の「坐」の未来について以下のよう

に述べていた<sup>402</sup>。

尚ほ今から百年か二百年の後になると、今の坐り方がどう変わるか分からない。——(中略)——其時分には八千萬人一億人にもなって居るかも知れません。さうして今日私の申げたような座り方は、昔話になつてしまつて、明治、大正の時代には畳の上に坐つて居つた、而も洋服を着てまで坐つて居つたと云うことが、絵なので示されるようなことになるかも知れません。そういうことは分かりませんが兎に角坐り方には家屋の建築とか衣服の変化とかが、大に關係しますから今より将来のことを予測することはできないのでありますけれども、恐くは今日の坐り方は廃つて一部の人は椅子にかけ、他の部分の人は「アグラ」をかくことになるだらうと思われま

この指摘から百年近くたった今日、入澤の予測通りに日本人の「坐」の大半は「椅子坐」となり、「床坐」は減少の一途を辿っている。家屋や衣服が西洋化されて「坐」を形成するきっかけとなった畳が日本人の家からなくなりつつあることも大きな要因であろう。「椅子坐」が中心の生活で生まれ育った現代の若者たちにみる日本人の「坐」は、「うんこ座り」<sup>403</sup>・「ヤンキー座り」<sup>404</sup>から「ジベタリアン」<sup>405</sup>・「ダンサリアン」<sup>406</sup>へ移行していることは、足首で全体重を支えたり、「あし」の折り畳みの連続であつた「坐」の生活で培われた脚力が失われたことの証のようにも見える。

また、日々の「坐」の生活のなかで親密さを感じていた「膝」ともより疎遠となり、自らの「からだ」の部位を実感する機会が減り、自分の「からだ」をしっかりと実感することなく疎遠になっていくことが危惧されるのである。

矢田部(2011)は、日本の伝統文化が「坐」を中心として組み立てられ、日本人の精神生活と社会生活の根本を支えてきた「坐」の衰退の現代は、「文化の地崩れ現象」と述べている<sup>407</sup>。文化の地崩れ状態でありながらも、日本人のもつ興や粋をつくりだす感性で、現代の「坐」に新たな文化を形成することができないだろうか。

入澤(1920)が予測しているように、今から100年200年後には明らかに「坐」する機会は減少し、ほとんど欧米社会のように椅子生活になることは確かであろう。しかし、文化としての「坐」の概念は継承されていくに違いない。

問題であるのは、体感がなければほんとうの理解があり得ないということである。なるべく多くの機会を設け、「坐」を体感していくことは、日本人にとって自国の文化を忘れないためにも必要なことなのである。

#### (4) 結語

本研究では、日本人の「あし」が有する文化性を総括的に把握することに努め、形態的、機能的、言語的そして概念的視座から考察を試みた。そしてその追究の中で、いかに日本文化における「あし」の存在が大きいかを証明し、それが十分に「あし文化」と呼ぶに足る歴史的含蓄あるものであるかをまず確認した。

ヒトは「直立二足歩行」の獲得によって、「手」と二足の「足」、そして「ことば」を発し、それを理解していく中で脳が高度に発達し、巧妙な思考力が身に付き文化・文明を発展させてきた。その栄光栄華のまさに「担い手」となった「手」の活躍は、諸分野において大きく取り扱われてきたが、就中、日本人については「手仕事の日本」や「手の日本人」と謳われるほどであった。

しかし、「手」の輝かしい活動を支えてきた「からだ」の他の部位のうち、最も貢献した「あし」が脚光をあびることは少なかった。ましてや、「あし」が創り出す多様な無形文化を「あし文化」として特化されるようなことは、ほぼ皆無だったといえる。

そこで本研究では、その日本人の「あし」に焦点をあて、「あし」の文化性を追究し、敢えて「あし文化」として考察した。その結果、日本の「あしの文化」の独自性や多様性が明らかになった。「文化とは人類が自らの‘手’で築き上げてきた有形・無形の成果の総体」という一定義<sup>408</sup>とは対照的に、「あし」で営々と築きあげてきた無形の成果を、「あし文化」と呼ぶことは、決して日本の「手の文化」を否定しているわけではなく、日本の「手の文化」との共存関係を強調したいのである。

イタリアのルネッサンス期の芸術家レオナルド・ダ・ビンチ<sup>409</sup> (Leonardo da Vinci : 1452-1519) は、「あし」を以下のように絶賛している。

足は人間工学上、最大の傑作であり、そしてまた最高の芸術作品である。

“The human foot is a masterpiece of engineering and a work of art.”

The notebooks (c.1508-1518)

ヒトの一对の足には 52 本の骨と 64 の筋肉と腱、76 の関節、そして靭帯が巧みに操作して、全体重を維持しまた移動させている<sup>410</sup>。人体の中で最も骨の数が多く、一歩進める度に体重の 4 分の 1 強の負荷がかかり、走ると約体重の 3 倍の負荷を支え得る能力が備わっている足を、自身が稀有な芸術家であったダビンチも、人体の最高傑作と認めざるを得なかったのだろう。

この最高の芸術作品の恩恵を蒙り、日本人は豊かな感性を駆使しながら、貴重な無形文化を形成してきたわけである。生理学的にも、現代日本人の「あし」

の可能性の高さは、スポーツ界で見直された「ナンバ」や全日本女子サッカーチームの功績、さらにはフィギュアスケートやクラシックバレエ、野球界での日本人選手の活躍からも明らかであり、さらなる発展の可能性もまだまだ温存されているに違いない。

ヒトは進化の過程で直立したことにより、大脳を発展させ、新たに「ことば」を獲得し、知的能力を一気に進化させた。その一方で、大脳の知的発達、運動が不足すれば、おのずから動きたくなくなるはずの本能を抑制し、ヒトに恒常的な運動不足を招来してしまった。すなわち、野生の動物が本能的に運動するような機能が、ヒトの場合、大脳に集中し、その指令を待つようになった。その結果、ヒトは肉体機能を維持するためには、意識的に運動を行わなければならない責任を負うことになった。つまり、頭脳が進化した人間は、「からだ」を動かすことをいつも後回しにしてきたのである。

人間は、筋肉をある程度以上動かすことをしないと、生理的に生きることができない動物であることは、他の動物と同じである。ただ、本能的にではなく、大脳という高度な基地を利用して、意図的に運動を促進し人体の危機管理を行わなければならないのである。それがゆえに、大脳という高度な基地が十全な機能を発揮しないかぎり、人体の危機管理が行われなくなり、やがて体全体が病むことになってしまう。とくに近代においては、高度な情報化社会のなかで、過重な負担を強いられている大脳が疲弊するにつれて、ヒトはいよいよ体を動かさなくなり、そのぶんだけ健康が脅かされることになった。

しかし、このような状態にあっても、積極的に「あし」を動かし、全身運動することによって健康状態が改善されることが、科学的に証明されるようになった<sup>411</sup>。別な言い方をすれば、「あし」を駆使することで、疲弊した大脳を援助していかなければならないのである。

このような個々人の危機だけでなく、現代は急速に連帯感を喪失しつつある共同体の中で、社会全体構造も危惧されている。それは、現代人が互いに距離

を置くようになり、孤独感を深めているからである。近代化とともに導入された個人主義に付随していた個人情報保護が要因なのか、あるいは大脳で生み出された電子機器への依存度の増加なのか、いや、この二つの要因が相乗作用となったがための結果であろう。

先進国を中心に機能不全家庭も急増し、そのことに関する発達障害などの精神疾患も蔓延する一方である。そのことは、やがて個人生活の域を超えて、社会全体の安定性を欠くほど深刻になりつつある。そういう時代状況だからこそ、私たちは「あし」を使い、積極的に他者と交流する必要がある。それは各人の健康回復や精神安定、さらには生き甲斐の創造にもつながっていく。

特に日本人には、「あし」を心身双方の機能させる「強歩」大会や修行法における「歩行」など歩容文化を歴史的に形成してきた。それは、まるで上記に述べた人体の仕組みを知っていたかのような運動処方だったのである。

今後ますます機械化と情報化が進むであろう生活環境の中で、現代人は再び「あし文化」を復活させ、感性を磨き、健康管理を行っていく必要がある。それは、日本の豊かで貴重な「あし文化」を再評価し、未来に向けて進展させていく使命も、私たちに与えられていると考える。未来社会は、ますます人間から歩行の必要性を奪い取ることになるかもしれないが、だからこそ「あし」の働きに注目し、多様な「あし文化」を積極的に発信していけば、日本の新たな国際貢献にもなり得る。

本研究の最大のきっかけであった 2011 年の全日本女子サッカーチームのワールドカップでの快挙から、再度の栄光獲得の前日の会見で主将は、女子サッカーが「ブームから、文化」になることを強調していた<sup>412</sup>。

彼女らの 4 年前の世界の舞台への登場は、本研究の「あし文化」の皮切りであり、そしてこの度の再戦時に選手自らが「文化」としていく意志を固めた発言は、「あし文化」の確証であった。日本の伝統的な大和撫子の印象からは、

うって変わっての 21 世紀の大和撫子の姿を、今後どのように「文化」として分析していくかも本研究の大きな課題となった。

ヒトにとって心身の十全のために執拗欠くべからざる「あし」に、日本人は多様な文化を有している。本研究は、日本人の「あし文化」を今日に至るまで学術的に追究されることはなかったことに焦点を当て行ったところに、新規性がある。しかし、「あし文化」という新たな研究であったため、基礎的な事象の確証として結ぶことになったが、幾多もの課題が明らかになった。その中でも、日本人の「あし文化」のなかで誇るべき精神性についての論考が深められなかったことが遺憾であり、結語において述べておきたい。

「あし」の最も基本的な行為である「歩容」について、特殊歩行の考察まで及ばなかったが、個々の箇所日本人の「歩容」の独自性として、「歩容」を心身強化の目的にすることについて言及した。

それは、修行のなかの「歩行」・藩士のための「安中遠足」・藩士の子弟のための「郷中」など特別な階級のみならず、「強歩大会」・「お遍路」など広く一般庶民にまで浸透した「歩容」処方であったことである。このことは、日本人の遺伝子のなかに、「あし」をよく動かせば「こころ」が健全、ひいては強化されるという経路が作られているという裏付けなのである。

この観点からみると、スポーツ界での日本人選手の活躍は、古くはマラソンを代表として、陸上競技・フィギュアスケート・クラシックバレエ、そして昨今のサッカーなど、「あし」が主体となるスポーツばかりなのである。そして、どれも持久的体力のいる、すなわち、強固な精神性が必須のスポーツなのである。なでしこチームの世界での活躍を見ていると、他国の選手と比べて未だ体格が同等とは言えない体型でありながら、対戦相手に引けを取らない戦いぶり、紛れもなく強固な精神が彼女たちを奮い立たせていることは誰も否定できない。

「あし」を駆使すると精神が台頭するという日本人の「からだ」の仕組みを、日本人選手たちが示しているのである。この「あし」の精神性との連携の可能性を、世界に発信することが私たち日本人の世界貢献の一つに違いない。日本の類まれなる豊かな「あし文化」を、今、なでしこチームに多くの注目が集まってきている時だからこそ、本研究の意義は高くなる。

そして、ここ最後にいたって、本研究を通じて追究すべきこととして常に責務の念のように抱いていたことについて言及する。それは、「あし」の無い、あるいは「あし」が機能しない場合についてである。この点もいくつか挙げた本研究の大きな課題の一つであるが、医学的見識及び研究方法等の詳細なる計画が必要であることから研究方法のうちに含むことは不可能であった。

本研究の結論として、「動」の「あし」を主張しいくなかで、諸々の理由から「あし」を失い、あるいは機能しなくなった人についての場合のことが、しばしば懸念されたのである。それは、医学の発達によって蒙ることができた、幸とも不幸とも言い難い事例であり、その数も少なくない。現代の高度な医学的技術があって初めて存続するようになったのである。

本題に戻ると、「あし」を失った人体について、わずかな医学的知識による理解では次のような解釈である。私たちの進化した脳は、人体の一部を損失してもその情報が生理学的に理解できない。すなわち、損失した部位が存在するものとして、痛くなったり、痒かったり、という感覚を発するのである。そして、脳はその損失したという認識を受容するには長い年月が必要であり、あるいは医学的処置をしない限り存続し続けるのである。このような事例に対して、どのように「動」の「あし」の重要性を主張するのか。本研究は「あし」の重要性をあらゆる面から論じてきたが、人体の「あし」を損失した場合の考察が欠落していたことは、認めざるを得ない。

現代の科学技術で、生身の脚（足）に限りなく近い代替脚（足）が可能になり、「あし」の損失に関しての貢献度は大きい。特に脚機能の回復が、本人の

精神面への貢献については、注目すべきものがある。私たちの「からだ」は、もちろん「あし」の重要度だけで成り立っているものではが、「あし」が常に「からだ」の他の部分の影の功労者であったことが本研究の一主張であったが、この功労者を失っても、他の部位がその役を買ってでてくれることは周知の事実である。本研究のさらなる進化のために、この「あし」の損失についての考究は、将来の必須の事項である。

以上、日本の「あし文化」の確証、「あし」と精神性との関連性、その意義と貢献、そして今後の課題についての言及をもって、本研究の結びとする。

## 注

- 1 樺山紘一（1941-）。東京大学名誉教授。西洋史学者、評論家。13年国立西洋美術館長。ヨーロッパ中世史を研究する一方で、思想・文化全般にわたる幅広い分野で評論活動をおこなう。主な著作に「ゴシック世界の思想像」、「ルネサンス周航」、「歴史のなかのからだ」など。印刷博物館長。
- 2 樺山紘一『歴史のなかのからだ』岩波書店、p.8、2008.
- 3 1980年代終わりごろから一般化した名称で、健康増進が目的に歩くスポーツ。背中にディバック、腰に万歩計、靴はスニーカーかウォーキングシューズというのが標準スタイル。（稲垣吉彦著『平成・新語×流行語小辞典』講談社現代新書1449、p.86、1999）
- 4 世界陸上選手権大会（2003）で末續慎吾選手の男子200m競技での3位入賞や、桐朋学園高校が2000年に東京代表としてインターハイ出場を決めたことの一要因として報道された。
- 5 甲野善紀（1949-）。東京都出身。武術を主とした身体技法の研究家。武術稽古研究会松聲会主宰。主な著書に『古武術に学ぶ身体操法』（岩波書店、2003）、『甲野式からだの使い方：苦手な体育がおもしろくなる』（双葉社、2007）、『古武術に学ぶ身体操法』（岩波書店、2014）など。
- 6 柳宗悦（1889-1961）。美術評論家、宗教哲学者。民族運動の提唱者としても知られる。東京帝国大学文学部心理学科を卒業（1913）。学習院高等科在学中に文芸雑誌『白樺』の創刊に加わり同人となる（1910）。多くの文学者や工芸家と同志的な交流をもち民芸運動の普及に努め、1936年東京駒場に「日本民芸館」を創設した。それまで顧みる者のなかった民衆の工芸の美を解明した功績は大きく、1957年に文化功労者となった。
- 7 柳宗悦『手仕事の日本』岩波書店、1985。（電子ブック：[http://www.aozora.gr.jp/cards/001520/files/51820\\_50713.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/001520/files/51820_50713.html)。pp.3-4。参照2014.1.7）
- 8 大築立志（1945-）教育学博士。東京大学大学院総合文化研究科名誉教授。運動生理学と身体運動の力学的解析科学の立場から「身体運動のたくみさ」の研究に精髓している。
- 9 大築立志『手の日本人、足の西欧人』徳間書店、1989.
- 10 『日本大百科全書』（ニッポニカ）、Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000011537>（参照2014.5.5.）
- 11 講談社辞典局編『これは使える「体ことば」辞典』講談社、p.156、2000.
- 12 『情報・知識 imidas』2008、Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com>（参照2015.4.26）
- 13 榛沢和彦．中越地震10年の月日を経て 新潟県中越地震のエコノミークラス症候群10年の推移経過．日本集団災害医学会誌(1345-7047)19巻3号．p.397. 2014.
- 14 日本人の三大死因である悪性新生物、心疾患、脳血管疾患をはじめ、糖尿病、高血圧、高脂血症（脂質異常症）、腎臓病、慢性閉塞性肺疾患、痛風、

- 肥満、歯周病、さらには骨粗鬆症、認知症なども含まれる疾病のことで、1997年「成人病」とよばれていたのを「生活習慣病」と改称した。
- 15 進藤宗洋.健康づくりのための運動 厚生省の健康づくりのための運動所要量の論拠. 健康医学 6(2). pp.42-55. 1992.
  - 16 厚生労働省発表の平成25年国民健康・栄養調査結果によると、20歳以上の男性の平均歩数は7,099歩で10年間減少傾向にあり、女性は6,249歩で10年間での変化は見られなかった。
  - 17 目標値は、20~64歳の男性は9,000歩、女性は8,500歩、65歳以上では男性7,000歩、女性は6,000歩である。（「健康日本21(第二次)」の目標値）
  - 18 谷釜尋徳. 近世における江戸庶民の旅の歩行距離について 道中双六の分析を中心に. 東洋法学 52(1). p.316. 2008.
  - 19 Megan Teychenne, Kylie Ball, Jo Salmon. Physical activity and likelihood of depression in adults: A review. Preventive Medicine 46. pp.397-411. 2008.
  - 20 清原裕. 認知症の症候学・治療学および予防への展望. 認知症予防への展望. 超高齢社会を迎え、今後考えるべき課題はなにか. 認知症のコホート研究久山町研究(解説/特集). 老年精神医学雑誌(26)増刊 I. pp.138-144. 2015.
  - 21 『デジタル大辞泉』2012、Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001016418900> (参照2014.6.21)
  - 22 阿久津邦男(1975)、前掲書、pp.139-140.
  - 23 谷釜尋徳. 日本体育大学大学院 体育科学研究科博士号取得。東洋大学法学部 准教授。著書に『図表で見るスポーツビジネス』(叢文社、2014)、『スポーツビジネス概論』(叢文社、2012)、『知るスポーツ事始め』(明和出版、2010)がある。
  - 24 谷釜尋徳. 幕末~明治初期における日本人の歩行の特徴について. 日本体育大学紀要 36(1). pp.1-18. 2006.
  - 25 佐藤方彦編『日本人の生理』朝倉書店、1988.
  - 26 辻村明・長山泰久. 統計からみたセカセカ日本. 文芸春秋. pp.138-146. 1979.
  - 27 『日本国語大辞典』、Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/lib/search/basic/index.html?q1=&r1=1&phrase=0&sort=1&rows=20&pageno=1&s=f>
  - 28 講談社辞典局編『これは使える体ことば辞典』(まえがき)、講談社、2000.
  - 29 東郷吉男編『からだことば辞典』東京堂出版、2003.
  - 30 東郷吉男・上野信太郎著『動植物ことば辞典』東京堂出版、2006.
  - 31 高橋秀治『動植物ことわざ辞典』東京堂出版、1997.
  - 32 米川明彦(1955-)。専門は俗語・聖書・手話研究。梅花女子学院教授。茨木キリスト福音教会教師。茨木市人権センター評議員。新村出記念財団評議員。
  - 33 米川明彦編『若者ことば辞典』東京堂出版、1997.

- 34 米川明彦編著『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』三省堂、2002.
- 35 米川明彦編『現代若者ことば考』丸善ライブラリー 210、丸善、1996.
- 36 米川明彦編『日本俗語大辞典』東京堂出版、2003.
- 37 『現代用語の基礎知識』自由国民社、1980～2014.
- 38 藤堂明保・加納喜光編『学研新漢和大字典』普及版、学習研究社、2005.  
白川静『字訓』新訂、平凡社、2005.
- 39 新村出編『広辞苑』第6版、岩波書店、2008.
- 40 大貫恵美子(1934-)。文化人類学者。米・ウィスコンシン大学人類学部博士課程修了。ウィスコンシン大学人類学部教授。主な著書に『日本人の病気観 - 象徴人類学的考察 - 』（岩波書店、1985。1986年サントリー学芸賞）、『コメの人類学 - 日本人の自己認識』（岩波書店、1995）、『ねじ曲げられた桜 - 美意識と軍国主義』（岩波書店、2003）がある。
- 41 大貫恵美子『日本人の病気観 - 象徴人類学的考察 - 』岩波書店、1985.
- 42 『字通』、Japan Knowledge、  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200300518000000>  
(参照 2015.5.25.)
- 43 近藤四郎。日本人の足と靴。科学朝日 13(4). pp.30-33. 1953.
- 44 佐藤方彦編『日本人の生理』朝倉書店、pp.179-180、1988.
- 45 『日本大百科全書』（ニッポニカ）、Japan Knowledge、  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000230456> (参照 2015.5.7)
- 46 遠藤晃・石川仁・千葉克司・重茂克彦。日本人高校生の体格と体型の年次推移。日本医事新報 3628. pp.48-50. 1993.
- 47 Takamura, Kazuyuki, Ohyama, Shiro, Yamada, Teruki. and Ishinishi, Noburu., Takamura, Kazuyuki, Ohyama, Shiro, Yamada, Teruki and Ishinishi, Noburu. Changes in Body Proportions of Japanese Medical Students between 1961 and 1986. Am. J. Phys. Anthropol. 77. pp.17-22. 1988.
- 48 河内まき子。日本人の足の形。科学 78(1). pp.57-59. 2008.
- 49 佐藤達夫監修『からだの地図帳』講談社、p.130、2013.
- 50 アメリカ人（白人）は約48%、英国人は約42%、ドイツ人は37%、スウェーデン人は約35%である。（近藤四郎『足の話』岩波新書 101、岩波書店、pp.163-164、1979）
- 51 近藤四郎(1918-2003)。人類学者、動物学者。ヒトの直立二足歩行への進化過程を研究。著作に「足の話」「足のはたらきと子どもの成長」など多数。
- 52 近藤四郎『足のはたらきと子どもの成長』築地書館、pp.16-18、1981.
- 53 松沢哲朗(1950-)。理学博士、京都大学霊長類研究所所長。1987年から「アイ・プロジェクト」と呼ばれるチンパンジーの心の研究を始め、「比較認知科学」という新しい研究領域を開拓。紫綬表賞受賞。
- 54 ヒト科には、ヒト科ヒト属（ホモ属）、ヒト科チンパンジー属（パン属）、ヒト科ゴリラ属、ヒト科オランウータン属の四属がある。

- 55 松沢哲朗『想像するちからーチンパンジーが教えてくれた人間の心』岩波書店、p.54、2011.
- 56 ジェーン・グドール著・松沢哲朗日本語版監修・訳『チンパンジー』くもん出版、p.44、1994.
- 57 近藤四郎（1979）前掲書、p.164.
- 58 『日本大百科全書』（ニッポニカ）、Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000011648>、（参照 2015.4.30）
- 59 多田道太郎『からだの日本文化』潮出版社、pp.194-198、2002.
- 60 槌田満文『江戸東京職業図典』東京堂出版、p.399、pp.403-404、2003.
- 61 遊戯用の小弓のことで、平安時代に小児や女房の遊び道具として盛んになり、室町時代には公家の遊戯として、また七夕の行事として行われた。江戸時代になると、広く民間に伝わり競技会も開かれた。（『日本大百科全書』、Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com>、参照 2015.5.8）
- 62 江戸時代後半、京坂より流行した酒席の遊戯。
- 63 能の『式三番』（『翁』）の後半に狂言方によって演じられる儀式的要素の強い舞。（『国史大辞典』、Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com>、参照 2014.7.1）
- 64 柳田國男『明治大正世相史篇：柳田國男全集 26』筑摩書房、pp.45-46、1990.
- 65 葛飾 北斎（画）『北斎漫画 第3巻』東京美術、p.29、2003.
- 66 『日本国語大辞典』、Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com>、（参照 2015.4.29）
- 67 Le Vay, Benedict 'Ben Le Vay's Eccentric Britain. Bradt Travel Guides (Eccentric Guides)' . Bradt Travel Guides. p.142. 2011.
- 68 日本レクリエーション協会監修、増田靖弘他編集『遊びの大事典』東京書籍、pp.246-247、1989.
- 69 オノレ・ド・バルザック著、山田登世子訳『風俗のパトロジー』新評社、p.86、1986.
- 70 イギリスの動物学者。バーミンガム大学で動物学を学び、オックスフォード大学大学院で博士号取得（動物行動学）。動物行動学と人間行動学に関する啓蒙的な著作で知られ、『裸のサル』（河出書房新社、1967）、『人間動物園』（新潮社、1969）、『マン・ウォッチング』（小学館、1977）など多数あり、動物学者の見地から人間とその行動を観察して、動物としての人間の在り方を説くと共に、人間本位の社会観や価値観を警告している。また、イヌ、ネコ、馬などの身近な動物が持つ、見落とされがちな習性や知られざる特性を数多く紹介し、人々の動物への理解促進にも努める。
- 71 モリス、デズモンド『ボデイ・ウォッチング』小学館、pp.344-351、1992.
- 72 谷釜尋徳。日本体育大学大学院体育科学研究科博士号取得。東洋大学法学部准教授。著書に『図表で見るスポーツビジネス』（叢文社、2014）、

- 『スポーツビジネス概論』（叢文社、2012）、『知るスポーツ事始め』（明和出版、2010）がある。
- 73 谷釜尋徳．幕末～明治初期における日本人の歩行の特徴について．日本体育大学紀要．36(1)．pp.1-18．2006．
- 74 見聞録の筆者の国籍の内訳は、英国 7、フランス 6、ドイツ 5、アメリカ 4、オランダ 4、オーストリア・デンマーク・メキシコ・ポルトガル・ロシア・スウェーデンそれぞれが 1 点であった。
- 75 伝統芸能における「摺り足」と区別して谷釜が表現した文言を本稿においても採用した。（谷釜尋徳．幕末～明治初期における日本人の歩行の特徴について．日本体育大学紀要．36(1)．p.16．2006．
- 76 谷釜尋徳．幕末～明治初期における日本人の歩行の特徴について．日本体育大学紀要 36(1)．p.5（脚注 41）．2006．
- 77 ピエール・ロチ（フランス）による 2 作品（『秋の日本』・『ロチの日本日記』）にある。
- 78 「引き摺り足」を指摘した見聞録は、ラナルド・マクドナルド（アメリカ）『日本回想記』、ハイネ・ヴィルヘルム（ドイツ）『世界周航日本への旅』、エミール・ギメ（フランス）『1876 ボンジュールかながわ』で女性の「引き摺り足」について指摘しており、ヘルマン・マローン（ドイツ）『マローン日本と中国』は男性の「引き摺り足」について指摘されていた。
- 79 矢田部英正（1967-）筑波大学大学院体育学修士、文化女子大学大学院博士号取得（被服環境学）。学生時代の体操競技の選手としての姿勢訓練をきっかけに、身体技法の研究に進む。主な著書に『美しい日本の身体』（筑摩書房、2007）、『椅子と日本人のからだ』（筑摩書房、2011）、『日本人の坐り方』（集英社、2011）などがある。
- 80 矢田部英正『美しい日本の身体』ちくま新書、p.188、2007.
- 81 野村雅一（1941-）文化人類学者。国立民族学博物館名誉教授。身体の身ぶりやしぐさによるコミュニケーションを専門とし、主な著書に『しぐさの世界－身体表現の民族学－』（1983）、『身ぶりとしぐさの人類学－身体がしめす社会の記憶－』（1996）、『しぐさの人間学』（2004）がある。
- 82 野村雅一『身ぶりとしぐさの人類学』中公新書、p.14、1996.
- 83 野村雅一（1996）、前掲書、pp.20-21、1996.
- 84 佐藤方彦編『日本人の生理』朝倉書店、pp.151-152、1988.
- 85 近藤四郎（1918-2003）。人類学者、動物学者。1967年京都大学霊長類研究所教授、初代所長を務め後、大妻女子大学教授。ヒトの直立二足歩行への進化過程を研究。主な著作に『足の話』（岩波書店、1979）、『足のはたらきと子どもの成長』（築地書館、1995）などがある。
- 86 近藤四郎（1979）、前掲書、p.99.
- 87 矢田部英正『日本人の坐り方』集英社、pp.86-89、2011.
- 88 狩野長信（画）・野間清六・山口蓬春（解説）『花下遊楽図』美術出版社、1955.

- 89 6歳から14歳までの男子（公爵・島津忠重 14歳5ヶ月、男爵・島津富次郎 9歳9ヶ月、男爵・島津諄之介 8歳5ヶ月、島津韶之進 7歳2ヶ月、島津陽之助 6歳2ヶ月）。
- 90 本論文において、引用文献の原典が英語である場合、原文も日本語訳とともに提示する。原典が英語以外の言語であった場合、英語訳が入手できれば表示するが、ない場合には日本語訳だけを提示する。
- 91 エセル・ハワード著/島津久大訳『明治日本見聞録：英国家庭教師婦人の回想』講談社、p.41、1992.
- 92 Howard, Ethel . Japanese Memories. The Chapel River Press. p.31. 1918. (In Collection California Digital Library <https://ia601407.us.archive.org/16/items/japanesememories00howarich/japanesememories00howarich.pdf>, 参照 2015.5.12)
- 93 原文言語はデンマーク語で、英語訳も見当たらないため日本語訳だけを提示する。スエーデン語の翻訳版「Skizzer från Japan och Kochinkina」(Fredriksons、1890)はある。
- 94 スエンソン・エドゥアルド著/長島要一訳『江戸幕末滞在記』新人物往来社、p.79、1989.
- 95 吉澤小百合、原田奈名子、原部聖子. 女子大学生における内股歩行の客観と主観による出現頻度の違い. 佐賀大学紀要 13(2). pp.35-42. 2009.
- 96 『MORE』 May 2014 No.443、集英社、p.29、2014.
- 97 The Japan News、読売新聞、p.13、2015.5.2
- 98 田中康仁・北田力編集『図説 足の臨床』改訂3版、メジカルビュー社、p.74、2010.
- 99 田中康仁・北田力編集（2010）、前掲書、p.74.
- 100 吉澤小百合ら（2009）、前掲論文、p.36.
- 101 笹本信子. 足の着地期・離地期からみた和装時の歩容に関する研究. 家政学雑誌 3（8）. pp.695-704. 1986.
- 102 足の「ゆび」の表記について、本論文では「足ゆび」とする。「ゆび」は手と足どちらにも使われるが、漢字の「指」は手偏がついていることから本来は手の「ゆび」であることから、手の「ゆび」と区別するために、本論文においては手の「ゆび」には「指」、足には「ゆび」を使用する。足の「ゆび」は、医学的には下肢のものには「趾（し）」を用い、第一趾、第二趾、第三趾、第四趾、第五趾と書く。第一趾と第五趾は、それぞれ母趾、小趾とも呼ぶ。
- 103 阿久津邦男『歩行の科学』不昧堂新書 15、不昧堂、pp.62-65、1975.
- 104 阿久津（1975）の男性の測定結果を本論文筆者がグラフ化した図。
- 105 高齢になるとハイヒールを履く人は少ないと、阿久津（1975）は述べている。
- 106 阿久津（1975）の女性の測定結果を本論文筆者がグラフ化した図。
- 107 歩行分析法は、身体の各部の動きを時間的に観察し、各関節の変位を分析する運動学的分析法（kinematic analysis）と歩行動作を起こす力に関する分析である筋電図分析や熱量消費量測定を主体とした運動力学的分析法

- (kinetic analysis)の二つに大別されるが、本稿の引用文献では（佐藤方彦編『日本人の生理』「第7章 日本人の歩行」山崎昌廣、朝倉書店、p.138、1988）では運動学的分析法を採用している。
- 108 佐藤方彦編『日本人の生理』朝倉書店、p.153、1988.
- 109 阿久津邦男（1975）、前掲書、pp.61-62.
- 110 佐藤（1988）、前掲書、pp.151-152.
- 111 ルイス・フロイス『日欧文化比較』、ラフカヂオ・ハーン『日本の風土』。
- 112 小泉八雲・平川祐弘編『神々の国の首都』講談社、p.107、1990.
- 113 Hearn, Lafcadio. Glimpses of unfamiliar Japan. 2<sup>nd</sup> ser. Leipzig Bernhard Tauchnitz. p.114. 1910.
- 114 平沢弥一郎『足の裏は語る』筑摩書房、pp.104-118、1991.
- 115 藤堂美香. 近代日本における歩行術と学校教育での歩行運動に関する考察. 奈良女子大学スポーツ科学研究 10. p.21. 2008.
- 116 Bramble, D. M. & Lieberman, D. E. Endurance running and the evolution of Homo. Nature 432, pp.345-352. 2004.
- 117 甲野善紀・田中聡『身体から革命を起こす』新潮社、pp.134-135、2006.
- 118 Levine, R. & Wolff, E. Social time: The heartbeat of culture. Psychology Today. pp.28-35.1985.
- 119 近藤義忠. 日本人の健康意識と行動（その5）－文化としてのウォーキング－. 仙台白百合女子大学紀要 7. p.113. 2003.
- 120 辻村明、長山泰久「統計からみたセカセカ日本」. 文芸春秋. pp.138-146. 1979.
- 121 辻村明『高速社会と人間』かんき出版、1980.
- 122 江戸吉原花魁道中行列の様子。（大分県杵築市の「きつきお城まつり」の花魁道中の様子。2015年度版）
- 123 江戸で有名な遊女（名妓）で、丹前風呂屋の湯女だったことからその名があり、吉原で名妓の最高位である「太夫（たゆう）」の第一人者。
- 124 北村一夫『吉原のホログラフィー：江戸・男と女の風俗』六興出版、pp.163-167、1987.
- 125 榎本準一『下駄本：下駄の買い方・履き方』平安工房、p.51、2001.
- 126 高取正男『日本的思考の原型』平凡社、p.161、1995.
- 127 幼女や嫁入り前の娘が、和装の晴れ着を着た際に履く履き物。楕円形の分厚い台の底をくりぬき、その底の中に鼻緒を利用して小さな鈴を下げ、台は前緒のほうに向かって「のめり」をつける。台の側面に色漆を塗ってこれに蒔絵を施し、台の表には畳表をつけ、古くは鋳打ちにしたりして華やかにつくられた。（Japan knowledge, <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000212770>, 参照 2015.7.7)
- 128 福間裕爾. 身振. 常設展示室（部門別）解説 387. 福岡市博物館. 2011.
- 129 藤堂明保編『学研 漢和大字典』学習研究社、p.420、1995.
- 130 『字通』、Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200300259700000>（参照 2014.5.10）

- 131 藤堂明保編『学研 漢和大字典』学習研究社、p.270、1995.
- 132 『字通』、Japan Knowledge、  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=20030025970000>  
(参照 2015.6.23)
- 133 身分の高い大人が敬意を表すときはただ手を打つだけである。(石原道博編訳『新訂魏志倭人伝他三篇』岩波書店、p.110. 1985)
- 134 黒板初美編集『続日本紀』新訂増補国史大系第二巻、吉川弘文館、  
p.20・p.33、1935。(川本利恵・中村充一. 正座の源流. 東京家政学院  
大学紀要 39. pp.31-49. 1999)
- 135 デズモンド・モリス、日高敏隆訳『裸のサル: 動物学的人間像』河出書房  
新社、1969.
- 136 多田道太郎 (1924-2007)。京都大学教授、明治学院大教授、武庫川女  
子大教授を歴任。日常の風俗や雑事から日本文化をとらえる評論で知られ  
る。主な書籍に「しぐさの日本文化」(筑摩書房、1972)、「複製芸術  
論」(講談社、1985)、『からだの日本文化』(潮出版社、2002)など  
多数ある。
- 137 多田道太郎『しぐさの日本文化』筑摩書房、pp.40-41、1972.
- 138 多田道太郎 (1972)、前掲書、pp.117-118.
- 139 河野亮仙「舞踊・武術・宗教儀礼 芸能と祭りの身体論へ」(野村雅一編  
『叢書1・身体と文化-第1巻 技術としての身体』大修館、p. 293、  
1999.
- 140 入澤達吉. 日本人の坐り方に就て. 史学雑誌. 31(8). pp.589-617.1920.
- 141 臀坐。「鳶ずわり」ともいう。
- 142 入澤達吉 (1920)、前掲論文、pp.589-590.
- 143 Perry, Matthew Calbraith (1794-1858)。海軍大佐。東インド艦隊  
司令長官となり、1853年浦賀沖に来航し翌年再来日して日米和親条約を  
締結した。帰途琉球王国とも修好条約を調印した。
- 144 土屋喬雄・玉城肇訳『ペルリ提督日本遠征記(三)』岩波書店、p.182、  
1953。本書は1856年に合衆国議会の命によって発行された前掲書の第一  
巻を抄訳したものである。
- 145 Perry, Matthew Calbraith. Narrative of the expedition of an  
American Squadron to the China Seas and Japan. D.Appleton  
and Company. p.405. 1856.  
(<http://ebook.lib.hku.hk/CTWE/B36599566/>, 参照 2013.10.8)
- 146 川本利恵、中村充一. 正座の源流. 東京家政学院大学紀要 39. pp.31-49.  
1999.
- 147 青森県大畑町の二枚橋遺跡 2 出土の高さ 9.2 cm の土偶で、記事には「蹲  
踞(正座)」と明記されている。
- 148 6世紀後半の群馬県高崎市の観音山古墳出土の埴輪。
- 149 入澤達吉 (1920)、前掲論文、pp.589-617.
- 150 浅見高明. 正座を見直す. バイオメカニズム学会誌 13(1). pp.9-10.  
1989.
- 151 矢田部英正 (2011)、前掲書、p.116.

- 152 山折哲雄（1931-）。宗教学者。国際日本文化研究センター名誉教授。主な著作に、『悪と往生』（中央公論新社、2000）、『近代日本人の宗教意識』（岩波書店、1996）、『悲しみの精神史』（PHP 研究所、2002）など多数ある。
- 153 山折哲雄『「坐」の文化論』講談社学術文庫、p. 228、1984.
- 154 戦国大名黒田考高が、秀吉の賤ヶ岳の七本槍に倣い家臣精鋭 24 人の呼称。黒田二十四騎画帖からの抜粋画で、江戸後期の御用絵師尾形洞谷筆と伝えられる。（福岡市博物館蔵）
- 155 東郷吉男編『からだことば辞典』東京堂出版、pp. 255-257、2004.
- 156 柳瀬和明、マーク・ジュエル編著『ボディ・イングリッシュ - からだ言葉の日英比較 - 』三友社出版、p.210、1990.
- 157 長野県南佐久郡及び広島県高田郡の方言。
- 158 愛知県愛知郡・碧海郡、島根県、広島県、山口県島嶼、徳島県、愛媛県松山、福岡県福岡市・久留米市、熊本県、大分県の方言。
- 159 香川県香川郡の方言。
- 160 小学館辞典編集部編『日本方言辞典：標準語引き』小学館、2004.
- 161 柿本人麻呂。生没年未詳。『万葉集』の代表歌人で奈良朝以前に活動した。
- 162 京都博物館所蔵（山折哲雄『坐の文化論』佼成出版社、p.173、1981）
- 163 『慕婦絵詞』（1351年）（小松茂美編『続日本絵巻大成』中央公論社、1985）
- 164 土屋喬雄・玉城肇訳『ペルリ提督日本遠征記（四）』岩波書店、p.14、1953.
- 165 Calbraith Matthew Perry. Narrative of the expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan. D.Appleton and Company. p.406. 1856.  
(<http://ebook.lib.hku.hk/CTWE/B36599566/>, 参照 2013.10.8)
- 166 小松茂美編『日本絵巻大成 3「吉備大臣入唐絵詞」』中央公論社、p.44、1977.
- 167 金田一春彦『日本語新版（上）』岩波新書、pp.180-181、2012.
- 168 金田一春彦（1913-2004）。東京帝国大学国文科卒業。専門は音韻史。アイヌ語の研究者としても知られ、また邦楽・童謡にも造詣が深い。1958年「十五夜お月さん」で毎日出版文化賞受賞。平成9年文化功労者。
- 169 金田一春彦（2012）、前掲書、pp.182-183.
- 170 外国と言語の上での交渉の行われる前から日本語にあったもので、生粋の日本語というべきもの。日本語の語彙は、和語、漢語、洋語、及びそれらの混成語の四つに分けられる。[金田一春彦（2012）、前掲書、p.146.]
- 171 金田一春彦『日本語』岩波新書、p.136、1957.
- 172 英語は、胃から「はく」（vomit）と呼吸器から「はく」（cough）を区別する。
- 173 「結核」、「膜炎」、「胃癌」などほとんどが字音語あるいは外来語で、ヤマトコトバのものはほとんどないという。
- 174 金田一春彦（2012）、前掲書、pp.188-190.

- 175 金田一春彦 (2012)、前掲書、p.184.
- 176 金田一春彦 (2012)、前掲書、p.186.
- 177 手や耳朶など「からだ」の部位名が頻繁に登場する短歌を詠んだ石川啄木  
 (「はたらけどはたらけど猶わが生活楽にならざりぢつと手を見る」、歌  
 集『一握りの砂』など)は、当時の先端をいく歌人だった。[金田一春彦  
 (2012)、前掲書、p.188]
- 178 金田一春彦 (2012)、前掲書、p.188.
- 179 小林祐子(1931-)。英語学・英語教育専門。東京女子大学名誉教授。その  
 他の著書に『しぐさの英語表現辞典 <新装版 日英比較索引・類別索引付  
 き>』(2008)がある。
- 180 小林祐子『身ぶり言語の日英比較』英語教育協議会、pp.18-19、1985.
- 181 南部せんべい巖手屋の商品。[http://www.iwateya.co.jp/s\\_fukumimi.html](http://www.iwateya.co.jp/s_fukumimi.html) (参照 2014.12.7)
- 182 「豆腐の耳」とは、豆腐製造容器にできた豆腐を一丁分に切る前の何十丁  
 分もある豆腐の四隅上部にできた細い縁取りのような部分をいう。
- 183 『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2002、Japan Knowledge.  
<http://japanknowledge.com/lib/search/basic/index.html?q1=&r1=1&phrase=0&sort=1&cids=20010%2C20030%2C20040&rows=20&pageno=1&s=f>
- 184 [1] の中には、①感覚器の一つ、②聞くことや聞こえること、また聞く  
 能力や聞く気持ち、③聞いた話、④ ①の耳介の部分を削ぐこと、の四  
 つの分類がある。
- 185 『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2002、Japan Knowledge,  
<http://japanknowledge.com.ezproxy.lib.fukuoka-u.ac.jp/lib/display/?lid=200204098615cbbT613Q> (参照  
 2014.11.05.)
- 186 ⊖物の糸などを通す穴、⊖わらじの紐を通す穴、⊖暖簾や旗などの乳(ち)、  
 の三つの区分があり、「はりのみみ」(『宇津保物語』第一巻俊蔭、970  
 -999 頃)や「暖簾の耳」(衣笠一閑宗葛『堺鑑』、1684)のように使わ  
 れている。
- 187 ①器物の取っ手、② (アラビア数字の3が耳介に似ていることから 数  
 字の三をいう符丁、の二つの区分がある。
- 188 例:「書類の綴りの耳を隊長の指が意味なく弄んでゐた」(梅崎春生『日  
 のて』、1947)
- 189 「千両の小判みみがかけてもならぬ」(浄瑠璃・近松門左衛門『傾城酒呑  
 童子』、1718)
- 190 和船の船底材である航(かわら)の両側の部材。通常は三材をはぎ合わせ  
 てつくるので、中央の材を中(なかがわら)というのに対して、両側の材  
 をいう。『日本国語大辞典』(2000-2002)、Japan knowledge,  
<http://japanknowledge.com> (参照 2015.4.7)
- 191 『日本大百科全書』小学館、1994、Japan Knowledge,  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001081306024000728> (参照 2014.12.30)
- 192 紙は、610年に僧曇徴(どんちょう)が伝えたとされる。  
 『日本大百科全書』、Japan Knowledge,  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000042117> (参  
 照 2015.3.25)

- 193 社会運動家でもあった曹洞宗円福寺住職 藤本幸邦（1920-2009）の言葉。
- 194 『日本国語大辞典』第二版、小学館、Japan Knowledge、  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2002018e39a5q68Sm171>（参照 2014.11.4）
- 195 ①険しい道などを登る時に後ろから押して助けること、またはその人。  
②他人に力を添えること。主に悪いことについていう。（『日本国語大辞典』第二版、Japan Knowledge、  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2002018eb29003G00Zad>、参照 2015.3.21）
- 196 『日本国語大辞典』第二版、Japan Knowledge、  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2002018e39a5q68Sm171>、参照 2014.11.4）
- 197 「画用紙で結構なんです、やはり多少とも腰があるほうがいいみたいです」（丸谷オ一『笹まくら』、1966）
- 198 「腰（コシ）〈略〉筆」（梅盛『類船集』、676）
- 199 「言葉の腰がふらふらしている」（夏目漱石『虞美人草』、1907）
- 200 立川昭二(1927-)。歴史学者。病理史学者。北里大学名誉教授。専門は鉱業史研究の分野から病気や死についての文化史的考察。『死の風景』でサントリー学芸賞（1997）受賞。
- 201 立川昭二。日本人の健康観。日本人間ドック学会 20（5）。p.842。2006。
- 202 河合隼雄・中沢新一『「あいまい」の知』岩波書店、2003。
- 203 講談社辞典局編『これは使える体ことば辞典』（まえがき）、講談社、2000。
- 204 東郷吉男編『からだことば辞典』東京堂出版、2004。
- 205 東郷吉男。「からだことば」に含まれる比喩の性格について。語源研究（42）。p.69。2004。
- 206 秦恒平（1935-）。小説家。同志社大学文学部（美学）卒業、同大学院中退。『清経入水』（1969）で太宰治賞受賞。京都府文化賞・功労賞受賞（2015）。
- 207 秦恒平『からだ言葉の本 付“からだ言葉”拾遺』筑摩書房、p.9、1984。
- 208 春木豊(1933-)。心理学者。早稲田大学名誉教授。日本健康心理学会常任理事、人体科学会会長を歴任。瑞宝中綬章受章（2011）。著書に『動きが心をつくる - 身体心理学への招待』（講談社、2011）、『観察学習の心理学 - モデリングによる行動変容』（川島書店、1982）がある。
- 209 春木豊。「からだ言葉」の心理行動学 - 身体分析と体動訓練 -。早稲田大学人間科学研究 1(1)。p.82。1988。
- 210 金田一春彦『日本語新版（上）』岩波新書、p.194、2012。
- 211 柳瀬和明、マーク・ジュエル編著(1990)、前掲書、pp.12-14。
- 212 立川昭二(1927-) 歴史学者。病理史学者。北里大学名誉教授。鉱業史研究の分野から病気や死についての文化史的考察が専門となる。1997年に『死の風景』でサントリー学芸賞受賞した。
- 213 立川昭二。からだことばが消えた。広告批評(198)。pp.39-40。1996。
- 214 李御寧（1934 -）文学博士。梨花女子大学名誉教授、中央日報社常任顧問。日本では、国際交流基金賞、日本文化デザイン大賞など受賞。日本語の著書に『蛙はなぜ古池にとびこんだか』（学生社、1993）、『「ふろ

- しき』で読む日韓文化』（学生社、2004）、『ジャンケン文明論』（新潮社、2005）などがある。
- 215 李御寧『「縮み」志向の日本人』講談社学術文庫 1816、p.59、2007。  
（初版 1982 年、学生社）
- 216 山極寿一『ヒトはどのようにしてつくられたか』岩波書店、2007。
- 217 東郷吉男．「からだことば」に含まれる比喩の性格について．語源研究 42. p.69. 2004.
- 218 東郷吉男『動植物ことば辞典』東京堂出版、2006。
- 219 高橋秀治『動植物ことわざ辞典』東京堂出版、1997。
- 220 一語彙に数種類の動物が含まれる場合も、それぞれを一つとして数えた。
- 221 表 4-3：P-1、P-7、P-11、P-12、P-13、P-14、P-15、P-21、P-22、P-23。
- 222 表 4-3：P-1、P-2、P-5、P-8、P-18、P-19。
- 223 表 4-3：P-6、P-16、P-17、M-15。
- 224 表 4-3：P-3、P-4、P-9、P-10。
- 225 表 4-3：S-1、S-2。
- 226 表 4-3：M-1、M-2、M-5、M-6、M-8、M-9、M-10。
- 227 表 4-3：M-3、M-4、M-7。
- 228 表 4-3：M-11、M-12、M-13。
- 229 表 4-3：M-14。
- 230 表 4-3：M-15、M-16。
- 231 表 4-4：P-1、S-1、S-3、M-1、M-2、M-3、M-4。
- 232 表 4-4：P-2、P-3、P-4、S-2、M-5。
- 233 表 4-4：M-6。
- 234 表 4-4：P-1、P-3、P-4、M-6。
- 235 南斉（479-502）第 6 代皇帝東昏侯が潘妃のために、地上に金製の蓮華をまき、その上を歩かせたという「南史」斉本紀の故事が由来する。
- 236 ヒトの足の跗蹠は足の後部にあたり、足裏の真ん中から踵部分の 7 つの骨で構成されている箇所をさす。
- 237 本節冒頭、動物類の 48 語彙の内訳参照。  
「鳥類が 16 語彙（雀 3、鴨 2、鶴 2、雉 2、鶏 2、鷺 2、鳥 1、家鴨 1、千鳥 1.）、ほ乳類が 16 語彙（犬 5、馬 4、ヒト 3、牛 2、兎 1、狐 1.）、節足動物が 5 語彙（蟹 1、蚊 3、蟻 1.）、爬虫類が 4 語彙（蛇 2、亀 2.）、魚類が 2 語彙（蛸 1、泥鰌 1.）、両生類が 1 語彙（蛙）、その他 2 語彙（獅子、仏）」の部分。
- 238 米川明彦編『若者ことば辞典』東京堂出版、1997。
- 239 米川明彦．「俗語」という分類（ことばを分類する）．日本語学 23(4). p.82. 2004.
- 240 米川明彦『若者ことば辞典』東京堂出版、1999。
- 241 米川明彦編『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』三省堂、2002。
- 242 米川明彦編『現代若者ことば考』丸善ライブラリー 210、丸善、1996。

- 243 稲垣吉彦『平成・新語×流行語小辞典』講談社現代新書 1449、講談社、1999.
- 244 「顎足付き」は、「顎」と「足」の双方の部類に分類しているため、合計の際には一つとして数えた。
- 245 米川明彦. 集団によって変わる日本語. 月刊日本語 22(10). pp.18-25. 2009.
- 246 「いくら器量良し(美人)でも、姿がだらしないと美しく見えない。いくら姿を整えても、髪をきちんとしていない女性は美しく見えない」という意味。
- 247 藤堂明保, 加納喜光編『学研新漢和大字典』普及版、学習研究社、2005.
- 248 白川静『字訓』新訂、平凡社、2005.
- 249 新村出編『広辞苑』第6版、岩波書店、2008.
- 250 講談社辞典局編『これは使える体ことば辞典』講談社、2000.
- 251 出典：深田祐介『新西洋事情』(1975)
- 252 金田一春彦『日本語新版(上)』岩波新書、pp.180-181、2012.
- 253 小林祐子『身ぶり言語の日英比較』英語教育協議会、pp.18-19、1985.
- 254 小林祐子(1985)、前掲書、p.29.
- 255 秦恒平『からだ言葉の本』筑摩書房、p.15、1984.
- 256 前田富祺『日本語源広辞典』小学館、p.47、2005.
- 257 ③タチ(立)の転、④用を足す意のタシの転、⑤アカシ(赤)の中略、⑥アユミハシリ(歩走)の義、⑦アシ(動下)の義、⑧日本語のはしを意味するビルマ語のアツセ、クメール(Khmer)語(9~15世紀)のアシが訛ったもの、⑨両脚の間の意の「跨」の別音Aと、足の先の意のシ(趾)との合成語で、脚部の総称、である。
- 258 大貫恵美子(1934-)文化人類学者。米・ウィスコンシン大学人類学部博士課程修了。ウィスコンシン大学人類学部教授。主な著書に『コメの人類学—日本人の自己認識』(岩波書店、1995)、『ねじ曲げられた桜—美意識と軍国主義』(岩波書店、2003)など。本論文の参考文献『日本人の病気観—象徴人類学的考察—』(岩波書店、1985)は、1986年にサントリー学芸賞受賞。
- 259 大貫恵美子著『日本人の病気観—象徴人類学的考察—』岩波書店、1985.
- 260 大貫(1985)、前掲書、pp.29-30.
- 261 同上、pp.31-32.
- 262 同上、p.32.
- 263 同上、pp.32-33.
- 264 同上、pp.32-33.
- 265 犬猫飼育率全国調査結果から。一般社団法人ペットフード協会  
<http://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=1&ved=0CB4QFjAA&url=http%3A%2F%2Fwww.petfood.or.jp%2Ftopics%2Fimg%2F140101.pdf&ei=pqyWVYQxhL0bBZbosCg&usg=AFQjCNHtCxCYbTiPADaXdMGB7LYCo7Ktdg&bvm=bv.96952980,d.dGY>.(参照 2015.7.4)

- 266 大貫（1985）、前掲書、p.33.
- 267 同上、pp.33-34.
- 268 同上、p.37.
- 269 同上、pp.39-40.
- 270 同上、p.42.
- 271 同上、p.43.
- 272 同上、p.43.
- 273 梅原猛（1925-）。哲学者。1967年立命館大学教授、京都市立芸術大学長の後、1987年国立国際日本文化センター所長。1992年文化功労者。1999年文化勲章受章。著書多数。日本古代史の再検討を通して「梅原日本学」の裾野を広げ、さらに縄文文化の領域にも踏み込んでいる。
- 274 大貫（1985）、前掲書、p.51.
- 275 神を祭る儀式の際、神前において唱える独特の文体と格調を持った言葉。現存す最古のものが『延喜式』（905～927）と藤原頼長の日記『台詞』（1136-1155）所収の「中臣寿詞」の一編で、普通この二つをさす。
- 276 ギリシャの慣習や特質を語源とした、民俗・社会・時代・文化などの気風、精神、思潮のこと。
- 277 桑原武夫編『文学理論の研究 第二部梅原猛「浄という価値」』岩波書店、pp.78-97、1967.
- 278 大貫（1985）、前掲書、pp.51-54.
- 279 同上、pp.52-53.
- 280 同上、pp.49-50.
- 281 李御寧『「縮み」志向の日本人』講談社学術文庫 1816、講談社、p.145、2007.
- 282 李御寧『「縮み」志向の日本人』講談社学術文庫 1816、講談社、p.145、2007.
- 283 鏡山秀三郎（1933-）。1953年東京のデトロイト商会入社。1961年ローヤルを創業。高度成長期のなか、社員の荒れた心の救済のために始めたトイレ掃除が会社全体を好転させる効果を生み出した。その後、1993年『日本を美しくする会』を発足して、そうじ実践隊『掃除に学ぶ会』を国内122か所、海外（ブラジル、台湾、中国、アメリカ）にも展開。1997年イエローハットに社名変更。翌年社長を退任。『日本を美しくする会』相談役。著書に『一日一話：人間の磨き方・掃除の哲学・人生の心得』（PHP研究所、2004）、『正しく生きる：人として大切なことは何か』（アスコム、2010）など多数ある。
- 284 東芝 group では、5S に（しつこく）と（しっかり）を加えて 7 S とし、ゲーム機器会社の Sega は、（しつこく）、（しっかり）、（習慣）、（信頼）、（スパイラルアップ）を加え 10 S としている。
- 285 古代中国の行事が移入されたもので、野にでて青草を踏んで遊ぶこと。春に男女が野山で遊ぶことや野遊びを意味する。
- 286 中国の隋・唐で流行した風俗で、多数の人が足で大地を踏み鳴らして歌う舞踏で、「歌垣」に類似したものである。

- 287 『字通』、Japan Knowledge、  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200300518000000>、  
 (参照 2015.5.25)
- 288 陰陽道の呪法の一つで、高貴な人が外出する際、邪気を払い安泰を祈願するために、陰陽師が呪文を唱えて特殊な足どりで地を踏み鎮める作法のこと。
- 289 中国周王朝時代、理想的な制度について記された儒家の経書『周礼』のなかの六官に分けられた官職のひとつである「夏官」に由来し、黄金四つ目の仮面をかぶって玄衣、朱裳を着用し、手に戈と楯を持って悪疫を追い払うことをつかさどったものであった。日本では大晦日の夜に宮中で行われる鬼追いの行事（追儺）の際、悪霊を払い疫病を取り除く人物を意味し、時に葬送時に棺を載せた車を先導する役であった。（『日本国語大辞典』、Japan Knowledge、<http://www.jkn21.com/body/display/>、参照 2013.11.20）
- 290 秋田裕毅『ものと人間の文化史 104 下駄』法政大学出版局、p.195、2002.
- 291 五来重『宗教民族集成 5 芸能の起源』角川書店、1995.
- 292 武智鉄二（1912 - 1988）。演出家。映画監督でもあり、1939年『劇評』を創刊。鋭い演劇批評を展開しながら、古典芸能の批評、育成、改革に大きな影響力をもたらし、「武智歌舞伎」と呼ばれる実験的演出で注目され、能や狂言の形式で現代劇を上演。映画作品「白日夢」や「黒い雪」などがある。
- 293 武智鉄二『伝統と断絶』風塵社、p.208、1989.
- 294 安間清. 足で踏む. 「信濃」第23巻11号. pp.913-932. 1971.
- 295 『九州の誕生餅』改版、「九州の誕生餅」実行委員会、2012.
- 296 『九州の誕生餅』改版（2012）、前掲誌、p.3.  
 東日本地方は、幼児に一升餅を背負わせる「背負い餅」が主で、背負った餅の重みで子供が歩けないようにしたり、倒したりして、早く家（または故郷）を離れ遠くに行ってしまうことのない願いをこめる儀式がある。地域によって「ぶっころがし餅」（福島）・「ちから餅」（千葉）・「ぶっすわり餅」（埼玉）等、名称は異なる。（渡部忠世・深澤小百合『ものと人間の文化史 104 もち（糰・餅）』法政大学出版局、p.293、1998）
- 297 佐賀県では、搗き餅を四角い形に伸ばして煮小豆を上にはりばめた上を子供が踏む。熊本県は、月型・日型と呼ぶ紅白の丸餅を重ねて置いた周りを紅白の重ね餅12組で囲み、真ん中の月型（白餅をおおむね月の形にしたもの）・日型（紅餅を丸くしたもの）の餅を踏ませる地域がある。長崎県では、紅白の重ね餅を踏ませ、大分県では、箕の上にはりつけた一重ねの白餅を踏ませ、頭にも一重ねの餅を置いたり、誕生日前でも子供が歩くと箕の上にはりつけた重ね餅に、子供の両手両足を持って尻もちを搗かせる地域がある。鹿児島県では、鹿児島の伝統菓子の材料である「いこ餅」で祝うことが多い。（『九州の誕生餅』改版〔2012〕、前掲誌）

- 298 岡田哲著『コムギ粉の食文化史』朝倉書店、pp.220-221、1993.
- 299 平瀬徹斎作 長谷川光信画『日本山海名物図会』名著刊行会、1969.  
(『日本国語大辞典』、Japan Knowledge,  
<http://www.jkn21.com/body/display/>、参照 2013.11.20)
- 300 Shoe Kitchen 店の広告紙のなかの店内の写真。
- 301 Shoe Kitchen 店の広告紙のなかの図。
- 302 博多ふるさと館にて、本論文筆者撮影 (2015.2.6)。
- 303 「幽霊」とは、人間生活空間に隣接しつつも独立して存在する非日常的空間 (他界) に住む死者の霊であり人間の姿をしている。妖怪とは、生活空間の周縁に広がる非日常空間 (異界) に住む人間以外の姿をした生者と、諏訪 (1988) は定義している。(諏訪春雄『日本の幽霊』岩波書店、pp.11-29、1988)
- 304 初め狩野派を学んだが、洋風画の透視的遠近法や陰影法、明清の写生画体を取り入れて、日本画の装飾画体と融合して平明な新様式を確立。代表作に、金刀比羅宮・大乘寺・金剛寺の障壁画がある。
- 305 同上、p.169.
- 306 江戸後期の国学者。学風は三鏡で『栄華物語』が中心で、『大鏡短観抄』・『栄花物語抄』・『言元梯』・『野乃舎随筆』がある。
- 307 中国明代に記された謝肇淛選による随筆集。天、地、人、物、事の五類に分け政治・経済・社会・文化面などの各方面の資料を交えて考証し、是非を論じたもので江戸時代に広く読まれた。
- 308 中国では、人間の死後の世界を古来の名山である「泰山」の山岳信仰を結びつけて想定していた。
- 309 大石千引『野乃舎随筆』(日本随筆大成 第一期第12巻) 吉川弘文館、p.94、1975.
- 310 諏訪春雄 (1934 - )。学習院大学名誉教授。専門は歌舞伎研究、近世浮世絵、民俗学研究。2013年瑞宝中綬受勲。雑誌『GYROS』編纂。
- 311 花山院の後をめぐる話。生霊となった藤壺が夢にあらわれて復讐する。
- 312 仏教的無常観を基盤とする『平家物語』などの軍配物語や仏教説話集によって、民衆にひろまった他界観は、「十王経」(『仏説地藏菩薩発心因縁十王経』12世紀後半～13紀前半)の地獄に落ちた罪人は通行税として手足を切り落とされるという話に由来する。「十王経」とは、仏教と道教の混成物で死後の世界で亡者を裁く十尊について述べたもので、十仏事(初七日から三回忌までの七日毎行う供養)の流行を促し逆修、追善の仏事を定着させるうえで大きな力をもった。
- 313 諏訪 (1988)、前掲書、pp.169-170.
- 314 同上、pp.169-171.
- 315 同上、pp.173-183.
- 316 鎌倉以降、大和絵、特に絵巻物の中で、画面を区切って遠近を示し、また、場面の転換を示すために用いられるたなびいた霞である「すやり霞」技法。
- 317 善導上人の亡霊が雲に乗って飛来している『法然上人絵伝』(13～14世紀)や、太政威徳天に伴われた日蔵上人が雲を乗り物として描かれている『北野天神縁起』(1291)にみられる。

- 318 諏訪（1988）、前掲書、pp.173-180.
- 319 加治屋健司（1971 -）。京都市立芸術大学芸術資源研究センター准教授。日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ代表。表象文化論学会理事。共著に『マーク・ロスコ』（淡交社、2009）、『Count 10 Before You Say Asia:Asian Art after Postmodernism』（国際交流基金、2009）などがある。
- 320 加治屋健司。日本の中世及び近世における夢と幽霊の視覚表象。広島市立大学芸術学部芸術学研究科紀要 16. pp.37-44. 2011.
- 321 吉田幸一『絵入本源氏物語考』青裳堂書店、p.29、1987.
- 322 諏訪（1988）、前掲書、p.180.
- 323 Rinzler, Ann Carol『LEONARDO'S FOOT: How 10 toes, 52 bones, and 66 muscles SHAPED THE HUMAN WORLD』、Bellevue Literary Press、2013.
- 324 1世紀のローマ人建築技師 Marcus Vitruvius Pollio の 'De Architectura' という 10 冊から成る論文を参考にして描いている。標準的な成人男性の理想的人体構成 (proportion) に力点をおいた論文。
- 325 医学的分類である靴を履く部分である足の部分。
- 326 Elliot Wolfson (1956 -) が、「からだ」についてのユダヤ人の見解をまとめた随筆集である 'People of the Body' の中の一つである "Images of God's feet." のなかで述べている内容。
- 327 選択肢は、foot と toe、体液、体格、髪、筋肉、刺青などの装飾、男性器、腹と臍、民族性、胸、足、尻、口と唇と歯、体毛、指関係や足の爪、鼻、耳、首、体臭である。
- 328 Wilder Penfield (1891-1967)、Henri Jasper (1906-1999)、Vilayanur Ramachandran(1951-)らの脳と感覚能に関する研究による。
- 329 松浦理英子『親指 P の修行時代』(女流文学賞受賞、1994)は、「あし」の親指を男性器として描いている。
- 330 波平恵美子『ケガレの構造』青土社、p.208、1992.
- 331 波平恵美子 (1942-)。専門は文化人類学であるが、医療人類学・宗教人類学・ジェンダー論にも精髓している。お茶の水女子大学名誉教授。主な著書に『日本人の死のかたち』（朝日新聞社、2004）、『いのちの文化人類学』（新潮社、1996）、『ケガレの構造』（新潮社、1984）など多数ある。
- 332 波平恵美子 (1992)、前掲書、pp.175-176.
- 333 Rinzler(2013)、前掲書、pp.68-69.
- 334 同上、pp.150-151.
- 335 日本の「あし」に関することの記述は、2011年に信州大学の科学者たちが足跡を三次元解析して歩行形態を分析したところ、足跡も法科学的な個人の識別となることを発見したことだけである。
- 336 法然の教えをどこまで正しく理解しているかが試された場面（信行の座）の図で、遅れて駆けつけてきた僧（法力）が、「信不退の座」（信心をい

- ただくことを大切とする)の方に座ることを申しでている場面(『本願寺聖人親鸞伝絵上巻・第六段』)
- 337 本願寺創建者覚如の臨終の場に、忍び腰で簀の子の上に駆け上がる僧の絵。(小松茂美編集・解説『続日本の絵巻9:慕帰絵詞』巻十、中央公論社、p.96、1990)
- 338 住友和子編集室、吉村明彦編『靴脱ぎ』(日本人とすまい1)リビングデザインセンター・光琳社出版、p.107、1996.
- 339 書院造で主殿または広間の東南隅から突出した部分で寝殿造中門廊の名残。
- 340 小松茂美編集・解説『続日本の絵巻3:法然上人絵伝下』中央公論社、p.112、1990.
- 341 同上、p.13.
- 342 三谷一馬『江戸庶民風俗図絵』三樹書房、p.144、1999.
- 343 屋台や店舗などで、飯と総菜用の野菜や魚、豆などの煮物を売ったり食べさせたりする業のこと。
- 344 中世、公家・武家・寺家などに仕えた従者の呼称。
- 345 三谷一馬(1999)、前掲書、p.343.
- 346 法然の高弟の一人証空の西山の庵室に、遠近から集まってきた僧たちが「白木の念仏」を聴きに集まってきたところの絵(小松茂美編集・解説『続日本の絵巻3:法然上人絵伝下』中央公論社、pp.98-99、1990)
- 347 『日本国語大辞典』、Japan Knowledge,  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200201195cc5yBTL1MRE> (参照 2015.2.5)
- 348 臨済宗楊岐派白雲守端の門下。「脚下照顧」と答えた圓悟克勤は、仏鑑慧懃、仏眼清遠とともに「三仏」と称される禅匠である。
- 349 圓悟克勤。仏鑑慧懃、仏眼清遠とともに五祖法演の弟子の「三仏」と称される禅匠の一人。
- 350 長野県長野市の曹洞宗円福寺住職であり社会運動家であった藤本幸邦のことば。「だれかがみだしておいたら、だまってそろえてあげよう、そうすればきっと世界中のひとの心もそろうでしょう」と続く。
- 351 『日本大百科全書』、Japan Knowledge,  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000081382> (参照 2015.6.1)
- 352 住友和子編集室・吉村明彦『日本人とすまい①靴脱ぎ KUTSU-NUGI』リビングデザインセンター株式会社、p.11、1996.
- 353 京都諸家中の乗馬弓矢の実例故事について記した『家中竹馬記』(1511)に「下馬して、左の沓計脱て礼をするは、片沓の礼と云」とある。
- 354 「先沓揖正笏乍立一揖而脱沓、無笏者用扇」神拝伝(1736頃)
- 355 田中小三朗著『小学礼法詳説 実地修身』田中幾之助増補出版人相続人、前川善兵衛出版人、p.26、1882。(近代デジタルライブラリー、<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/759094>、参照 2015.7.8)
- 356 小笠原敬承斎『図解美しいふるまい:小笠原流礼法入門』淡交社、p.41、1999.

- 357 『日本大百科全書』、Japan Knowledge,  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000040477> (参照 2015.7.5)
- 358 『日本大百科全書』、Japan Knowledge,  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000182726> (参照 2013.8.1)
- 359 論文筆者撮影 (2013.8.3)
- 360 大貫恵美子 (1985)、前掲書、p.31 (写真1)。
- 361 The Japan News、読売新聞、p.13、2014.4.26.
- 362 太政大臣藤原忠実の日記『殿暦』(1103)に、一月三日「余対南階より下て立、沓取盛家 五位也」とある。
- 363 『太平記』(14世紀後半)四〇・中殿御会事「右は摂津掃部頭能直、薄色の指貫、白青織物の狩衣著て沓の役に候す」
- 364 15世紀頃、武家の邸宅や寺家の住房で用いられた建築様式の名称。
- 365 室町時代から江戸時代初期に、主殿あるいは大広間と遠侍は玄関との間にあって、取り次ぎの儀礼が行われた場所をさした。江戸時代に、客の送迎に際して礼をするために設けた板敷きを「式台」と呼ぶことが多い。
- 366 『日本国語大辞典』、Japan knowledge, <http://www.jkn21.com>, (参照 2013.8.20)
- 367 尚学図書編『故事俗信ことわざ大辞典』小学館、1982.
- 368 『日本大百科全書』、Japan Knowledge,  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000244083> (参照 2015.7.5)
- 369 長崎県西彼杵郡伊王島の「伊王島村郷土史」(松尾謙治)に収録されている話。(柳田國男『柳田國男全集 第五巻』筑摩書房、pp.185-186、1997)
- 370 虫たちが集まって遊んでいたら、一匹の虫が急に腹が痛くなり、医者を呼ぶことにした。年老いた虫の発案で、足が多い‘むかで’が一番早く行けるに違いないということで、むかでに頼み皆で一生懸命に看病しながら、むかでの帰りを待っていた。しかし、むかでが一向に戻ってこないのので‘むかで’の家に行ってみると、むかでが汗だくになって草鞋をはいているところであった。(波多野完治等編『名作と伝記のドラマ集』国土社、pp.51-17、1962)
- 371 むかでがなめくじを誘って、伊勢参りに行く日の朝、待ち合わせのところにむかでが現れないので、むかでが先に行ってしまったと思ったなめくじは一生懸命に後を追った。ところが、伊勢まで行ってもむかでに会えず、もう先に帰ったかもしれないと、一生懸命に戻ってむかでの家に行ってみると、むかでがまだ伊勢参りのための草鞋作りに励んでいたことを発見する話。(立石憲利編著『語りによる岡山むかし話 101選 上』山陽新聞社、pp.26-29、1990)

- 372 むかでとなめくじがどちらが早く江戸まで着けるかという競争で、あつというまになめくじを追い越して先に着いたむかでだが、宿で草鞋を脱ぐのに手間がかかり、後で到着したなめくじが先に宿に入って勝ちとなる話。  
(稲田浩二責任編『日本昔話通観 第15巻 三重・滋賀・大阪・奈良・和歌山』同胞社、p.448、1977)
- 373 尚学図書編『故事俗信ことわざ大辞典』小学館、p.1995、1982.
- 374 同上、p.1485.
- 375 同上、p.1995.
- 376 小松茂美(1985)、前掲書、p.70.
- 377 前田富祺監修『日本語源大辞典』小学館、p.365、2005.
- 378 平沢彌一郎(1923-2002)。運動生理学者。東京工業大学名誉教授。専門は神経生理学であるが、スタシオロジー(身体静止学)理論を確立。「足の裏博士」として知られる。主な著書に『足のうらをはかる』(ポプラ社、1978)、『足の裏は語る』(筑摩書房、1991)がある。
- 379 平沢彌一郎「6.日本人の立ち構え」[佐藤方彦(1988)、前掲書、pp.107-108]
- 380 同上、p.108.
- 381 北海道美沢川畔遺跡出土したもの。[同上、前掲書、p.108.]
- 382 佐藤方彦(1988)、前掲書、p.108.
- 383 遠藤晃. 石川仁. 千葉克司. 重茂克彦. 日本人高校生の体格と体型の年次推移. 日本医事新報 3628. p.50. 1993.
- 384 田中康仁, 北田力編集(2010)、前掲書、pp.137-138.
- 385 1980年代末に全日本履物団体協議会が行った調査及び、河内らの追跡調査でも認められるという。(河内まき子. 日本人の足の形. 科学 78. pp.58-59. 2008)
- 386 河内まき子(2008)、前掲論文、p.58.
- 387 佐藤方彦(1988)、前掲書、pp.113-114.
- 388 平沢彌一郎「6.日本人の立ち構え」[同上、pp.107-108]
- 389 佐藤方彦(1988)、前掲書、p.139.
- 390 近藤義忠(2003)、前掲論文、p.113. 2003.
- 391 阿久津邦男(1975)、前掲書、pp.139-140.
- 392 八十八所は、阿波国(徳島県)に24カ所、土佐国(高知県)に16カ所、伊予国(愛媛県)に26カ所、讃岐(香川県)に22カ所ある。(『日本大百科全書』、Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200300259700000>、参照 2014.7.10)
- 393 貝原益軒著、伊藤友信訳『養生訓』講談社、p.266、2009.
- 394 同上、p.351.
- 395 同上、p.5.
- 396 Dishman,R. K.,et al.Activity wheel running reduces escape latency and alters brainmonoamine levels after footshock. Grain Res.Bull., 42, pp.399-406. 1997.

- 397 北一郎.大塚友実.西島壮.うつ・不安にかかわる脳内神経活動と運動による抗うつ・抗不安効果. スポーツ心理学 37(2). pp.133-140. 2010.
- 398 厚生労働省ホームページ 2008年統計調査結果・患者調査。
- 399 国民健康・栄養調査（厚生労働省ホームページ、  
[http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kenkou\\_eiyou\\_chousa.html](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kenkou_eiyou_chousa.html)、参照 2014.7.9)
- 400 谷窠尋徳.近世における江戸庶民の旅の歩行距離について～道中双六の分析を中心に～.東洋法学 52(1). 2008.
- 401 葛飾北斎画『北斎漫画』「初編」、東京美術、2002.
- 402 入澤達吉(1920)、前掲論文、p.616.
- 403 道端などにしゃがみこむ姿勢、和式トイレで大便をする姿勢が由来の名称。
- 404 街にたむろする新風俗の若者（ヤンキー）が道端でしゃがみこんで坐る姿勢を意味する俗語。
- 405 ところ構わず腰を地につけて坐りこむ若者のこと。菜食主義を意味する「ベジタリアン」と地面を意味する俗語「地べた」をかけたあわせた俗語。東京・渋谷近辺から出現した。（『情報・知識 imidas』新語流行語、997、Japan Knowledge,  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=50010N-05-1-015-97>、参照 2014.7.1)
- 406 階段や駐車場の輪止め、道路の縁石など、段差のあるところに座り込む若者のことで「ジベタリアン」と「段差」をかけた俗語。
- 407 矢田部英正（2011）、前掲書、pp.170-192.
- 408 『デジタル大辞泉』、Japan Knowledge,  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001016418900>（参照 2014.7.2）
- 409 レオナルド・ダ・ビンチ（Leonardo da Vinci）。イタリア・ルネッサンス期の画家、彫刻家、また科学者、技術者、哲学者。ルネッサンス期における典型的な「万能人」と目されている。『日本大百科全書』、Japan Knowledge,  
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000241967>（参照 2015.7.8）
- 410 石塚忠雄『足と健康』全日本病院出版会、p.1. 1988.
- 411 田中宏暁.<運動と高血圧> 運動療法の基本 生活習慣病に対する運動手法をどうするか?（解説/特集). 血圧 (1340-4598)19 (4) . pp.354-360. 2012.
- 412 The Japan News、読売新聞、p.4、2015.7.8.

## 参考文献

- 秋田裕毅『ものと人間の文化史 104 下駄』法政大学出版局、2002.
- 阿久津邦男『歩行の科学』不昧堂新書 15、不昧堂、1975.
- 浅見高明. 正坐を見直す. バイオメカニズム学会誌 13(1). pp.9-10. 1989.
- 石塚忠雄『足と健康』全日本病院出版会、1988.
- 石原道博編訳『新訂魏志倭人伝他三篇』岩波書店、2003.
- 一般社団法人ペットフード協会ホームページ
- <http://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=1&ved=0CB4QFjAA&url=http%3A%2F%2Fwww.petfood.or.jp%2Ftopics%2Fimg%2F140101.pdf&ei=pqyWVYQxhLObBZbosCg&usg=AFQjCNHtCxCYbTiPADaXdMGB7LYCo7Ktdg&bvm=bv.96952980,d.dGY>
- 稲垣吉彦『平成・新語×流行語小辞典』講談社現代新書 1449、講談社、1999.
- 稲田浩二責任編『日本昔話通観第 15 卷 三重・滋賀・大阪・奈良・和歌山』同胞社、1977.
- 入澤達吉. 日本人の坐り方に就て. 史学雑誌 31(8) . pp.589-617. 1920.
- 『鶉衣』(俳文集；前編 1787 年)
- 梅崎春生『日の果て』新潮社、2008.
- エセル・ハワード著 / 島津久大訳『明治日本見聞録：英国家庭教師婦人の回想』講談社、1992.
- 榎本準一『下駄本：下駄の買い方・履き方』平安工房、2001.
- 遠藤晃・石川仁・千葉克司・重茂克彦. 日本人高校生の体格と体型の年次推移. 日本医事新報 3628. pp.48-50. 1993.
- 大石千引『野乃舎随筆』(日本随筆大成 第一期第 12 卷) 吉川弘文館、1975.

- 大分県杵築市「きつきお城まつり」2015年度版
- 大築立志『手の日本人、足の西欧人』徳間書店、1989.
- 大貫恵美子『日本人の病気観 - 象徴人類学的考察 - 』岩波書店、1985.
- 岡田哲『コムギ粉の食文化史』朝倉書店、1993.
- 小笠原敬承斎『図解美しいふるまい：小笠原流礼法入門』淡交社、1999.
- オノレ・ド・バルザック著 / 山田登世子訳『風俗のパトロジー』新評社、  
1986.
- 貝原益軒著・伊藤友信訳『養生訓』講談社、2009.
- 葛飾北斎（画）『北斎漫画「初編」』東京美術、2002.
- 葛飾北斎（画）『北斎漫画 第3巻』東京美術、2003.
- 加治屋健司. 日本の中世及び近世における夢と幽霊の視覚表象. 広島市立大学  
芸術学部芸術学研究科紀要 16. pp.37-44. 2011.
- 狩野長信（画）・野間清六・山口蓬春（解説）『花下遊楽図』美術出版社、  
1955.
- 樺山紘一『歴史のなかのからだ』岩波書店、2008.
- 河合隼雄・中沢新一『「あいまい」の知』岩波書店、2003.
- 川本利恵・中村充一. 正坐の源流. 東京家政学院大学紀要 39. pp.31-49.  
1999.
- 北一郎・大塚友実・西島壮. うつ・不安にかかわる脳内神経活動と運動による  
抗うつ・抗不安効果. スポーツ心理学 37(2). pp.133-140. 2010.
- 北村一夫『吉原のホログラフイー：江戸・男と女の風俗』六興出版、1987.
- 衣笠一閑宗葛『堺鑑』、1684
- 清原裕. 認知症の症候学・治療学および予防への展望. 認知症予防への展望.  
超高齢社会を迎え、今後考えるべき課題はなにか. 認知症のコホート研究久  
山町研究（解説/特集）. 老年精神医学雑誌 26 増刊 I. pp.138-144. 2015.
- 『九州の誕生餅』改版、「九州の誕生餅」実行委員会、2012.

- 金田一春彦『日本語新版（上）』岩波新書、2012.
- 金田一春彦『日本語』岩波新書、1957.
- 桑原武夫編『文学理論の研究』岩波書店、1967.
- 『現代用語の基礎知識』自由国民社、1998~2013.
- 小泉八雲著・平川祐弘編『神々の国の首都』講談社、1990.
- 厚生労働省ホームページ（<http://www.mhlw.go.jp/>）
- 講談社辞典局編『これは使える「体ことば」辞典』講談社、2000.
- 甲野善紀・田中聡『身体から革命を起こす』新潮社、2006.
- 小林祐子『身ぶり言語の日英比較』英語教育協議会、1985.
- 小松茂美編集・解説『続日本の絵巻』13、中央公論社、1991.
- 小松茂美編集『日本絵巻大成 3』中央公論社、1977.
- 小松茂美編集・解説『続日本の絵巻』中央公論社、1990.
- 『国史大辞典』、Japan Knowledge,  
<http://japanknowledge.com/lib/search/basic/index.html?q1=&r1=1&sort=1&cids=30020%2C30030%2C30050%2C30100&rows=20&pageno=1&s=f>
- 五来重『宗教民族集成 5 芸能の起源』角川書店、1995.
- 近藤四郎. 日本人の足と靴. 科学朝日 13(4). pp.30-33. 1953.
- 近藤四郎『足のはたらきと子どもの成長』築地書館、1981.
- 近藤四郎『足の話』岩波新書、1979.
- 近藤義忠. 日本人の健康意識と行動（その5）－文化としてのウォーキング－.  
仙台白百合女子大学紀要 7. pp.107-114. 2003.
- 河内まき子. 日本人の足の形. 科学 78(1). pp.57-59. 2008.
- 笹本信子. 足の着地期・離地期からみた和装時の歩容に関する研究. 家政学  
雑誌 3（8）. pp.695-704. 1986.
- 佐藤達夫監修『からだの地図帳』講談社、2013.

佐藤方彦編『日本人の生理』朝倉書店、1988.

The Japan News、読売新聞.

ジェーン・グドール著 / 松沢哲朗日本語版監修 訳『チンパンジー』くもん出版、1994.

『字通』、Japan Knowledge、

<http://japanknowledge.com/lib/search/basic/index.html?q1=&r1=1&phrase=0&sort=1&cids=20030&rows=20&pageno=1&s=f>

小学館辞典編集部編『日本方言辞典：標準語引き』小学館、2004.

尚学図書編『故事俗信ことわざ大辞典』小学館、1982.

『情報・知識 imidas』2008、Japan Knowledge、

<http://japanknowledge.com/lib/search/basic/index.html?q1=&r1=1&sort=1&cids=20010%2C20020%2C20030%2C20040%2C30020%2C30030%2C30050%2C30100%2C50010&rows=20&pageno=1&s=f>

白川静『字訓』新訂、平凡社、2005.

進藤宗洋. 健康づくりのための運動 厚生省の健康づくりのための運動所要量の論拠. 健康医学 6(2). pp.42-55. 1992.

スエンソン・エドゥアルド著 / 長島要一訳『江戸幕末滞在記』新人物往来社、1989.

住友和子編集室・吉村明彦『日本人とすまい①靴脱ぎ KUTSU-NUGI』リビングデザインセンター株式会社、1996.

諏訪春雄『日本の幽霊』岩波書店、1988.

秦恒平『からだ言葉の本 付“からだ言葉”拾彙』筑摩書房、1984.

高瀬梅盛『類船集』般庵野間光辰先生華甲記念会、1969.

高橋秀治『動植物ことわざ辞典』東京堂出版、1997.

高取正男『日本的思考の原型』平凡社、1995.

- 武智鉄二『伝統と断絶』風塵社、1989.
- 多田道太郎『からだの日本文化』潮出版社、2002.
- 多田道太郎『しぐさの日本文化』筑摩書房、1972.
- 立川昭二. からだことばが消えた. 広告批評 198. pp.39-40. 1996.
- 立川昭二『からだことば』早川書房、pp.83-88、2000.
- 立川昭二. 日本人の健康観. 日本人間ドック学会 20 (5). pp.842-846.2006.
- 立石憲利編『語りによる岡山むかし話 101 選 上』山陽新聞社、pp.26-29、  
1990.
- 田中康仁・北田力編集『図説 足の臨床』改訂 3 版、メジカルビュー社、  
2010.
- 田中宏暁. <運動と高血圧> 運動療法の基本 生活習慣病に対する運動手法をどう  
するか? (解説/特集). 血圧 (1340-4598)19 (4) . pp.354-360. 2012.
- 谷釜尋徳. 近世における江戸庶民の旅の歩行距離について道中双六の分析を中  
心に. 東洋法学 52(1). pp.330-313. 2008.
- 谷釜尋徳. 幕末～明治初期における日本人の歩行の特徴について. 日本体育大  
学紀要 36(1). pp.1-18. 2006.
- 近松門左衛門『傾城酒呑童子』武蔵屋叢書閣、1894.
- 辻村明・長山泰久. 統計からみたセカセカ日本. 文芸春秋. pp.138-146.  
1979.
- 辻村明『高速社会と人間』かんき出版、1980.
- 槌田満文『江戸東京職業図典』東京堂出版、2003.
- 土屋喬雄・玉城肇訳『ペルリ提督日本遠征記 (四)』岩波書店、1953.
- 『デジタル大辞泉』2012、Japan Knowledge,  
<http://japanknowledge.com/lib/search/basic/index.html?q1=&r1=1&sort=1&cids=20020%2C20030%2C20040%2C30020%2C30030%2C30050%2C30100%2C50010&rows=20&pageno=1&s=f>

- 東郷吉男編『からだことば辞典』東京堂出版、2004.
- 東郷吉男・上野信太郎著『動植物ことば辞典』東京堂出版、2006.
- 東郷吉男. 「からだことば」に含まれる比喩の性格について. 語源研究 42.  
pp.62-69. 2004.
- 藤堂美香. 近代日本における歩行術と学校教育での歩行運動に関する考察. 奈良女子大学スポーツ科学研究 10. pp.13-23. 2008.
- 藤堂明保編『学研 漢和大字典』学習研究社、1995.
- 藤堂明保・加納喜光編『学研新漢和大字典』普及版、学習研究社、2005.
- 夏目漱石『虞美人草』岩波書店、1990.
- 波平恵美子『ケガレの構造』青土社、1992.
- 波平恵美子『ケガレ』講談社、2009.
- 南部せんべい巖手屋ホームページ [http://www.iwateya.co.jp/s\\_fukumimi.html](http://www.iwateya.co.jp/s_fukumimi.html)
- 新村出編『広辞苑』第6版、岩波書店、2008.
- 『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2002、Japan Knowledge ,  
<http://japanknowledge.com/lib/search/basic/index.html?q1=&r1=1&sort=1&cids=20030%2C20040%2C30020%2C30030%2C30050%2C30100%2C50010&rows=20&pageno=1&s=f>
- 『日本大百科全書』(ニッポニカ)、Japan Knowledge,  
<http://japanknowledge.com/lib/search/basic/index.html?q1=&r1=1&sort=1&cids=10010%2C20030%2C30020%2C30030%2C30050%2C30100&rows=20&pageno=1&s=f>
- 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成 才貳期 卷四』「筠庭雑録」日本随筆大成刊行会、1927-1931.
- 日本レクリエーション協会監修・増田靖弘他編集『遊びの大事典』東京書籍、1989.

- 野村雅一『身ぶりとしぐさの人類学』中公新書、1996.
- 野村雅一編『叢書1・身体と文化―第1巻 技術としての身体』大修館、1999.
- 波多野完治等編『名作と伝記のドラマ集』国土社、1962.
- 春木豊. 「からだ言葉」の心理行動学―身体分析と体動訓練―. 早稲田大学人間科学研究 1(1). pp.73-82. 1988.
- 平沢彌一郎『足の裏は語る』筑摩書房、1991.
- 平瀬徹斎作・長谷川光信画『日本山海名物図会』名著刊行会、1969.
- 深田祐介『新西洋事情』講談社、1981.
- 福岡裕爾. 身振. 常設展示室(部門別)解説 387. 福岡市博物館. 2011.
- 『本願寺聖人親鸞伝絵上巻・第六段』善慶寺、1983.
- 前田富祺『日本語源広辞典』小学館、2005.
- 松浦理英子『親指Pの修行時代』河出書房新社、1993.
- 松沢哲朗『想像するちから―チンパンジーが教えてくれた人間の心』岩波書店、2011.
- 丸谷才一『笹まくら』河出書房新社、1975.
- 三谷一馬『江戸庶民風俗図絵』三樹書房、1999.
- 『MORE』May 2014 No.443、集英社、2014.
- デズモンド・モリス『ボデイ・ウォッチング』小学館、1992.
- デズモンド・モリス著 / 日高敏隆訳『裸のサル: 動物学的人間像』河出書房新社、1969.
- 安間清. 足で踏む. 「信濃」第23巻11号. pp.913-932. 1971.
- 矢田部英正『美しい日本の身体』ちくま新書、2007.
- 矢田部英正『日本人の坐り方』集英社、2011.
- 柳宗悦『手仕事の日本』岩波書店、1985 (電子ブック：  
[http://www.aozora.gr.jp/cards/001520/files/51820\\_50713.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/001520/files/51820_50713.html))
- 柳田國男『明治大正世相史篇：柳田國男全集 26』筑摩書房、1990.

- 柳田國男『柳田國男全集 第五卷』筑摩書房、1997.
- 柳瀬和明 / マーク・ジュエル編著『ボディ・イングリッシュ』三友社出版、1990.
- 山折哲雄『坐の文化論』佼成出版社、1981.
- 吉澤小百合、原田奈名子、原部聖子. 女子大学生における内股歩行の客観と主観による出現頻度の違い. 佐賀大学紀要 13(2). pp.35-42. 2009.
- 米川明彦編『若者ことば辞典』東京堂出版、1997.
- 米川明彦編著『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』三省堂、2002.
- 米川明彦編『現代若者ことば考』丸善ライブラリー 210、丸善、1996.
- 米川明彦. 「俗語」という分類 (ことばを分類する). 日本語学 23(4). pp.70-82. 2004.
- 米川明彦. 集団によって変わる日本語. 月刊日本語 22(10). pp.18-25. 2009.
- 李御寧『「縮み」志向の日本人』学生社、1982.
- 李御寧『「縮み」志向の日本人』講談社学術文庫 1816、講談社、2007.
- 渡部忠世・深澤小百合『ものと人間の文化史 104 もち (糯・餅)』法政大学出版局、1998.
- Bramble, D. M. & Lieberman, D. E. Endurance running and the evolution of Homo. *Nature* 432. pp.345-352. 2004.
- Dishman RK1, Renner KJ, Youngstedt SD, Reigle TG, Bunnell BN, Burke KA, Yoo HS, Mougey EH, Meyerhoff JL. Activity wheel running reduces escape latency and alters brain monoamine levels after footshock. *Brain Res. Bull.* 42, pp.399-406. 1997.
- Hearn, Lafcadio. *Glimpses of unfamiliar Japan*. 2nd ser. Leipzig Bernhard Tauchntz. 1910.
- Howard, Ethel. *Japanese Memories*. The Chapel River Press. In *Collection California Digital Library*.

<https://ia601407.us.archive.org/16/items/japanesememories00howarich/japanesememories00howarich.pdf>, 1918.

Le Vay, Benedict 'Ben Le Vay's Eccentric Britain. Bradt Travel Guides (Eccentric Guides). Bradt Travel Guides. 2011.

Levine, R. & Wolff, E. Social time : The heartbeat of culture. Psychology Today. pp.28-35.1985.

Megan Teychenne, Kylie Ball, Jo Salmon. Physical activity and likelihood of depression in adults: A review. Preventive Medicine 46. pp.397-411. 2008.

Perry, Matthew Calbraith. Narrative of the expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan. D.Appleton and Company. 1856. (<http://ebook.lib.hku.hk/CTWE/B36599566/>)

Rinzler, Ann Carol. LEONARDO'S FOOT : How 10 toes, 52 bones, and 66 muscles SHAPED THE HUMAN WORLD. Bellevue Literary Press. 2013.

Takamura, Kazuyuki., Ohyama, Shiro., Yamada, Teruki. Ishinishi, Noburu. Changes in Body Proportions of Japanese Medical Students between 1961 and 1986. America Journal of Physical Anthropology 77. pp.17-22. 1988.

## 図表一覧

### 第一章 日本人の「あし」の特徴

図 1-1	右足の骨と関節の図	24
写真 1-1	チンパンジーの足の写真	25
図 1-2	女性曲持ちの図	26
図 1-3	男性曲持ちの図	26
図 1-4	「足すもふ」の図	28

### 第二章 歩容における「あし」

図 2-1	『花下遊楽図屏風』東京国立博物館所蔵	35
写真 2-1	女性服飾雑誌の中のモデルの立ち姿の写真	38
図 2-2	4コマ漫画『けいおん!』(K-ON!)の女学生の立ち姿	38
写真 2-2	「うちわ」歩行の一例	39
図 2-3	履物の違いによる男子の歩幅	43
図 2-4	履物の違いによる女子の歩幅	43
写真 2-3	「花魁道中」の写真	51
図 2-5	「八文字」歩容の踏み方の図	51

### 第三章 「坐」

図 3-1	説文解字の「坐」	55
図 3-2	「黒田 24 騎図」	61
表 3-1	「坐」姿勢が基盤となった語彙	62
図 3-3	「あし」の各部位別方言数	63
図 3-4	柿本人麻呂の歌膝姿	64
図 3-5	肘掛として使われる膝の例	64

図 3-6 『吉備大臣入唐絵巻』の飛行の図 ……………66

#### 第四章 言語的視座からの「あし」

写真 4-1 「ふくみみせんべい」の写真 ……………66

図 4-1 耳介の図 ……………68

表 4-1 「からだことば」の語彙数の最多順の表 ……………74

図 4-2 100 以上の語彙数がある「からだ」の部位の最多順位 ……………75

表 4-2 動物類のなかの「あし」に関することわざ・慣用句 ……………82

表 4-3 植物類のなかの「あし」に関することわざ・慣用句 ……………89

図 4-3 動物類の種類別語彙数 ……………89

図 4-4 動物類のなかで用いられた「あし」の部位 ……………89

図 4-5 動物類の「あし」の動きの種類別語彙数 ……………90

表 4-4 「新からだことば」集 ……………95-97

図 4-6 「新からだことば」の各部位の語彙数 ……………97

表 4-5 「新歩容」名称表 ……………99

表 4-6 明治期の「新からだことば」集 ……………102

表 4-7 大正期の「新からだことば」集 ……………103

表 4-8 歩容語彙表 ……………105-106

図 4-7 「歩き」と「走り」の歩容語彙数の速度別分類 ……………107

#### 第五章 日本人と「あし」

写真 5-1 福岡県の餅踏みの様子の一例 ……………126

図 5-1 麩師の「足踏み」製法の様子 ……………128

図 5-2 米踏みの使用風景図 ……………128

写真 5-2 Shoe Kitchen 店内 ……………129

図 5-3 Shoe Kitchen の従業員の図 ……………129

写真 5-3 「烏賊干し」の絵	131
-----------------	-----

## 第六章 日本人と「はきもの」

図 6-1 『本願寺聖人親鸞伝絵上巻』第六段	145
図 6-2 『慕帰絵詞』巻十	146
図 6-3 『法然上人絵伝上』巻十二	147
図 6-4 『法然上人絵伝下』巻三十八	147
図 6-5 煮売屋の図	148
図 6-6 脇本陣の入口の図	148
図 6-7 『法然上人絵伝下』巻四十	149
図 6-8 学校教育での「はきもの」の始末の教えの解説図	152
写真 6-1 玄関での「はきもの」の脱ぎ方の作法	152
写真 6-2 トレーニング室入口に並べられた運動靴	154
写真 6-3 玄関口並べられた「はきもの」	156
図 6-8 下足番の図	158
表 6-9 「はきもの」の着脱に関する慣用句	158-159
図 6-9 草鞋・下駄・草履の慣用句の分類を示した総数比	163
図 6-10 『慕帰絵詞』	165

## 終章

図 7-1 平伏の「坐」の典型例	175
------------------	-----